# 明治四十年度

# 今年度の方針に就いて

創立以來第七回目の學年を迎ふるに當り、我々は、今學年の計畫に就いて大いに思慮を廻らさなければならぬ。私は少しも成功したと云ふ考は起らない。此の一年間に本校が非常なる發展をした事は、澁澤男爵も云はれたのである。然し此の後の四年間は、今迄六年間の二倍も三倍も進歩しなければ、到底世界の潮流に追ひ付いて行く事は出來ないのである。若しも本校が希望して居る處の發展を遂ぐる事が出來なかつたならば、本校が生命を保つ事が出來ぬのみならず、我が國家にも、甚だ悲しむべき影響を及ぼすに至るのである。我々は、日露戰爭には幸にして、勝利を得ましたが、是は我が國が、世界の强國と競爭したる序幕に過ぎぬ。今や第二期の商工業の競爭は更に激烈なる勢を以て、晝夜瞬時も止む時なく、進行しつゝあるのである。五十年間親交を續けて來た米國でさへも、幼稚な者として居つた我が國が、一度覺醒して競爭場裡に立つや、好敵手として對したのである。商工業の方面に於て、米國は如何なる態度を、我が國に向つて執つて居るか、一例を擧ぐれば、我が國より米國等へ輸出せんとすれば、七割以上の非常なる關稅を、課せらるゝのである。

今日の競爭の勝敗は、實力の有無に依つて、決せらるゝのである。物質上に現れた我が國の實力を顧れば、經濟の方面に於ては、米國の富の十分の一にも及ばないのである。次ぎに知力を比較すれば、我が國民が過去二十三年間に發明した數は、一萬一千百九十餘であつたが、其の中實用に供し得らるゝものは、僅かに五千餘しかなく、餘は大抵西洋に發明せられたるものゝ模倣か然らざれば商標に過ぎないのである。然るに米國に於ては、同じ二十三年間に、四十六萬種餘の發明があつた。卽ち年々二萬種餘發明されたのである。我が國民が二十三年間に働かせた知識は、米國人の一ケ年間のそれと比較しても、尙四分の一にしか當らない。亦學術の方面に於ても我が國は未だ獨立したとは云はれぬ。若しも外國から一册も書物を供給されぬならば、今日と雖も猶我が國の學術は、成立せぬであらう。實に情ない事である。若しも知識がなかつたならば、精神も出來ないのである。知識のみあつて、精神が無いとは僞で、それは眞の知識でなく、人から、與へられたのを丸呑みにした計りで、少しも消化しないから、精神も出來ないのである。實に知識は、思想と行爲の材料である。而して此の知を養ふのは、卽ち教育である。夫故に歐米に於ては、個人も、國家も、教育の

爲ならば、巨額を費して惜しまないのである。然し我が國では、中々それと比肩し得るだけにする經濟力がないのである。

若しも我が國が知力の競爭に敗北するならば、其の結果は如何であらうか。我が國家のみならず、東洋を暗黑に投ずるのである。夫であるから、我々は、決して過去の歷史を顧みて滿足して居る事は出來ない、此の七學年に於て、新に進まなければならぬ點を見出し、それに向つて、全體が力を集注しなければならぬ。是は實に全校の生徒が今日に於て、熟慮しなければならぬ所であるが、殊に全校の指導者である三年生は、よく〳〵考へて是を明らかにして居らねばならぬ。

第一回生に依つて、感情的方面の發達を遂げ、第二回生は知的發達をなし、三回生は全體の意志の統一を計り、第四回生は此の意志の實現に努めたのであつた。次ぎに五回生は如何なる點に力を集注すべきで有るか。勿論感情的發達、知的發達と云つても、其の時には感情計り、或は知識計りが發達したのではない。知情意は分離しては決して働くものではないのである。其の時には其の方面が比較的に良く發達したと云ふ事である。一例を擧ぐれば、昨年四回生は實現に努めたと云つても、知情意を養ふのを等閑に附したのではない。然し四回生の力の現れたのは、實現の方面であつた。バサーによつて四回生は、大いに藝術を發達させ、且發表する事が出來たのであつた。バザーに於て、藝術の發達が稍々認められたのに反し、最も後れて居つたのは知識であつた。參考室を見て、感服せられた方も、少くはなかつたけれども、私は未だ〳〵知識が乏しいと云ふ事を切に感じたのである。

諸子は藝術に於て、天才を現す事は、必ずしも出來難い事では無いであらう。然し最も悲しむべき事は、知識の方面が缺けて居る事である。是は諸子のみの缺點ではなく、實に昔からの問題である。婦人にして藝術の方面に力を現した者は、多いけれども、知識の方面に優れて居つた人は少ない。殆ど無いと云つてもよい位である。是は生れ付き婦人の頭腦は、藝術の方面に力があるからで、婦人の判斷に誤謬の多いのは、つまり知識が缺けて居るからである。

然し藝術でも、眞に完全に發達せしめんとせば、如何にしても知識が必要なのである。知識の缺けた感情は醜であり、姑息であり、個人的である。今迄の教育に缺けて居つたのは、實に此の知識の方面であつた。夫故我々は此の學年に於て、大いに研究力を伸ばし、渴望して居る知識を得なければならぬ。併し我々の求むる所は眞の知識であつて、無暗に丸呑にした、不消化の知識ではない。眞の知識は、卽ち至誠である。

今年に於て諸子は、研究力を伸ばし、知識を求むるのに、最も適當な境遇を與へられて居る。夫は圖書館の完備さるゝ事と、科學館の建てらるゝ事である。然し知識は單に讀書し、漫然と實驗しても養はれない。我々は自ら觀察し、實驗し、考慮しなければ知識を得る事は出來ないのである。

若しも諸子が、知識を得る事が出來たならば、それに伴つて、意も、情も、慥に進歩するのである。諸子は既に、適當なる境遇を與へられて居るのであるから、自ら研究すると云ふ事に、努めなければならぬ。如何にして研究力を伸ばし、知識を得べきか諸子は自らよく考へて、大いに決心し、是非今年に於て、此の缺けたる所を補はれん事を、切望するのである。

（「花紅葉」第四號）明治四十年四月

## 國力の荒廢を如何にかすべき

彼の日露戰爭の將に解決せられんとするに當り、余は假令干戈既に收まるとも、決して太平の世と稱すべきにあらず、今後我が國民の逢着すべき幾多の難問題、國民の死活問題の前途に横はれるを思ひ、憂慮の念禁ずる能はず、時の大事に參與せられつゝありし山縣元帥を訪うて所思を述べしに、元帥は徐に口を開き、日露戰爭の開始せらるゝに當り、必ずしも始めより我が國に充分なる勝算ありしにも非ず、若し一敗地に塗るゝ事あらば、國を擧げて焦土に歸するやも計る可からず。然れども若し我が國にして戰に應ずるの元氣なく、坐して空しく運命に任せんか、國家の衰頽は必然來りて、再び恢復の期を見出す事能はざるべし。今日亡ぶるとも三百年後に亡ぶるとも、亡ぶるは一のみ。時運は實に戰を避くる事を許さず、戰はざれば我が國力の發展は遂に期待す可からざるの危機に遭遇したりとの意を語られし事あり。元帥の此の言、獨り露國に對する干戈の戰爭のみにあらずして、また平和の戰爭にも適用する事をうべし。即ち時運は正しく國民自ら、自家の運命を決すべき時機に到着せりと深く感ずるものなり。余は曩に來らんとする五大戰爭と題して、干戈の戰爭にして幸に連戰連捷の勢を以て勝利の榮冠を蒙るに至るとも、續いて來るべき商工業の戰爭、知力の戰爭、天然力を征服する戰爭、精神的社會的戰爭等と戰ひて、終局の勝利を博するにあらざれば、帝國の地歩を確立し、其の使命を全ふすること能はざる事を切論したる事あり。而して第二の戰爭たる商工業的戰爭は、既に其の端を啓けるにあらずや。見よ五十年來我が國の友邦たり、先輩國たる米國の如きすら、一朝利益の衝突あるや否や、如何に其の態度を一變したるか

は、頃來の對米問題によれば明らかに其の眞相を窺ふをうるに非らずや。桑港學童問題の如き、名譽若しくは感情の問題にありては大いに讓歩する所あるに似たれども、關稅問題、勞働者問題の如き、利害に深大の關係ある問題に至りては一歩も讓る所あらざるのみならず、其の衝突は漸く激甚を加ふるの兆あるにあらずや。近日の米國電報は、我が工業品に對する輸入稅一割半を加へて、七割五分に改定せんとするを報ぜり。卽ち百萬圓に對する七十五萬圓と云ふが如き、殆ど禁止稅に等しき重稅を課し、以て一部天產物若しくは半製品を除くの外我が工業品の輸入を杜絕せんとす。而して我が國未だ條約上之に應戰するの自由を有せざるが如き國力の微弱なる慨すべきにあらずや。加之國の富力に於ても米國の十分の一に達せず、其の他英佛獨の諸强國に及ばざるのみならず、二三第國と稱せらるゝ小國にも及ばざる所あり。然らば再び干戈を動かして以て之に打勝つべきか、之決して國家勢力の發展を望み得べきの途にあらず、彼經濟上の武器を携へて鬪ふ、我亦之に應ずるに經濟上の武器を以てせずんば、到底滿足なる勝利を保すべからざるなり。抑も經濟は國家の身體にして、國力は其の健康なり。健全なる身體にあらざれば、健全なる精神の發達を望むこと能はざるが如く堅固なる經濟的基礎の上に立つにあらざれば、國力の發展得て望むべからざるなり。

國家の身體なる經濟上の羸弱を救治せんとせば、先づ國の精神力、國民の意力、知力、腦力、健康を强固ならしめざる可らず。此の精神力を旺盛ならしむるの外以て經濟力を增進せしめ、商工業の發達を期するの途あるを知らざるなり。然るに此の國の基礎たり原動力たる、精神力は如何なる狀態に在るや。今知力の一現象たる各種の發明に就いて見るに、過ぐる二十三年間米國に於ける發明の數は殆ど五十萬、每年平均二萬件以上なり。飜つて我が國の統計によれば同年數間の發明總數一萬千九百餘件にして、而も實用に適する有益なる發明品は漸く五千餘件に過ぎず、之を米國のそれに比較すれば、實に大海の一粟に過ぎざるなり。加之發明品の多くは其の礎を外知に假り、獨創の知識によりて製作せらたるものは殆ど稀なりと云ふに至りては、又嘆ずべき事ならずや。次ぎに國家の生命たる精神力は如何。ゲーテは一國民の運命は其の國に於ける二十五歲以下の靑年の輿論の上に繫ると云へり。敢へて問ふ、我が國靑年は果して確固たる信念あり、崇高なる品性あり、偉大なる人格あり、遠大なる理想あり、優秀なる知能を有するや。昨年文部大臣は靑年の傾向を憂ひて、意氣の銷沈、品性の墮落、氣風の廢頽を警戒するの訓令を發せられたりき。若し我が靑年にして斯

くの如き憂ふべき傾向を有したりとせば、實に我が國力の根本は崩壞せられんとしつゝあるにあらずや。果して之を事實なりとせば、抑も誰の罪なるか、青年自身の罪なりや、或は國民元氣の廢頽の結果なりや。余は然か思ふ能はず。主として教育制度の不完全と、教育家の責とに歸すべきなり。想ふに我が國民の進運を阻害するの原因少からざるべしと雖も、青年の元氣を減殺し、國力の荒廢を顧みざるより大なるはあらず。之實に國家の勢力の根本を阻害するものにして、一日も等閑に付すべからず、乃ち余は今其の國力荒廢の由つて來る所の弊源三四を列叙し、以て諸君と共に之が救治の方法を講ぜんと欲す。

### 試驗制度の弊害によりて生ずる青年腦力の減殺

現時の試驗制度は青年をして腦力、金力、時間を浪費せしむること夥し。卽ち度に過ぎたる知識を注入せしむるより、自ら之を咀嚼するの暇なく、判斷し撰擇するの能力を傷け、品性を修め、健康を養ふの餘裕なからしめ、可惜青年の時機を空費せしむるに至る。殊に落第の不幸を見るに至りては、多くは精神沮喪、意氣銷沈の病に陷り遂に墮落の淵に沈む者少しとせざるなり。然らば斯かる弊根を斷たんが爲に、試驗制度を全廢すべきか、否左にあらず、宜しく生徒をして自動的に其の學力を驗するの方法を設くべしと。既に、我が女子大學校に於ては、所謂選拔試驗によらずして、生徒各自の適性に應じ、自發的自動的に、其の學力、品性を試驗するの方法を試みつつあるなり。惜しむらくは今茲に之を詳述するの暇なし。冀くは速に其の弊を退治するの策を講じ、以て莫大なる國力の損害を救はんが爲に、協心努力せられんことを。

### 現時の學制、學科、教授法の不調和、不統一より生ずる精神力の荒廢

我が國現時の學制は適當なる聯絡を缺き、其の學科は區々に孤立して調和なく、教授の方法統一せず、從つて相互に重複し軋轢し、生徒は進むべき標準を見出すに由なく、頭腦混亂して知識の統一なく、又思想の基礎更に確立することなし。是亦徒らに青年の精神力を消耗せしむるものにして、健全にして偉大なる思想を建設すること能はざる所以なり。

### 教育法の不完全によりて生ずる趣味の荒廢

學校、社會、家庭の三者は箇々分立して連絡なく交渉なし。之が爲に學科と實際との間に甚しき懸隔を生じ、學科によりて得たる知識は之を實際生活に應用する事能はず、實際生活に得

たる材料は、之を學科の研究に資するの機なし。もし此の三者の聯合融和を保たしむる事を得ば、學ぶに云ふべからざる趣味を覺えしめ、研究の快樂を知らしめ、費したる腦力をも其の用を全ふせしめ得べきなり。

### 教育家の精神力荒廢

崇高なる品性、秀俊なる能力、偉大なる感化力を有すべき教育家も、其の養成待遇の方法當を失せる爲、空しく精神力を消耗しつゝあることは、悲しむべく嘆ずべき事實にあらずや。即ち第一に教授時間多きに過ぐる事、第二教師の待遇の方法宜しきを得ざる事、第三教師の自由を束縛する事之なり。

以上の三項に就いては根本的改革を加へ、以て其の弊を除かざるべからず。或は師範學校制度を改むべきか、もしくは民間に於て、國民自ら其の事業に任ずべきか、其の方法に就き聊か考ふる所なきにあらざれども、今之を詳論するの遑なきを以て省く。後日諸君と共に大いに考究を要すべき問題なりと信ず。

### 官立學校私立學校の不調和不統一より來る荒廢

從來我が國に於ては、兎角私立學校を繼子扱ひにするの弊風あり。當今稍々改まりつゝありと雖も、未だ朝野共に私立に重きを置くもの甚だ少し。私立學校固より多少の弊あらんも、要するに官民ともに其の價置を認むること能はざるによる。然れども何れの國と雖も、單に官の力にのみ依賴せず、民間に於ける教育を重んじ、其の發達を助長する事によりて、其の國教育の進歩を促す事著しきは爭ふべからざる事實なりとす。かの英米國の如きは、高等教育の主要なる部分は殆ど私立學校の掌中に存するは、コロンビヤ若しくはシカゴ大學の如き偉大なる感化力を以て國民を造りつゝある事實に徵して明白なりとす。我が國に於ても、國民自ら一層教育に對する精神を振作し、民力によりて之を經營し、宮廳も亦私立學校に便宜を與へ之を奬勵し、種々の特權を獨り官立學校の專有となさず、官民相和し、相助け、相互に提携して、教育の實功を擧ぐるに至らしむるが如きは、目下の最大急務なりとす。而してこは國家經濟の上より見るも、國庫の負擔となるべき費用の大部分を、民間の資力に仰ぐを得て、困難なる現今の財政を救濟するの一良法とも云ふべし。他方に於ては教育の改良上、法規細則に拘束せられざる私立學校に於て嶄新なる教育法を實地に應用し自由に其の利害を研究する事を得。隨つて彼此長短相補ひ、複雜せる幾多の弊害も自ら除去するに至るべし。且つ教育機關の不足を補ふ上より見るも一良法にして、現今の如く試驗の難關を構へて、幾

萬の青年を困憊失望せしむるの要なく、青年をして各自の適所に就かしめ、其の材能をして自由に發展せしむるを得て、朝となく、野となく、各々其の要する所の適材を用ひらるゝに至るべく、國家の進運に貢献する所の大なる、眞の意表の外に出づべきを信ずるなり。

## 不完全なる女子教育によりて生ずる荒廢

我が國の女子をして二百有餘年來養ひ來りたる從順、貞操等の美德を本として、之を發達進歩せしめ、賢母として、良妻として、其の淑德を完ふせしむる事は云ふ迄もなき事なり。然れども從來の女子教育を見るに、女子をして餘りに女らしかれといふ方面に偏し過ぎ、其の差別を嚴しくし懸隔を大にし、爲に自然の能力體力をも阻害するに至り、人としては却つて不具者となし、獨立心無く、依賴心多く、意志薄弱にして、嫉妬心強く、卑屈にして他人に對して自己の意志を發表することすら爲し得ざるに至らしめたり。嗚呼女子にして獨立心なき厄介者なりとせば、國民の半數は厄介者なり。女子にして不具者なりとせば、國民の半數は不具者なり。女子若し活動せざれば、國民の半數は死せるに等しきなり。國力の增進一日も忽せにする能はざる今日の時勢に當り、國民の一半の狀態にして斯くの如くんば、國力の一半は正しく荒廢せるにあらずや。

それ女子は第二の國民を養成すべき母として、將來の國運に至大の責任を有するは論ずるに及ばず、社會の改良も、教育の進歩も、文學、美術、道德、宗教、政治の振興も、女子を俟つて始めて完成すべき大事業なりとす。

女子にして活動せば國民の一半は活動せるなり。女子にして向上せば、國民の一半は向上せるなり。予輩は女子をして、女子として其の淑德を全ふせしむるのみならず、人として、國民として、其の能力を發展せしめ、健全なる國民として、國家の爲に其の責務を盡すに足るの能力を發展せしめざる可からず。蓋し國運の隆衰興敗は、實に男女等しく負擔すべき責任にして、又其の權利なればなり。

要するに、不調和、不統一、不完全なる教育は知識の發達を障害し、趣味を荒廢し、元氣を銷沈し、活動を阻止し、健康を破壞し、家庭を傷害し、社會各階級の不調和となり、腐敗となり、國家の精神力を損耗荒廢し、其の進運を停滯するの禍害を釀成するに至る、實に戰慄して恐るべきものなり。

冀くは諸君と共に其の弊を救治し、教育の不調和を和し、教育の不統一を統一し、之を聯絡し之を融和し、一の大機關として偉大なる精神力を涵養し、國力の荒廢消耗を回復し、以て來

るべき戰爭に對するの準備をなさゞるべからず。

今や歐米の諸國分秒を爭ひ、寸陰を競ひ、國力の進歩を促し、發展を計り、備ふる所なからざるなし。帝國已に其の場に臨み、列國と共に世界の大舞臺に榮冠を爭はんとす。國家の危急豈一露國と戰ふの比にあらんや。

須らく内に憂ふべき病根を斷ち、堂々として征旅に上らざるべからざるなり。

（「家庭週報」第百〇四號）明治四十年六月

## 女子高等教育に對する意見（其の二）

今日は段々先輩諸君の御出席を願うて、御高見を拜聽する事を得まするのは誠に光榮に存じます。私は只今案内の名前主の故を以て、お先に御免を蒙り開會の辭を述べ並びに問題の端緒を開きたいと考へます。昨年七月毎月會を發起して、特に都下の女子教育に關係ある各家をお招きし、此處に互に教育上の意見を交換する事を得ましたのは、我々に取つて非常に有益でありました。而して當時、女子高等教育に就き、是非の問題世間に喧しかりしにも拘らず、本會に於ては全會一致を以て、女子高等教育の必要を認めました。然し未だ、之を如何なる方針を以て發展せしむべきかといふ問題に至つては議論百出到底之を統一する暇がありませんで、次回を期して更に熟議せんとして散會致しました。爾後、世間が戰後の經營の爲非常に多忙でありましたので從つて諸君の時を載く譯にゆきませず、次第に遷延致して居りましたが、此處にお約束に從ひ、本日を以て第二回の會合を開きました次第であります。本會は獨り教育家のみならず、政治家も宗教家も實業家も出席せられて居るので、從つて各方面からの教育上の意見を交換する事が出來るのであります。それで教育中でも未だ社會に定論のない女子教育に就いて、其の研究を始めたいと思ひます。元來女子教育は未だ一般に傳說的の時代、模倣時代、經驗の時代であります。而して女子を知つて居ると云つても、多くは書物によるか、然らざれば我が妻我が娘といふ、極めて一小部の觀察を以て、研究の材料となしつゝあるのであります。古來聖人君子と云はるゝ人も、多くは斯かる偏見に陷つて居るのであります。例へば釋迦が女は不淨なりとて退けたのも、孔子が養ひ難しと歎じたのも、乃至はソロモンが女は死よりも苦きものとし、誰か賢婦に會ひしと嘆息したるも、必ずや婦人の全體を知りての上にあらずして、多く一方面の觀察卽ち悲觀的の觀察であります。之等偉人の言は世人に偏見を起さしめし事多く、一層女性の發展を妨げ

ました。然らば女子教育家は最も多くの女子に接するを以て、最もよく女性の研究をなし得るかといふに然らず、また之も部分的觀察となるの恐れあるを以て、本會の如く男子の教育家は勿論、政治家も、宗教家も、實業家も、共に／＼協力を願つて、最も公平なる判斷を下す事に務めたいと考へます。而して如何なる點に研究の必要がありませうか。昨年本會第一回を催して、如何なる問題が社會に現れましたでせうか、この輿論に向つて答へる事が女子高等教育の發展上、先づ必要な事であります。

第一の問題は女子教育は國家の人口を減殺し、從つて國力の消耗を招くものであるといふ事を、眞面目に唱へた人があつた事である。それでこの女子高等教育反對論に答ふるに實證を以てすると共に、第二に女子の高等教育を如何にして發展せしむべきかに就き、簡單に私の考を述べて置かうと思ひます。第一女子の高等教育が人口の上に如何なる關係をもつものでありませうか。生物學者、社會學者の研究して居る事によれば、人口及び人口に關係ある男女の出生數は、主として食物卽ち榮養の如何によるもので、榮養の餘裕ある所には必ず人口多く、また生產に關係ある女子が多いのである。一妻多夫といふ風俗は、生活困難なる未開國に多いのである。動物も雌の繫殖は榮養よろしきを得しむるより能ふので、また出產數の比例は母親の子供を教育する必要の程度によるものである。卽ち卵生動物は一般に生產力が多いのであります。人間も教育に心を用ひざる野蠻の狀態にあつては、出產數は多いのである。然し乍ら出產數は如何に多くとも、之を教育するのに宜しきを得なければ、死亡數もまた多く、其の質に於ても劣つて居るのであります。人口の增減を單に頭腦の働きのみに歸し、頭腦を多く使へば人口を減殺する、從つて出產に直接關係ある女子には高等の教育を授くべからずとなすは、極めて偏見の論なりといはねばなりませぬ。殊に眞の教育を與ふれば、決して體力を害ふものではない、却つて體育は教育の一要素であります。勿論男女とも其の腦力を發達するに於ては、出產數は減じますが、却つて其の質に於て健康の度に於て勝るもので、決して女子高等教育が國力を消耗するものではありませぬ。今一つ人口の減少に影響するといふのは、高等教育を授くれば、女子の獨身者を增すにありといふ事であります。果して高等教育を授くれば女子が結婚を否むに至るものであるか、否かは、事實に就いて研究しなければなりません。世界に於て女子教育の最も進步しつゝある米國に於ては、今より十年前の調査に於て見るも、其の大學は男子七分、女子三分の割合にして、當時獨逸、佛蘭西には殆ど女子

の大學生はなかつたのであります。中等教育に於ては米國は却つて女子が六分男子が四分であり、英國は男子七分女子三分、獨逸聯邦中教育の最も盛んなりといふプロシヤも男子六分一厘女子三分九厘の割合に過ぎなかつたのであります。然らば斯く中等教育にしても、高等教育にしても、一般に他に比較して普及して居る米國が、最も獨身者が多きかといふに、實際は却つて之に反對であつて世界中に於て女子の獨身者の最も少きは米國であります。

即ち女子の獨身生活の增加するといふ事は、教育の程度が關係するよりも、生活問題、所謂經濟が關係するのである。之によつても女子が自活する事が出來れば、獨身者を多からしむるものであると云ふことを否定する事が出來るのであります。我が國に於ても既婚未婚に拘らず、女子も何か一つの仕事を持つて居るものが多く、却つて女子が職業に携はつて居る事は、結婚後も夫婦共稼ぎをなす事を得て、安心が出來ると見えて、結婚數は女子の職業が增加して行くと共に、ふえて居るのであります。之を見ても女子の自活の道が結婚を妨ぐるものといふ說は、根據極めて薄弱のみならず、世界に於て婦人は經濟的品性なきものとなせるは、女子の人格を無視せるもので、之を奴隷視するにあらざれば、之に依賴心、乞食心を與へるもので、個性の發達を傷くる事は大いなるものであります。男女が等しく健全となつて、經濟界も亦進運に向ふのであります。

次ぎに女子高等教育の方法として、女子は美術、文學、宗教に就いては天才を有するも科學には果して適するであらうか、否かと論ずるものがあります。我々が經驗する範圍に於て、それは幾分か事實をあらはして居る事もあります。即ち女子が文學美術に關する事には、創始する力があり發達する見込みがあります。科學的知識に於ては問題であります。之は獨り女子のみならず、世間一般に幼稚なのであります。殊に西洋では科學生れて三百年、我國では僅に五十年、彼科學の經驗時代に入つて凡そ百年になりますが、我は僅に三十年であります。殊に女子であるからこの知識の發達せぬ事は尤もであります。然し女子のこの頭腦を改良することが國民一般の頭腦に關係することが多いのであります。即ち先づ家庭に於て、國民の母となる人に科學的頭腦が發達せねばなりませぬ。それで私は女子教育に科學的頭腦を與ふることの必要ありとし、この主義を以て試驗的に教育を施して居るが、決して不可能の事ではないと信じます。先づ生徒自身、級、寮舍、校風等を研究せしめ、自動自發の態度を以て進ましめ、或は凡ての學問を統一して、一つの生命あるものに組織して、日常生活に應用し、之を以て品性を作

らしむることに務めますのも、皆この科學的頭腦の養成に基くのであります。然し私はこの教育法を以て唯一のものとは致しませぬ。尙他に勝つた方法があれば、之を用ふるに躊躇いたすものではありませぬ。然し我が國狀より察し、世界の大勢を顧みれば、畢竟この方法によるより外無いと考へられるのであります。願くは此の點に於て諸君の御批評を乞ひたいのであります。

次ぎに起る問題は、女子大學を起す必要は充分ありとするも、如何なる方法を以て設立すべきかといふにあります。國費を以て之を營むべきか。もし出來得べくば結構でありますが、實地の問題に至つては、誠に困難であります。丁度日本女子大學設立の當時、西園寺侯爵は文部大臣の職にあられたので、之を計りました處、女子大學の設立は誠に大切である。然しながら國論を動かして之を營む事は非常の困難なるのみならず、或は不可能の事といはねばならぬ。もし民間に於て之を起すとすれば、最も策の得たものであつて、次第に其處に於ての成績あらはるれば、輿論を動かし、遂に官立をも設立し得ることはむづかしからぬ事であるといはれました。歐米に於ても多く其の順で御承知の如く米國の大學は多く男女混淆ではありますが、純粹なる女子大學は悉く私立であります。次ぎに起る困難は經濟問題であります。我が國現今の狀態を顧みれば、帝國大學を初めとし、女子の教育機關を完備ならしむる事が急務であり、又世界の大勢に照らして、今後我が國の職責を完ふする上より云ふも、教育を改善すべき點が多いのであります。實は先日澤柳文部次官を訪うてお考の伺ふた時、男子の普通教育は非常の勢を以て進み、到底學校は之を收容しきれぬ有樣である。斯くの如きは或は過度の教育ではあるまいかとの御說でありました。そこで私は學生の統計をとつて見ました處、左の如くであります。

大學及び各種の專門學校

| | |
|---|---|
| 學校數 | 三一 |
| 現在生徒數 | 四〇五三五 |
| 入學志願者 | 一一三九五 |
| 入學者 | 四三三三 |

中等教育

| | |
|---|---|
| 學校數 | 三六四六 |
| 現在生徒數 | 三二二四四九 |
| 入學志願者 | 一二九三一六 |
| 入學者 | 七〇三五九 |

初等教育

學校數　二七四〇七
現在生徒數　五三四八二一三

初等、中等教育の生徒數を合すれば、五百六十九萬九千三百三十人で、全人口の十分の一に當るのであります。之を米國に比するに初等、中等の生徒數千四百六十五萬二千四百四十二人で彼の國の人口七千萬に比して五分の一に當るのであります。又高等教育に至つては學校數四百八十五箇、學生の數十六萬人の多きを數へ、女子のみでも四萬有餘を有するので、我が國男子の高等教育を受けた者の數より多いのである。元來米國は財源が豊富であるにも拘らず「富源は腦力にあり」といふ主義を以て進んで居るのであります。況や我が國の如く財源に乏しき土地に於ては、國民の腦力を以て、唯一の國家の富源と頼まねばなりませぬ。

その腦力を作る教育の機關は未だ世界の列强に比して完備せりとは云へませぬ。此に於てか眞に教育を隆盛となすには少くとも現今の二倍の力を以てその經營に當らねばなりません。然るに如何でせうか、國家は二十三億以上の外債、内債を負うて居るといふ極めて經濟難の時に遭遇致して居るのであります。經濟難であるからとて教育を疎かにする譯にはゆきません。此に於てか、官民協力してこの進運を計る事が大切であります。殊に男子の教育機關の完備に忙しい今日にては、女子教育の如きは民間の力による事が適當であります。先年伊藤侯に我が女子大學の事を計りました當時、我が國民は義俠心があるから、必ず教育事業の爲數十萬圓を投ずる者が出て來るであらうと云はれました。米國に於ては私立大學が七億五千萬圓の財産があり、その上に人民の寄附金は平均千六百萬圓位であります。我が國で日本女子大學校に五十萬圓の資金の寄つた事は未曾有の事であるとの事でありますが、近來は次第にこの風盛んとなり、早稲田大學ではこの四五年間に三十萬圓寄り、慶應義塾大學でも過日の五十年記念式を催すに當り、三十餘萬圓の應募高を數ふるに至り、また昨年は九州に安川氏が三百萬圓を教育事業に投じました。卽ち略々四五ケ年間に民間から投じた金高は五百萬圓で、之を平均すれば凡そ一ケ年百萬圓となるのであります。斯くの如きは我が國の富の程度、發達の順序によれば非常の進歩でありまして、今後益々奬勵するに於ては、民間の力を教育事業に致さする事は決して難しき事ではないのであります。只之の行はれ難き所以は、我が國に於て私立學校に重きを置かぬによるものであります。もし官私の區別を除き、官民一致協力して、我が國の教育を發展せしめ、其の改善を促すに於ては、其の効果決して尠からざる事と信ずるのであります。私

は之に就いては大に議論があるが、今日は時が無いから論ずる事が出來ませぬ。今後我が國の教育を改良し、一大發展を促しますには、國民が自動的に其の力を致し、完全なる私立の學校を多く興さねば、今日の國家の狀態に顧みて、國民精神力の死活を掌る教育を改良する事は出來ぬのであります。獨り完全なる私立學校を起すのみならず、官立も大いに民力を以て改良せねばならぬので、この民力を加へしむる方法は幾らもあるのであります。

今日は官民の區別なく、朝野の別なく、個人の資格を以て懇談せらるゝ樣、希望いたします。どうか續々と御批評なり、御意見なり御發表を願ひたいのであります。

（「講演集」第一・毎月會）明治四十年六月

## 夏期學校

從來我が國に於ては、暑中休暇は兎角遊惰に耽る習慣あり。從つて奮鬪、勞働等は往々忘却せらるゝ感あり。果して夏期は活動を止めて宜しきか、余は一年中に於て夏期は最も世界の活動すべき時にはあらざるべきかを思ふ。之を自然界に見れば如何、日光は最も長く地上を照らし、樹木は最もよく繁茂し、昆虫は出でて年中の糧食を求めんとして働く。獨り動植の世界のみならず、人間界に於ても、秋季豊穣なる收穫を得んと欲するものは、夏に於て終日田畑に耕耘す。また大工の如きは日の長きを利用して、建築にいそしむ。目を醒まし額に汗して、炎天に働き、其の職務を多量に果し、日暮湯あみして涼を取るが如き快樂は、實に夏ならでは得難き賜なり。之に反して暑さに辟易する人は、必ず心身の健康を失ふものなり。余は此に於て夏期休業と云はずして、夏期學校と云はんと欲す。

然らば夏期は自らの健康を回復する爲に用ひずして可なるべきか、否大いに之を要するなり。然れども休養とは決して、安逸を貪るの意にあらずして、仕事の轉換によりて與ふるものなり。扨てこの考を以て、如何に今年の夏を迎ふべきか。

### 身體の健康を增進する事

今より殆ど廿五年前、余が大阪の梅花女學校を監理せるとき、恰も暑中休暇を迎へんとするに先だち、生徒の健康を調べたるに、上級生は大多數頭痛になやめり。卽ち原因は其の年に於て多く、幾何、代數、心理、物理、化學等の知的活動をなさしめたるによれり。今學期末本校に於ても健康を調査せるに過半は、頭痛になやめりと云へり。これ此の期は知的養成に集注

せしめ、運動會、文藝會等の娯樂的活動を一切省略したるによる事多からんか。

元來頭痛をなやむ者には、其の原因二つあるべし。身體より來るものと、精神より來るものとなり。人の心も不調和、不統一、不明瞭、不了解なる時は、恰も身體に不調和、不統一の場所ありて病を來す如くに精神の不健康を來すもへなり。此の學期に於て多少一方に偏したる働きは、或は健康を害ふに至りし恐れあるを以て、この缺點を補ひ、心身の調和を計る事は、今休暇の最も大切なる働きなり。然らば如何なる點に注意を拂ふべきか、過日二年三年兩級に、暑中休暇の計畫を出さしめたるに、二年生は研究の續きとして觀察をすると云ひ、三年生は觀察と同時に、大いに讀書力を養ふと云へり。多くの學生はこの觀察、讀書に休暇を私用せんとするものなるべし。また其の他學校に於て學びたる學理を實際に應用せんと試むるものあるべし。そはともあれ最も趣味多き生活によりて、、此の學期多少過勞したる心身の健康を回復せざるべからず、この趣味多き生活は畢竟何事をも自動的に營む事によりて與ふべきなり。觀察も自ら研究せんと欲するものを、實地に當りて試むれば非常に愉快なり。書物も自らの必要によりて選擇する時は、讀まざらんと欲するも能はざるなり。其の他學理の應用に於ても、自らの身體、自らの精神を研究し、或は自らの臺所を改良せんとする時は、學理は自然に實際の爲に用ひられざるべからざるなり。この自動的に營むと云ふ事は、最も大切なる事にして、我が國民は餘りに醫者にたより、宗教に依賴し、政府に依賴し過ぎるの傾向あり、これ國民を微弱ならしむる大原因ともいふべき、恐るべき弊風なり。此の點は米國が勝れり。彼の國の諺に、「人が廿歳になれば馬鹿が醫者となる」と、もし廿歳にして自らの身體を支配し能はざる時は馬鹿なり。然らざれば、我はわが爲に最良の醫者たるべし。わが身體を以てわが精神を以て、あげて他人に依賴するとも、決して我程にわれを知りてわれに忠實なるものはあらざるべし。此に於てか休暇を健康回復の爲に利用せんと欲すれば、先づ自動的に身體を研究し、自動的に仕事の轉換を試むる事大切なり。獨り健康を回復するのみならず、われ等の健康は向上せざるべからず。向上は獨り人格の爲、學藝の爲大切なるのみならず、健康にも亦大切なり。今日迄人生五十年と考へしものなるが、我々は如何にもしてこれを百年に向上せしめん事を計らざるべからず。こは各自が前述の如き意味の醫者たるによりて與ふべき事なりとす。

## 如何にして正しく生活すべきかといふ技術を學ぶ事

夏期に於て研究すべき大切なるものゝ一つは、如何にして正しく生活すべきかと云ふ技術を學ぶ事なり。我が國に於て罪惡の根源をなすものは家庭なり。而して其の毒流の源は多くは夫婦の不和による。夫婦の不和は女子が如何に人と圓滑に、正しく、親切に生活し得べきかを知らざるによる。古來女子は幼にしては親に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老いては子に從ふとて從順、犧牲を以て女德の第一義となり。從順、犧牲は世に正しく生活すべき技術の最も高尚なるものなり。然るに我が國婦人の實際は、幼にしては親に賴り、嫁しては夫に賴り、老いては子に賴る。終生を依賴の中に送るなり。この依賴心は實に人の圓滿なる美はしき生活を傷くる第一のものなり。家庭の紊亂は多く婦人の依賴心に原因するものなり。卽ち依賴する時は、人に要求して止まず、要求を容れらるれば我が儘となり、拒まるれば不平家となる。

人生が無味乾燥とならざるは、人と人との間に高尚なる情愛の掬すべきものあるによる。この高尚なる情愛は卽ち正しく生活すべき技術中の技術なり。孔子の仁、クライストの愛、釋迦の慈悲、孟子の義も、この高尚なる情愛にして、畢竟如何にして人と共に正しく生活すべきかを教へたるに外ならざるなり。

## 讀書力を養ふ事

讀書力を養ふことは、所謂解釋力を增すにあり。其の程度、方法等は各自の選擇、工夫に任ずべし。讀書は各自の研究を完ふする上に、今後各自の境遇を開拓する上に必要缺くべからざるものなり。何故に婦人に正しく生活すべき方法が分らぬか、何故に婦人の運命は他人によりて制せらるゝか、これ皆無智なるによるものなり。然るに婦人は學校に行くまでは家に居り、學校に出でては寄宿舍に住ひ、嫁しては夫の家を天地として終生を送る。世界、宇內等を知る機會は男子に比して著しく少く、觀察の範圍極めて少し。恰も頭の中には一つの輪を嵌められたると同樣なり。この憐むべき境遇を打ち破りて廣く天地を逍遙せしむるものは、只讀書によるの外なきなり。卽ち讀書によりて世界、否、古往の偉人、聖人にも交る事をえて、其の知識を世界的とし、宇內的となす事をうるなり。これ婦人に殊に圖書館の必要なる所以なり。昔、リビングストンが亞米利加を發見したる際、歸國に臨み、數名の土人をロンドンに件ひたり。宏壯なる建築、美麗なる衣服、裝飾等、皆之を賞讃せる事を知られしも、獨り圖書館のみは、之が左迄の價値あるものとは、如何にしても了解せしむる事能はざりき。只一片の紙に對

ひ、或者は涙を流し、或者は笑聲を洩らし、また或者は慷慨悲憤して止まず、有情の人が無情の紙片に對つて交際せる樣は、眞に不可思議と叫ばしむるに堪へたり。斯くの如く讀書の趣味を解せぬ者は野蠻人なり。また最も不幸なる者なり。假令自己の境遇如何に不遇なりとも、書物と云ふ永久變らぬ朋友を有し、之と共に語り、之と共に向上する事は、最も高尚にして最も幸福なるものにあらずや。然れども讀書すといふとも小說の如く、一時の感情を激發せしむるのみにては、無益有害のものなり。一卷を繙かば必ず何等かの思想を殘し、わが頭腦に新しき光を加ふるものなからざるべからず。「此所に千人の讀書家ありとすとも、その中に考ふるものは只一人なり。もし千人考ふる者ありとすとも、觀察しうる者は只一人なり」と。觀察すると云ふことは何か新しきものを見出し、理想を造る事をうる人なり。研究より云へば設想を造る事をうる人なり。理想なき人の行ひは無意義なり。例へば命を捨つるは惜しまずとなすとも、その死場所の分らぬ人なり。所謂犬死する人なり。充分に活動する事をうる者は、常に理想に生くるの人なり。夜は理想を夢み、朝また理想に醒め、働きに理想をあらはさん事を務むるものなり。かのシャフツベリーは書齋に Serve と記したる額を掲げ、生涯この理想に生きたり。余は諸子と暫しの別れをなすに臨み、理想に生くるに最も大切なる二三の金言をさづけんとす。

Look up and not down!

Look out and not in!

Look forward and not back, lend a hand,

吾々は己のパンの爲、名譽の爲、位の爲に生くるものにあらず。永久變らぬ我々の理想、眞理、眞如の爲に生くる也。理想に生くるの人は內に求むる事なく、常に外に向ふるものなり。誠の爲に盡すものなり。此に於いて大いなる熱心を持續する事をえて、始めて研究も出來、觀察も出來、圓滿なる社會的生活を營む事をうべし。この覺悟を以て、來らんとする夏期學校を完ふせられん事を切望して止まざるなり。

（「家庭週報」第百〇八號・終業式講話）明治四十年七月

## 婦人と農藝

大日本婦人農藝會の趣意は始めから御賛成致しまして微力を添へたい考で居りましたが、常に多忙の爲賛助員として名前を添へたのみで、何もお助けする事が出來なかつたので甚だ濟まぬ感じが致して居りました。この酷暑の候を犯して未だ輿論も

充分に賛成して居らぬ時に、本農藝會の趣旨ある所を學ぼうとして、御入會なすつた諸氏を本校にお迎へ申す事は、我々の喜びとする所であります。而して皆様の御熱心に對して、何か御參考となるお話を致したいのであります。然し昨今相變らず多忙でありまして充分の準備を致す事が出來ませんので、只私が本會の趣意を御賛成申した理由と、並びに講習生諸氏及び本農藝會に向つて一つの希望を述べたいと考へます。

## 本農藝會賛助の理由＝大學擴張（大學殖民）の機關と、農藝趣味の普及と

私が本農藝會の趣意を賛成した理由に二つあります。即ち一つは大學擴張若しくは大學殖民の機關として、一つは農藝趣味の普及を計る上からであります。

大學擴張又は大學殖民とは西洋のユニヴアシテイー・エツキステンシヨン、或はユニヴアシテイ・セツルメントの働きその儘を移すのではありません。我が國狀を顧み、必要に應じて、之等と同意味の働きが起らねばならぬのであると申すのです。

元來我が國の大學即ち高等教育は如何なる目的を持つて居るでありませうか。無論國家社會の必要から起つたには相違ありませんが、其の制度は多く歐米のものを採用したのであります。歐米の高等教育にはリベヨル・エデユケーシヨン（自由教育）と、プロフエシヨナル・エデユケーシヨン（職業教育）との二種類があつて、英、米は重にリベラル・エデユケーシヨンの主義に基き、獨逸の如きは重にプロフエシヨナル・デユケーシヨンの主義に則つて居るのであります。我が高等教育は多く獨逸に習うて居るので、高等教育と云へば、直ちに職業教育かの如く思惟するのであります。然し歐米の所謂プロフエシヨナル・エデユケーシヨンとは、單に職業教育と云ふ意味のみでなく、今少し精神的に用ひられて居り、リベラル・エデユケーシヨンと大差はないのであります。

リベラル・エデユケーシヨンの起元は如何と云ふに、今より凡そ四世紀前宗教政治の專制制度から逃れ、自由な人格を養はんと欲して起つた教育主義で、其の目的は人格修養にあるのであります。之即ちレナイサンス（文藝復興）の高等教育の目的で、人間の經典、人間の想像の重きを置いた結果、文學を鼓吹し、人文の最も發達したといふグリーキ、ラテンを教ふる事に骨を折つたのであります。此の主義が時勢と共に進歩して實際主義（リアリズム）となり、人の腦力を訓練して强固なる有益なる人格を作る事を目的としたのであります。十九世紀に至つて自然主義と成つた、是迄の個人主義、社會主義も加はるので

あります。即ち社會の必要に應じて社會國家を誘掖するに足る良市民（グウド　シテイズン）を養成する事を目的とするのであります。スペンサーの如きは教育の目的を指して「正しく生活する方法を教ふるもの」と致しました。而してこの主義は自然を研究し、その法則を見出して、之を社會に應用する事を勉むるもので、之所謂職業教育の起りで最も科學に重きを置き、之によりて人格をも養成するに至つたのであります。

次ぎに高等教育の要素として缺くべからざる職業教育に就いて、之を修得するものが果して人格を顧みないでよろしいでせうか、否、西洋のプロフエシヨナル・エデユケーシヨンは立派なる人格の上に打建つる專門の學問技術を授くるを以て目的として居ります。然るに我が國の教育は中等教育迄は人格修養を問ふが、大學教育に於ては一向に之を顧みない。爲に其の職業は營業的職人的であつて大工職左官職と選ぶ所がないのであります。我が女子大學では職業と云はず、天職と呼ぶのであります。即ち職業を以て、單にパンを得る爲名利を衒ふ爲でなく、眞に國家社會人道の爲に、己が天賦の才能、修得せる知識を以て全體に關係ある部分を經營せんとするもので、職業といふよりも神聖の意味をもつものであります。プロフエシヨンも亦職業よりも深き意味をもち、殆ど天職の如き意味をもつのであります。

今一つプロフエシヨンは生涯進歩發達する能力を持つ事で、これが職業と違ふ要點であります。我が女子大學に於ては先づ個人性を作り、次ぎに社會性を養ひ、而して一つの天職を見出さしむる事に務むるのであります。人が生存して居る以上、精神があると共に身體があるので、從つて一つの職業をもたなければなりません。昔は高等教育を受けたものは單に精神上の事をのみ掌るものと考へたが、今日は凡ての職業に高等教育が必要となり、無限に進歩發達せしむべき能力を養ふ事を必要とするのであります。見易き例は人間の生命の與奪に直接關係ある船頭の如きも、昔は只船の操縱に熟練して居れば足りたのでありますが、今日は苟も船長として立つものは、高等教育を受けたものでなくてはなりません。即ち天文學、地理學、氣象學から、機械學にも通じて居らなければならないのであります。藥屋にしても今日はプロフエシヨナル・エデユケーシヨンを要する。醫者に至つては高等の學問の必要を申さずともであります。然し船長よりも、藥劑師よりも醫者よりももつと多く人の生命、國家、社會の消長を掌る妻たり、母たるものゝ天職に高等教育が不必要でありませうか。船長が船の操縱の外知らず、醫者が呪文と藥草とより心得ぬ世ならば知らず、今日女子高等

教育の不必要を稱ふる事は、もはや取るに足らぬ陳腐な議論であります。今や世界の列强は一般に女子の高等教育を奬勵し、米國の如きは高等教育を受けたる女子が四萬人であつて、實に我が國男子の高等教育をうけたる數よりも多いのであります。獨逸の如き女子教育守舊な國でも大學の門戸を女子に開いた。又どうしても國家社會の發達上女子もリベラル・エデユケーシヨン、プロフエシヨナル・エデユケーシヨンを授けねばなりませぬ。然し教育は決して學校に於てのみ與ふべきものではありません。社會に於て、家庭に於て、職業に於て教育しなければならないのであります。米國の如き、又獨逸の如き、學校以外の之等の教育にも注意する所から大學擴張、大學殖民の運動が盛んであります。大學の教授方は冬の夜、或は夏の休暇を利用して、成る可く多くの人に講義を與へようと務めて居るのであります。通信教授の如きも極めて盛んに行はれ、ペンシルベニヤのスクラントン市にある通信教授の如きは實に男女の會員四十六萬人を有し、毎年新入會員は凡そ十五萬人もあるというふ有樣であります。これは國家の發展上大多數の人に高等教育を授くる事が大切と考へるからであります。

我が國でも識者の間には既に女子高等教育の必要が認められて居り、今後其の教育機關の如きも益々發展するに至りませう。然し學校のみでは決して多數の人を教育する事は不可能で、必ず之を補ふ機關がなくてはなりません。即ち大多數の人を生涯進歩發達せしむるに足る能力を與ふる機關として、大學擴張、大學殖民とも稱すべき働きが起らなければなりません。この働きとしては各地に婦人圖書館も起らねばならず、各地方に夏季學校も多々起らなければなりません。而して女子が人として、國民として、獨立するに足る人格才能を有して、始めて良妻賢母たるの資格を有するものたる事を知らねばならぬ。大日本婦人農藝會はかゝる時勢の要求を認められて起つたものであります。之私が本會の趣意を賛成する第一の理由であります。

第二に賛成の理由は本會が農藝といふ事を目的とせられるゝからであります。恰も男子の發展に工藝教育の大切なるが如く、女子の發展上實に農藝は缺くべからざるものであります。第一教育より云へば、自然教育、即ち科學的、心理的、社會的傾向となるこの教育が、最も女子教育に遲れて居るのであります。而して之を補ふには農藝が最も捷徑であります。即ち第一自然に接して之を愛する念を養はしめ、次いで自然を研究せしめ、第三に之を利用せしむるのであります。女子に科學的頭腦を與へ、經濟の品性を與へる事が、女子を自由ならしむるものであります。元來我が國は農業國でありまして、貿易の多額を

占むるものは、絹、生絲卽ち農藝品であります。而してこれ等、農藝品の九分通りは婦人の手によりて營まれてゐます。次ぎに大なる物産は米であります。然るに米は内地の産出に不足をつげて、凡そ千萬圓の外國米を輸入し、小麥も亦千萬圓以上の輸入があるのであります。農業國の農産物が、斯くの如き有樣であるからには、その發展を計ることは目下の急務であります。然るに我が國の女子教育に於て、農業趣味の養成を冷淡に觀過するのは寧ろ不可思議であります。却ってかゝる事には露西亞の女子教育は最も注意して行はれてをります。かの國の人口は凡そ一億五千萬で、其の少數を除くの外は田舍に住まつて居ります。而して田舍の半ば以上の大切な仕事は婦人によつて營まれて居り、女子教育も之に應じた課目を與へて居ります。露西亞は御承知の通り我が國等とは違つて、天然の恩惠の乏しい土地で、半年は氷に閉ざされて、春を經ずして夏が來るのである。この夏の間に凡ての天産物を收穫しなければならないので、今頃は女子が最も手腕を振つて働いて居る時であります。これ等農藝に關する事は凡て女學校で授けられ、其の女學生たることは極めて榮譽とし、また大切なる事として居ります。之等學校の制服として、水色の衣服に白キャップ、白き手掩ひを用ひますが、卒業後一團の勞働者の監督となり、もしくは學校の教師となる時は同じく其の服裝を續けます。世間も亦白のキャップ、白の手掩ひの服裝をした婦人を見る時は榮譽ある學校の卒業生として尊敬いたします。少くとも我が國も一般に婦人と農藝と密接なる關係を有する事だけでも、早く知らせねばなりません。

## 講習員諸氏並びに本農藝會に希望す

もはや時間がありませんから、只一言で申しませう。希望、それは實行に重きを置かれたい事であります。講習員諸氏は此所で修めた學理を學校なり、家庭なりに速に實行して貫ひたいのであります。而して百の空論を稱へんよりは、一握の麥を得て、寧ろ實行を以て近隣に必要を認めしむる事を努められたいのであります。また講習會も、現今の規則に見ゆるが如く、實習は只料理のみに限られて居りますが、どうか凡ての課目が實習を以て授けらるゝに至るやう、設備の擴張、事業の發展いたす事を希望します。

終りに臨み、最も希望する所は講習員諸氏の一致協力致される事であります。たとへ講習の期日は短いにしても、一度この會に入會した以上は、生涯自分の會であり、會員は自分の知己であるとして、互に相扶け、相勵まして、進歩發達を計らねば

なりません。我が國婦人の進まぬ原因は一致協力卽ち團結力の乏しい事によるのであります。一人の力は弱く、一人の生命は短いのであります。然しながら團體の力は強く、團體の生命は無限であります。どうかこゝに含んで居る深い意味をお考へになり、自愛、自重してお進みになり益々、本會の隆盛を計られん事を希望いたします。

（「家庭週報」第百十一號・大日本婦人農藝會員の日本女子大學校園藝部參觀時）明治四十年八月

## 發展の原動力を何處に求むべき乎

先學期の初めに當り、私は實地に就いて研究することを奬めたが、今のあなた方の答によると、研究をしようといふ熱心は十分有るが、結果を現す事は仲々難しいと云ふ事である。私の見る所によれば、あなた方には希望があり、又夫に對する、眞面目な態度が出來て居る。從來の婦人には此の希望がなく、又眞面目な態度も見られないのであつた。あなた方位の若い時には、兎角不眞面目な空想に耽りたがるものであるが、あなた方には少しも其の樣な心配はない、宗教、哲學等をも研究して、思想を統一する爲に非常に努めて居り、又常に高尙な目的に向つて、熱心に働いて居る。七年の努力に由つて、かゝる校風を作る事が出來たことは、私かに我々が、自ら少しく慰めて可也と思ふ所である。故に昔の形式的の教育主義から云へば、あなた方はもう完成に近いものであるが、私はそれを以て滿足することは出來ない。あなた方も自ら力が足らぬ、弱いと思ふのは、矢張り滿足が出來ぬのである。あなた方は骨を折つて研究して居るが、どうもその割に結果が現れない、決して惡い事はしないけれども、又積極的に、大いに新しい品性が出來て、ズンズン發展すると云ふことが甚だ六ケ敷いのは何故であるか。これはあなた方ばかりの問題ではない、我が國今日の婦人が概して實力に乏しく、生涯の基礎が更に確實でないのは、如何なる原因に由るのであらうか、これは充分研究しなければならぬ大問題である。

### 發展の六ケしき原因

今年の夏私は夫に就て、世界の婦人から、亦世界の大學、我が國の學校、或は本校に於ける七年間の經驗から多くの材料を集め、色々比較研究をした結果、漸く其の原因を見出すことが出來た。あなた方の進歩を鈍くし、我が國の女子の發展に障害を與ふる原因は、色々澤山あるが、今假に夫を分類すると、直

接に妨害するもの卽ち近因と、其の害が間接に現れるもの、卽ち遠因との二つになる。若しも我々が近因を知らうと思ふならば、是非遠因から調べなければ、本統の事は解り難いのであるが、時がないから、今日は遠因は措いて、先づその近因に就いて申したいと思ふ。

近因には精神界から來るものと、物質界から來るものとがある。何時でも我々が發展する時には、必ず先づ精神の上に非常な震動が起つて、自分を動かし、人をも動かすのであつて、若しも思想の統一を失ひ、精神的の震動が起らなければ、最早其の人の發展は止まると云ふ事は、萬古不易の眞理であらう。之は我々が自分の事を省みても明白な事で、我々が物質的活動をするのにも、先づ精神の上に活動が起らなければ、決して命ある活動をする事は出來ないのである。本校の經驗から云つても、第三回生は本校に新しい力を與へたものであるが、其の精神界が活動して居つた時には、確に形の上にも、著しい發達が認められたのであつて、其の惰力は今日迄も本校の校風の上に殘つて居る。第四回生に至つては、全體の傾向が餘りに精神的方面に傾き過ぎたから、今度は少し實際の方面に、力を向け替へねばならぬと云ふ樣になり、夫から今日迄、深い精神界の研究は、一時下火になつて居つた。然し私は今年の夏、二年寮に招かれて、種々の話を聞き、又其の後輕井澤の三泉寮へ行つて、あなた方が非常なる熱心を以て、眞面目に、生涯の基礎となるべきものを求めて居ることを知り、どうしても之は、人の心の自然の要求で、人は矢張り生涯の基礎となる精神的の生命ともいふ可きものを得なければ、到底眞の滿足を味ふ事が出來ず、又發展する事も出來ぬといふ事を悟つた。我々は飢えたものに、食を與へることを少し怠つて居つた。あなた方の頭に、生涯動かぬ土臺が未だ築かれて居らなかつた事が、あなた方を苦しめ、あなた方の發展を鈍からしめた根本の原因であつて、我が國の女子の進まないのも、原因は矢張り、此の精神的生命の缺乏に外ならぬのである。そこで私は今學期に於ては、專ら此の生涯の基礎を作る事に、我々の力を集注したいと思ふ。

精神上に於ける原因は、前に述べた如くであるが、今一つの原因は確に物質界にある。私は今年の夏、三十三年振りて歸鄕した。其の長い年月の間に、故鄕の村は如何に變化したであらうか。先づ第一に驚いた事は、村の人が皆教育に熱心であつて、子供は大抵小學校を卒業して居り、中學、高等女學校、高等學校、大學校へも澤山入學して居る。婦人は會などを組織して、中々によく活動して居り、私の子供の時とは、大變な相違である。然るに玆に怪しむべきは、農作の仕方を見ると、これ

は四十年前とあまり異なつて居らない。亦招かれて行くと、四十年前と殆ど同じ様な御馳走をして呉れる。卽ち斯かる日常の生活の上には、教育の効果は餘り現れて居らぬのみならず却つて此の様に四十年前と同じ程度の生活をして居つても、四十年前より生活が困難だと云ふ事である。何故に教育事業の隆盛は、日常生活の進歩を來さなかつたのであらうか。學問をして得た知識を應用して、ずん〳〵日常の生活法を改良して行つたら好さ相に思はれる。否、然し夫は望んで出來難い事で、さうしては惡い。譬へ不便の仕方を便利に改めるのでも、改良と云ふ事は、家内の調和を破り易いのである。私は此の時あなた方が卒業後、理想を益々進めて行く事が困難であると云ふのは、無理のないことだと思つた。よい考はあつても、あなたの村の人は入れないのである、家庭ではあなた方の改善を、喜ばないのである。故に隨分學問の博い人はあつても、夫を日常生活に應用して、村を益々發展させようといふ考は誠に少ない。これは一つは斯かる困難な境遇に這入つて、夫を開拓する力を與へなかつた、從來の教育の缺點に由る所も、少なくはないのであらうと思ふ。

あなた方が思ふ様に進歩する事が出來ぬのも、亦我が國の婦人が發展しないのも、其の原因は前に申した精神的方面が出來て居らない事であるが、又一つはこの物質的方面が後れて居るからである。故に此の原因を除き、二方面が並び進む様にしなければ、我が國の婦人は、今後決して發達する事は出來ない。夫であるからあなた方は、今後大いに力を養ひ、物質的方面の研究に於ては、譬へば社會部の人ならば經濟に就いて、教育部は身體、家庭部は物質經濟等の問題を採り、又精神的方面ならば、社會部は宗教、教育部は精神、家庭部は家風といふ様な問題に就いて充分研究し、改善の實を擧げなければならぬ。故に私は今後三年生、二年生に向つて、精神的方面を表すと共に、此の物質的方面に就いては、一年生に申したいと思ふのである。

あなた方の中には、精神的生命を求めるのは空な事で、夫が爲に我々は最も避くべき迷信などに陷るといふ様な憂ひはないか、亦左もなくば、科學を土臺として、段々哲學的に深く研究するので、中々結論が六ケ敷くなり、我々の腦力では到底消化する事が出來ず、且哲學はもと人間の頭の中で、空に考へたものであるから、これに深く這入るならば、空想的になり、懷疑に陷りはせぬか、若しも其の様な恐れが少しもないものならば、譬へ充分解る事は解つても、夫は至極物質的の淺薄なもので、眞に宗教的の力を與へられないといふ様な結果になりはせぬかなど、色々懸念する人もあるかも知れぬが、夫等は凡て杞

憂である。若しも我々が心の自然の要求に從つて眞の精神的生命を求めることに努めぬならば、到底眞の滿足を得る事は出來ず、其の爲に却つて迷信に陷り、邪路に踏み入つて、一時的の滿足をでも買はんとする樣になる。故に我々は此の危險を防ぐ爲に、本統の道を求めるのである。

## 研究的態度の必要

こゝに我々は精神的方面の研究を始むるに當り、最も注意すべきことは我々自身の態度である。卽ち我々は研究的態度を以て、進まなければならぬ、我々の求むる所のものは、研究的態度を以て努力するものにのみ、與へらるゝのである。何故に東洋人は迷信に束縛せられたか、グリーキに科學が起つたのは何故であるか。かゝる事は獨斷でなく、事實に照らして研究的に調べるならば、必ず六ケ敷くとも、解決が出來る問題である。我々の研究は超自然的でなく、確實な人間の經驗を土臺にするのであつて、決して空想を逞しうるのではなく、獨斷的のものでもない。宗教とか、哲學とか云ふものは、兎角人間の實際生活とは餘り關係のない、云はゞ贅物であるかの樣に考へられ易いものであるが、之は決してさうではない。玆に今研究しようとする宗教、哲學の中には、我々の生活の上に、大いに必要な實行的の意味があつて、直ちに我々の修養の上に又日々の生活に其の價値が現れるので、決して實際に遠い、役に立たぬものではない。然らば其の樣な實際的の宗教ならば物質的、分解的で、知識では認める事が出來ても、無味乾燥で、一向生命のないものではないかと思ふかも知れぬが、其の心配は無用である。我々は實在を基礎として研究する、實在は決して無味乾燥のものではない、確に其の中には趣味があり、生命があり、價値がある。

我々が今研究せんとして居る事は、實に一大問題であつて、之を解り易い樣に說くには、非常に時を要するから、私は到底順序に從つて、あなた方が消化し易い樣に說く事は出來ぬ。只極く大略を申して、あなた方の研究に要する材料を與へる丈であるから、あなた方は夫を土臺にして研究を進め、自ら深い眞理を見出さなければならぬ。之が解らなかつた事が、思ふに我が國の婦人の進まなかつた遠因でもあり、近因でもある。廣く考へれば、これを見出して、實際に行ふより外に、東洋の運命を維持して行く道はない。此の原理を見出して、夫を人生に應用した事が今日の歐米の文明を生み出したのであつて、之は今日の世界の大勢であり、今世紀に現れた宇宙の傾向である。其の傾向を今あなた方にお話するに就いては適當な言葉が必要で

あるが、今歐米に於て、最も進歩した思想を表す爲に、用ゐられて居る言葉を擧げて見たならば、大凡の考が付くであらうと思ふ。

## 進化論と新世界主義

今から少し前に流行した言葉は、「進化」であつた。進化を助くる活動の動機となる力は何であるか。ダーウヰンは生存競爭、自然陶汰の法則を以てこれを解いた。「動物は自ら發展せんとして奮鬪するのであつて、こゝに生存競爭が起り、これに依つて社會は發展し、宇宙には進歩がある。此の事實は動物の間に澤山見出されるので、彼等は銘々に角や、牙や、其の他色々自らを保護し、敵と戰ふ機關を附與されて居り、全く競爭に由つて發展したのである。此の事實は亦人間社會にも認められる。人生に最も必要なのは戰ふ力であつて、生存競爭に依つて社會は進み、個人は發展する。人生は奮鬪である努力である。生存競爭は自然の法則である」と。此の說は今日と雖も、確に一面の眞理として認められて居るが、今日の生物學者の研究に由ると、宇宙の法則は單に生存競爭のみでない、生存競爭とは正反對の相互扶持の法則（The law of Mutual aid）も確に行はれて居る。生存競爭は本能であるが、相互扶持といふ事も本能であり、亦人間の理想であつて、此の事實は動物の間にも認められるが、人間社會には更に明らかに認められる。而して之は獨り人間社會、動物界のみでなく宇宙の法則、宇內の傾向は、矢張り相互の間に、關係を持ち合ふといふ事である。或人は人間の道德が、幾千年進まぬと悲觀するが、決して夫は正しい見解ではない。人類の道德が進歩して居る事實は、確に社會の上に認められる。

尙此の外に新しい言葉には、新世界主義（New Internationalism）と云ふのがある。尤も從來も萬國法（International Law）＝或は萬國會議（International Convention）等の言葉があつたが、今日と以前と、異なる點は、以前はさういふ樣な言語はあつても、國と國との間には、競爭計り行はれて居つたのが、今日は兎も角も萬國平和會議なども實現せられ、國と國とが互に扶けあつて、世界の文明を進め、人類の幸福を增進しようとする傾向を現すに至つた。此の傾向を云ひ表した言葉が、卽ち新世界主義である。此の外に（Reciprocity）といふ言葉があるが、これは相互扶助（Mutual support）とか相互關係（Mutual interest）等の意味を含んで居り、相互の利益を計り合つて、銘々の義務を全うせんとする主義で、矢張り新世界主義と同じである。

此の頃ある社會學者は、社會組織を發展させる原動力は、利己主義であつて、人生の目的は利己の外にはない。夫は惡い事かも知れぬが、人間を研究しても、動物を調べて見ても、夫が事實であるから止むを得ない。今日の文明の原動力は、個人個人の人格を認め、個人を尊重した結果であると云つて居るが、これは半面のみを見た僻論である。勿論半面の眞理はあるが、利己のみが人生の目的である。利己が全然人間の行爲の動機であるといふ事は出來ぬ。人を扶け、人と共に事をし、同情し、全體を目的とする相互扶持も亦、人生の半面であつて、此の二つの正反對の本能がある爲に、例へば萬國平和會議を開きつゝ、又一方には、軍備擴張に努力するといふ樣な矛盾が社會には常に絶えぬのである。然しこれは未だ人間が、進化の中途にあるからであるが、若しも全然利己的の動機、生存競爭の法則のみに支配されて働く人があれば、その人は野蠻人か、さもなくば、動物的の人間とも云ふ可きで、少しく高尚な人格を備へた人ならば、必ず人道的の主義に依つて、人の爲に盡し、全體を進歩させて、相互の利益を計らうと云ふ目的を持ち、此の目的を達する爲に、反對のものと戰ひ、此の目的の爲に自分を保護するので、かゝる人を我々は文明人といひ、斯く相互扶持の行はれる社會を、文明社會と稱するのである。

## 東洋人は相互扶助の念が少ない

社會學に依つて調べると、どうも東洋人には、此の相互扶助の念が少ない。强い團結、美はしい同情を以て進む力が誠に鈍い。印度は正義心の强い國であつたが、競爭の方面ばかり發達した爲に、遂に國が滅びた。支那も、朝鮮も、國民が只利己の目的のみで働いたから、遂に國が衰へた。東洋の文明が、西洋に及ばぬ樣になつたのも、東洋に科學が起らなかつたのも、皆原因は此處にある。かゝる遺傳を受けた從來の我が國の婦人は非常に狹く、個人的であり、感情的であつた爲に、互に關係を見出して結合し、扶け合つて進むといふ事が出來なかつた。これが婦人の發展しなかつた遠因でもあるり、近因でもある。斯かる社會に育てられたあなた方が、本校に入つてから、全體の爲に働き、强い結合をしようと試みても、中々實行の困難なのは無理はない。實に我が國の婦人の一大缺點は、精神上にも、亦形式上にも、結合力の乏しい事である。

然らば如何にすれば、此の缺點を改める事が出來るか。卽ち美はしい精神的の生命を與へ、夫に依つて相互扶持の念を養ふより外に道はないのである。我が國の政治、商工業、教育等が充分に發達しないのも、私の鄕里の村の實業、日常生活が進歩

しなかつたのも、矢張り原因は同じである。然しかゝる事は、只口の先で、抽象的の言葉で申しても、解りにくいものであるから、今東洋と、西洋との社會から事實を採つて比較研究をして見たいと思ふ。

私の郷里は甚だ小さい村であるが、割合に多くの人物が出て居る。村長は力もあり、熱心でもあり、先づ我が國では、模範に近い村と云つて可い程であるが、これを米國等の村に比べたら、如何であらう。私の村には小さな圖書館があるが、三千人の中で、此處へ來て讀書するものは、僅か五十人程しか無いといふ事である。米國等の田舍では、極く貧乏な村にでも、立派な圖書館があり、其の上極く下層の水呑百姓でも、大抵家々に二百冊位の書物は備へて置いて、夫相應に趣味あり、命ある家庭を作り、農業等も、互に力を合せて、研究的にする事を怠らぬ。私の村の農業は、殆ど其の仕方が四十年前と異なつて居らぬが、その間に米國の農業は、如何なつたであらうか今數の上に表れた結果を擧ぐれば、(上表參照)

四十年前と今日と、同一の仕事に要する時間の比較

| 仕事 | 四十年前の消費時間 時 | 分 | 當今の消費時間 時 | 分 |
|---|---|---|---|---|
| 穀物植付け | 一〇、 | 五五 | 三 | 二 |
| 穀物苅入れ、及び粉碎 | 四六、 | 四〇 | 一、 | 〇〇 |
| 唐黍植付け | 六、 | 一五 | 三 | 七 |
| 唐黍苅入れ | 五、 | 〇〇 | 三、 | 四五 |
| 唐黍粉碎 | 六〇、 | 四〇 | 三 | 六 |
| 綿の植付け | 八、 | 四八 | 一、 | 三〇 |
| 綿の摘入れ | 六〇、 | 〇〇 | 一二、 | 五〇 |
| 枯草苅入れ | 七、 | 二〇 | 一、 | 〇〇 |
| 枯草を束にする事 | 三五、 | 三〇 | 一一、 | 三四 |
| 馬鈴薯植付け | 一五、 | 〇〇 | 一、 | 二五 |
| トマトー植付け | 一〇、 | 〇〇 | 一、 | 四〇 |
| トマトー苅入れ、及び束にする事 | 三二四、 | 〇〇 | 一三四、 | 五二 |

即ち四十年前には、一日掛つた事も、今では半日より少ない時間で出來る樣になつて居る。米國の農產物の產出高は、近頃の調査に依れば、六十億で、毎年虫の爲に害せらるゝ額だけでも、實に六億の巨額に上ると云ふことである。我が國の農產物では、其の中の大部分は米であるが、三十五年の調査に由ると、其の產出高は三千六百萬石餘で、之を一石十七圓としても六億圓餘、殆ど米國が虫害で失ふ額と同じ位である。最も米國は土地が廣く、我が國は狹い。然しもし土地を活かして用ゐるならば、必ず現在の二倍の產出を見る事が出來る。今耕されて

居る土地は、僅かに十六分の六で、殘りは未だ開墾されて居らない。思ふに今日の我が國は、丁度英國の十六世紀頃と同樣である。故に今我々が相互扶持の必要を認めて、大きな組合組織を成立させ、今日の英國の如くに產業奬勵をするならば、確に我が國も、歐米の商工業に比肩し得るに至るであらう。これは獨り實業界に限らず、教育界とても同じ事で、相互扶持の法則を見出し、之を社會に實現せんとする人々を教師とせぬならば、教育の根本の方針を誤るに至るのである。若しも我々に相互扶持が出來ぬならば、人を益する事が出來ぬのみならず自己を保存する事も出來ぬ。實に人類の進步は相互扶持に依らなければ、計る事は出來ないのである。其の他政治でも、宗教でも、經濟でも、すべて社會進步の原動力は、相互扶持に由つて增進するのである。

最近の調査に由れば、米國の富は二千二百億で、之を十年前の千二百億に比べると、千億の增加である。亦米國の鐵道の延長距離は、世界の鐵道の殆ど半分を占めて居るといふ事であるが、然し百年前の米國は、實に貧乏で多額の負債に苦しんで居つた。それが如何にして今日の有樣を呈するに至つたか、如何にして米國の實業は此の短日月に目覺ましい發展を遂げたかといへば、つまり出來る丈大きな團結を形づくり、力を一つにして、全體の利益を計つたからである。米國に次いで實業の進步したのは英國であるが、英國の進步の原因も亦、相互扶持の原理の應用に外ならぬ。此の關係を廣くし力を協せて事をする組織、所謂トラスト、及び其の他の資本合併の組織は、啻に米國に於て、盛んに行はるゝのみならず、實に歐洲の一般の趨勢である。米國最近の調査によれば、世界の國家が負ふて居る國債を合計すると、實に六百萬億であるが、其の國家が持つて居る正金は百二十億である。故にこの金融は、互の信用に依つて保つて居るのである。若しも互に同情を失ひ、國債を全部償却する時には、大抵の國は破產して仕舞はなければならぬ。今私は相互扶持の一例として、トラストといふ事を申したが、然しこれは移して直ちに我が國に行ふ事は出來ぬ。かゝる事は非常に利益がある代りに、亦適當な指導者を得ぬときは、恐る可き弊害を伴なふ故に、その是非に至つては、實に國家社會の一大問題である。然し適當な指導者を得て弊害を防ぐ事が出來るならば、其の利は實に計り難い。卽ち互の間のつまらぬ競爭に費す力を集め、幾個にも孤立して居つた力を協せて、全體の便宜を計り、其の全力を積極的發展に用ゐる事が出來るのである。十年前に於ては、合衆國中にトラストは、六十三丈しか成立して居らなかつたが、其の利益は追々人々に認められて、今より二

年前の調査によれば、其の一年間に成立したトラストが七十九あつたといふ。而して其の大規模のものを擧ぐれば、ある鋼鐵會社などは、二十八億の資本を有して居る。我が國の財力は、土地も、人民の財産も、悉く合せて二百億であるが、アメリカ合衆國に於けるトラストの資本を合すれば、實に八百億であるといふ。而してトラストになつた後と、其の前、互に分立して競爭した時との利益を比較すると、次ぎのごとき差がある。

| 收益の增加したる理由 | 「トラスト」組織に由りて增したる收益金高 |
|---|---|
| 分立時代には、三百人の勞働者を要したる仕事を、合同後は、十五人にてなす事を得る爲に、節約し得たる金高 | 二百萬圓 |
| 仲買の手を經ざる爲に增したる利益 | 八百萬圓 |
| 分立時代には、「シカゴ」の會社にて製造したる物を、「ニューヨーク」に運搬して賣捌き、「ニューヨーク」の會社は、「シカゴ」に販路を有する爲、「シカゴ」に製作品を送る等の事ありしが、合同後さる徒勞なくなりし爲節し得たる運賃 | 百萬圓 |

尙此の外にも分立時代には、十五の倉庫を用ゐて居つたものが、合同後は五つで足りる樣になつたなど、種々の利益は數へきれぬ程であるが、これ等は畢竟、競爭を斷念し、互に力を集めて扶け合つた事から生じた利益であつて、斯かる組織が起つた爲に、米國の實業が甚だしく進步した事は、爭ふべからざる事實である。かくの如く實業、國際、其の他社會萬般の事に、追々相互扶持の傾向が現れるに至つたのは、この競爭が人類相互の發展に、非常に損であると、大いに感じたからである。

現今に於て世界の各國は、軍備のために六十六億を費して居るが、斯かる國と國との競爭の爲に、消極的に用ゐられる金を、若し積極的方面に轉用する事が出來る樣になつたならば、人類の發展の上に、非常なる効果があるであらう。之と同じ樣に、若しも婦人が互に、嫉妬とか、猜疑とかの小さい爭の爲に、消極的に費す力を轉じて、互に美はしい同情を以て全體の進步を計り、眞の關係を見出して、强い團結をする事が出來たならば、斯の國家社會に及ぼす影響は、果していかばかりであらうか。而してこれを改むるのには、卽ち相互扶持の法則に從ひ、世界主義の精神を養はなければならぬ。換言すれば、生涯の土臺となる精神的の生命を得て、本統の關係を見出すより外に、あなた方の進步の道はな

い。これは甚だ困難な事であるが、若しも我々が望む所迄達する事が出來るならば、個人々々の力は發展し、全體の力を數倍にする事が出來るのである。そこで私は今後あなた方が自ら、從來婦人が進まなかつた近因と、遠因とに就いて、充分研究し、根本的に其の原因を除いて、實力を進め、人格を高める本統の道を見出して、限りなく進まれん事を希望するのである。

（「花紅葉」第五・實踐倫理講話）明治四十年九月

## 收穫の秋

昨日は秋季皇靈祭に當りまして、櫻楓館の記念の會を一日繰り上げ、正會員、並びに准會員が相會して、式を御擧げになりました。私も出席して、皆さんの御感じを聞いて居つた。それで終りに一言祝意を表して置きたいと思ひましたが、止むを得ぬ用事の爲、三時後に席を退き、其の機會を得なかつた。卽ち今日は九月廿五日で、今日が本當の記念日に當るのでありますから、今日の講義を始むる序として、一言櫻楓館の記念に就いて、私の切に感ずる所を申述べたいと思ふのであります。

抑も櫻楓館と本校とは如何なる關係を有して居るかと申しますと、其の外形はかの櫻楓樹に現れて居ります通り、此の母校が其の樹の根であり幹であると致すならば、櫻楓會は其の樹に結んだ所の實となるべきものである。然らば櫻楓會が生れる樣になりました其の動機は果して、何であるか、先づ最初の起りに遡つて考へて見ますと、これは確に有力な原因、卽ち後來成長發達すべき種子があつて、それが丁度適したる境遇に置かれて、育てられ、よい秋に遭遇して、實を結んだのであります。そこで此の結果は、更に新しき、大いなる種子となつて年々の秋に收穫を得つゝ以て今日に至つたのであると考へらるゝのであります。

今それを數へて見ますと次の如くになります。

### 第一期の收穫

明治卅四年、此の日本女子大學校が、始めて生れたのであります。卽ち其の四月に於て、櫻楓會の母校の根は始めて萠芽を吹いたのであります。然るに此の學校は最初から精神に充ちて居り、又非常に成長する所の勢力に富んで居りまして、しかも亦、萬物花咲き、生ひ立つ春といふ、誠によい境遇に遭遇致しまして、それ以來驚くべき成長を遂げたのであります。

其の當時は、まだ此の樹の萠芽が如何なる實を結ぶであらうか、又將來如何に風雨を凌いで、發達する力があるであらう

か、一向判然しないのでありましたが、其の幼稚なる時代に於きまして、秋、卽ち萬物成長して、實を結ばんとする時に遭遇しました。それは何であるか、實に明治卅四年九月廿五日、仁慈深くおはします、我が　國母陛下の渥き思召に由つて、此の日本女子大學校に、金二千圓御下賜の御沙汰を蒙つたのでございます。此の秋に際して、本校全體に充ちた精神は非常なものでありました。全校は此の御仁德に感奮しまするとと共に、此の御高恩に對しまして、誠に重い責任を自覺致したのであります。私はこれを以て、本校が始めて實を結んだ時、第一期の收穫の時であると考へて居ります。

如何となれば、此の時代に於て、もはや一種の精神的の生命を得、本校が將來成長すべき種子を蒔かれたのである。卽ち精神的の結果を始めて結んだ時期であると申してもよいのであります。

## 第二期の收穫

次ぎの年の九月廿二日は、森村豊明會から、本校に三萬圓の基金を寄附するといふ、手紙に接した日である。かゝる事は殆ど我が國に於て未曾有の事であつた。豊明會の精神、其の熱心は今日私が申す迄もないが、廿幾年の間、貿易の爲に働いて、豊、明六兩氏の如きは、遂に命を犧牲に供せられた。其の血と汗との結果を何れに向つて捧ぐべきかは、同會員の年來の問題でありました所、遂に我が國教育の根本たる女子教育、卽ち此の日本女子大學校に捧げん事を決心せられた。かゝる精神は、本校に非常の感動を與へられたのである。これ卽ち第二に於ける發展の動機を與へられたので、第二年目の結果であるといて差支へないと思ふのであります。

此の第二年目に於て、既に櫻楓會を組織する動機熟し、其の萠芽は現れたのであります。

## 第三期の收穫

本校が始めて芽を出してより、三年を經て第一回卒業生を出しました。此の卒業生が櫻楓會といふ團體の中に、共に實を結びました。此の時の櫻楓會の精神、會員の熱心なる有樣は、實に譬へやうもないのでございました。併し我々は少しも世間に廣めなかつたのでありましたが、新聞等に「宗教に於けるリバイバルのやうである」と評した程、外に迄反響を及ぼしたのであつた。これが第三の收穫なのであります。

## 第四期の收穫

次ぎに第四年目、恰も日露戰爭が酣なる時に於て、本校に教育部を開設するの必要を感じました時、再び森村豊明會から教育部を起すに必要なる圖書館、教育部校舍、小學校幼稚園校舍、並びに幼稚寮に要する費用を寄附さるゝ事となり、續いて本校關係者諸氏の熱誠により、基金を備へ組織を改めて法人團體となし、茲に本校の基礎は永遠に確立されました。それから又櫻楓會が仕事を始めたに就いては、未だ機關が整はず、本校の一隅の狹い室で本部の事務も扱へば、新聞も發行する、商業部も生徒昇降口の一部を使用し、萬事不便極まる有樣で、どうしても會專用の建物が必要となつたので、そこで一人の御婦人が、此の櫻楓館を建てん事を申込まれた。卽ち總計十二棟の建物を一年の間に新築する事になつた。第四の收穫はこれであります。

此の時に於て櫻楓會員の熱心は、第三期に於ける精神狀態と少しも變らなかつた事は、會員は勿論、生徒諸子の多數は今なほ記憶して居らるゝでありませう。

## 第五期の收穫

第五年目の秋、櫻楓館は落成し、卽ち御下賜金記念日を以て、落成式を擧げられました。爾來今日迄二年間、彼の館の中に積み込まれた收穫は、實に夥しいのである。其の二年間の經驗は既に式上會員諸子のせられた談話に明らかでありますから、重ねて申す必要はありません。これが卽ち第七回の秋に當るものであります。

## 第六期の收穫

第六年目の收穫といふは何であるか、卽ち精神上に於ては、文藝會に際し、御四方の內親王殿下、並びに各宮妃殿下、姫宮殿下方の御臨場を賜はり、なほ又やんごとなき邊りの、貴婦人方にも特に駕を枉げさせられたのであります。此の光榮を蒙りました事は本校全體に非常なる感動を與へられたのでございます。又それと共に一方には、本校創立後に於ける第二次の計畫として、外部の發展をなし、其の爲、化學館を始め、七棟の寮舍の新築を見るに至つたのであります。

## 第七期の收穫

これは前に申しました通り、櫻楓館開館後二年間に於ける收穫を指すのでございます。かくの如く既往七年間、年々夥しき精神上の結果を得るに至りました事は、實に喜びに堪へない次第であります。しかも獨り精神上のみならず、物質の方面の發

展、卽ち本校の外部に向つても、常に著しき影響を與へられたのであります。殊に今申した第六年目の秋に於ける事實は明らかにこれを現して居ります。

## 記憶すべき秋

以上述べました如く、本校は年々の秋に、精神上にも物質上にも多大の收穫を得つゝ、成長發達の機運に向ひました。其の起りは實に六年前の秋、我々のいつ迄も忘るゝ事の出來ない感動を受けた九月の廿五日、此の時にあるのでございます。卽ち本校設立の當時、未だ幼稚なる時に於て、常に我々の敬慕し奉る、國母陛下の御恩命に接しました事にあるのでございます。それが基となつて、爾來櫻楓館も婦人の手になり、又會の事業も全く男子の手を借らず、婦人の力のみを以て、今日迄發達させて來ました事は、本校にとりてのみならず、我が國婦人の働きとしてこれを見ましても、未だ曾て例のない所で、實に國家の爲祝すべき事であると考へるのでございます。併しながら我々は、今申した所の收穫に由つて滿足すべきでありませうか。否、決して滿足する事は出來ないのであります。本校並びに櫻楓會の到達せんとする目的は、前途なほ遠いのであります。未だ其の幾分にも達しないのである。未だ以て六年前に於て、大いなる感動を受くると共に、自覺したる責任を果しては居らないのであります。我々は今より後一層の發奮と、努力とを以て進み、更に一層の收穫を積まねばならないのであります。私はこゝに祝辭を述ぶると共に、櫻楓會員が、既往六年間、日夜油斷なくお働きになつた勞に對して謝意を表し、併せて將來に向つて多くの希望を屬するのでございます。

（「家庭週報」第百十一號・櫻楓館開館記念日）

明治四十年九月

## 祝天長節

謹みて我が、聖上陛下第五十六回の御誕辰を祝し奉るけふ天長の佳節に當り、萬感交々至り、未だその止まる所を知らぬ有樣である。余はこの深き感じを遺憾なく叙して頌辭に代へん事を欲するが、それは到底時間の許さぬ所であり、且つ充分に順序立つることもなし難いのであります。もし强ひて一言以て今朝の所感を表せば、非常なる感謝の念に滿つると共に、非常なる恐怖の念に驅られ、而して又非常なる希望に滿ちて居ると云ふの外無いのである。換言すれば、この感謝と、恐怖と、希望との三つの深き感動の爲非常なる奮鬪の狀態にあるのである。

この奮闘は余の奮闘にあらずして、寧ろ我が帝國の奮闘である。明治維新以來、即ち過去四十年間、一日の如く、奮闘を以て今日に至れる我が國は、今や如何なる奮闘に遭遇しつゝあるのであらうか。過ぐる數十年間に於て、我が國は俄に世界の大勢の中に加はり、諸强國と生存競爭を始めました。そこで到底之迄の如く、片隅に蟄居し、孤立して生存する事は出來ぬ狀態となつて、先づ富國强兵、即ち國の實力を發展せしめなければ、國家を維持する事能はずと痛切に感ぜしむるに至つたのである。然るに我が國は三千年來尙武の精神を以て成りし國として、强兵と云ふ點には、敢へて諸强國に遜色なしといふ自重心は容易に起す事が出來、また實際、日淸、日露の二大戰爭に於て、之を證明する事が出來たのである。獨り富國、即ち一國の身體なる經濟の點に至つては、國民擧つて十分の勝算ありとは認めぬ。今日の奮闘は實に此處に源を發せるもので、今日の財政を如何にすべきか、我が國の商工業を如何に發展すべきかと憂ふるのであります。次ぎに來る問題は我が國の女子教育であります。今更ではないが國家の運命のかゝる我が國の婦女、第二國民の母たる我が國婦人は果して其の責任を完ふするに足る能力を發展し得るやいかにとは問題である。我々が此の問題の解決を求めんとして、三十年間一日の如く奮闘し來つたが未だ十分なる結果をえぬのである。余自らも女子教育に從事してよりもはや二十有六年であるが未だ女子にして女子教育を指導し得るに足る人が稀であると感ずるのであります。中には殆ど一身を捧げ、寢食を忘れて盡さるゝが、どうも身體が弱い、況して力の餘裕を以て十分知力を磨き、必要なる道を開拓して行く事は前途なほ遼遠である。何時迄働けば、我が國婦人は自ら起つことが出來るやうになるのであらうか、果して我々が理想の時代は來るであらうか、日暮れて道は遠く、我々が奮闘の力は、疲れんとするに、はや、既に婦人の運命はつきんとするものではないか。萬一かくの如き有樣に陷らば、我が國の運命つきたるものといふべく、我が國の運命にしてつきんか、東洋の運命はもはや終りである。

更に目をあげて他の方面に及び、男子の教育界を觀察し、或は政治界、經濟界等、至る所今や悲觀すべきことに充ちて居る。これは國家の樞要の地位にある人も同感である。余は一方にかくの如き悲觀を抱くが、然しその悲觀の爲に弱るものではない。又困難の爲思ふやう出來ぬ爲に止むる事が出來るか。斃れても、碎けても、我が始めの決心を曲ぐる事は出來ない、希望を葬る事は出來ない。困難なれば困難なるほど、希望はいや勝るので、其の困難と、希望との間に奮闘が起るのである。

かくの如き奮鬪の間にありて、今日天長の佳節を迎へ、大いに我が心に慰安を與へられ、轉た感謝の念に堪へぬのであります。畏くも　今上陛下の御聖德は、國民の上に非常なる感化を與へ給ひ、我が國の教育は大いに振起せんとしつゝあるのであります。之は余が一片の感じにあらずして、我が國教育界の事實より結論したのである。卽ち　陛下の御齡を考へ、明治の歷史を顧みれば、時の割合に非常なる進歩である。而して教育の如きも、過去の成長に照らして將來に多大の希望を屬する事が出來るのである。我が教育勅語は、明治廿三年十月卅日に下し賜ふたもので、余は當時多年疑問とせる女子教育上、其の他の問題を携へて洋行を企て、恰も、新潟を出發せんとする時であつた。今は此の時より僅十七年ではあるが、其の問題とせる女子教育は次第に解決せられ、理想は着々實現せられんとしつゝあるのである。のみならず文部省を置かれてより三十五年である。その以前教育の程度は如何なる有樣であつたか、明治五年の學事奬勵に就いての仰せ出され書を讀めば、略々當時の教育の有樣が分るのである。その一節を拜讀すれば

道路に迷ひ、飢餓に陷り、家を破り、身を喪ふの徒の如き、畢竟無學よりして、かゝる過ちを生ずる也……、學問は士人以上の事として、農工商及び婦女に至つては、之を度外に置き……士人以上の稀に學ぶものも、動々もすれば國家の爲にすと唱へ、身を立つるの基たるを知らずして、或は詞章記誦の末に趨り、空理虛談の途に陷り、其の論高尙に似たりと雖も、之を身に行ひ、事に施すこと能はざるもの少からず……自今一般の人民（華士族農工商及び婦女子）必ず邑に不學の戶なく、家に不學の人なからしめん事を期す……人の父兄たるもの、宜しく此の意を認識し其の愛育の情を厚くし、其の子弟をして必ず學に從事せしめざる可からざる也……

余は此の仰せ出され書出でて二年目に、山口縣の師範に入り、翌年卽ち三年目には室津郡の巡回訓導となつて、多くの人に教授法を教ふる事を命ぜられた。思へば夢のやうである。僅に十七八の若年の巡回訓導が、十數の小學校長を集めて鞭の使ひ方から體操等をも教へたのである。また小學校創立の計畫をも有志者等と共に計つたのである。當時の教育がいかに幼稚であり、不完全であつたかは、想像するに餘りあるのである。教育普及して、一般人民が身を立つる樣就學するに至つたのは近頃である。女子教育も一部宗教家等の手になりしはとにかく、一般に行はるゝに至つたのは、近々の事である。教育勅語の發布せられた頃は、女子教育に反動起り、教育は女子に不必要なるのみならず、有害なりとまで、攻擊する者があつた。それが中

等教育の必要を認むるに至つたのは十年前であり、高等教育を與へる事を社會が承認するに至り、日本女子大學校の創立を見るに至つたのは、實に七年前である。斯くの如く過去の歴史を辿つて、今日の有樣に思ひ合せば、其の進歩寧ろ驚くに堪へたるものがあるので、世界各國の歴史に比して、敢へて遜色はないのであります。我々は明治五年仰せ出された書を讀み、二十三年の教育勅語を拜讀して　今上陛下の御聖德を仰ぎ、御教育に御熱心なる事を思ひ、感謝の念禁ずる能はざるのであります。また　陛下は東宮殿下の御教育に大御心を注がせ給ふこと深く、其の御教育は實に國民に模範を垂れさせ給ふのである。東宮殿下の今回の御旅行の如きも、外國の交際の有樣、地方の狀況、教育の有樣等を親しく御見學になり御奬勵にになるといふ事はいかに　陛下の思召深きかを感ずるのであります。教育が書物のみによらずして、社會の活劇を見聞し、世界の舞臺に活躍して、人間社會を知り之に關係を有して始めて出來るものであるとの教育法を示し給ふのであります。天皇陛下と共に　皇后陛下に於かせられても、或は親しく華族女學校を興し給ひ、或は慈惠醫院を建てさせられ、高等女子師範學校に行啓せさせ給ひ、或は女子大學の創立を聞し召して御下賜金の御沙汰がありました事等は、我が女子教育、慈善事業を御奬勵になる上に、如何許り力ありしかは、今更申す迄もない事であります。我々は明治の聖代にありて斯くの如き優渥なる君恩に浴しつゝある事を感謝し奉ると同時に、益々國運の隆盛を祈つて、終り迄奮鬪するの覺悟を求めなくてはなりませぬ。

（「家庭週報」第百二十二號）明治四十年十一月

## 世界漫遊の結論

余は今日主客の間に立ちて本校監事三井三郎助氏、櫻楓會補助團幹事三井令夫人及び本校大學部第三年生である令嬢多津雄氏、本校教諭平野はま子氏等御一行の、無事この行を終へられたるを迎へて、一言喜びの情をあらはすと同時に、三井氏、同令夫人、令嬢三君から伺ふた事を御披露申すつもりである。實はうけつぎ所謂飜譯となると、とかく精神を失ふものであるから、能ふべくば御自身で實驗なり、所感なりをお話し下さる事を希望するが、三井氏は不言實行の方で、あまり公の席などでは、發表を好まれぬから、餘儀なく私からお傳へ申す事としました。

我々は本年六月下旬、御一行を送つて以來日々歸朝をお待ち申して居りました。本月十一日マンチユリヤ號で横濱に御入港

になるや、之をお迎へ申して、先づ事實として喜んだ事は、一行の御健康の非常に勝れた事であります。見渡す所皆五つ六つは若くなられたやうである。（獨り多津雄さんのみは或方面に三つ位年をとられた。）之は太西洋、太平洋の新鮮の空氣、シベリヤ、オートンビール、セントラルウエーの車中に夜晝を暮され、世界の珍味をお味ひになつた故である。然し、それだけでは人間は丈夫にはなれぬのである。卽ち精神に病ある人は、旅行しても、運動しても、滋養物をとつても、癒らないのである。御一行が非常に壯健になられたのは、畢竟精神上に新しき力を加へられた故である。私共が心配した樣、世界に呑まるゝ事はなくて、世界各國にある精神上の食物を適宜に收容せられたのみならず、消化して力とし、品性とせられた爲に、心身ともに、健全になられたと云ふ事に原因するのを見出して、非常に喜ばしく感ずるのである。

扨て次ぎにお三人が世界を觀察してお出でになつた御經驗を話したい。三人が六ケ月間にせられた御經驗を、僅の時間にお話するのは困難の事でありますが、極めて簡單に、重要なる點を摘まんで申述べたい。余が御一行の觀察を有益と思ひ、御自身の爲、御家族の爲、學校及び國家の爲に喜ぶ事は、多くの漫遊者流の皮相の觀察を避けられ、一つの目的をたて、方針を設けて、その時間の間に出來るだけ有益に、また深き觀察をなされたのである。尤も同じ道を旅行せられたが、お三人とも各々其の方面を異にせられて居るのである。先づ年の若い方から始めれば、多津雄さんは大學部三年生である。故にその主要の目的は修學旅行であつて、この間に修養をつみ學問をなし、研究を努められたのであつた。道中始終卒業論文の材料を蒐集する事に努められ、なほ學校の潮流に遲れざらんとして、友人から實踐倫理の筆記を送つて貰つて、汽車中、船中に於て、これを學ばれたのである。而して一方に於ては微力ながらも女子大學校を紹介しようとせられ、或は周圍の複雜なる關係の中に立ち、女子大學生であるといふ責任を負ひ、また他方に於ては三井家一族の爲、國家の爲、其の義務、責任ある所を忘れず、終始旅中に擔ふ使命を完ふせんとの感が十分でありました。歸朝後のお話によつて察すれば、どうやら其の目的を達してこられたやうである。これが最も我々の喜ぶ所である。私は只今諸君の前に白狀するが、實は多津雄さんの洋行に就いてはあまり賛成しなかつたのであります。これは凡ての青年洋行者の爲に、常々憂ふる所でありました。それで多津雄さんは意志も出來てゐる、志も立つて居る。然しまだ力は芽生えであり、品性は將に出來んとして居る時であつて、この一時は實に一生の價値を

定むる時であり、また第五回生の爲には最も力を磨くに足る大切の時期と考へたのである。そこで私は御出立に際して特に注意をした。あなたの頭は只今から永久の品性を作らんとするのである。永久の品性を作るには烈火に灼かれ、鐵鎚を以て鍛はれなければならぬ。これは非常な苦痛であらう。あなたは今將にこの苦痛の中に入つて熱せられんとするに際し人ありて之を引き出すのである。誠にお氣の毒である。金持の息子息女は折角鍛はるゝ樣の好時期に遭遇しても周圍が許さぬのである。許さぬのみならず周圍の者は多くあなたに對して眞を云はぬのである。缺點があつても、人は云うてくれぬのである。その境遇の中にあつては、自ら決心して火の中に入り、鎚に打たるる法をとらなければ到底人間となられませぬと申した。只一言然りと答へられたのみであつた。然し旅行中一日も決心を緩められた事はない。方針を等閑にした事はない。事々にこれ等は實行となつてあらはれ、人格は次第に出來上りつゝ來つたのである。且物を觀察する力、觀察した物に自らの考を加へ、此の考を統一する力も出來たのである。なほ之を兄弟の爲、級の爲に行はんと今や計畫して居らるゝ。一言で云へば余が迷ひはせぬかとの考は杞憂に歸し、迷はず、失はれず、目的を果して歸つてこられたのであります。

次ぎに御夫人の經驗にうつりませう。多津雄さんが、先に御兩親に懇願せられて寮舍に入つて、多少勞働的生活を試みられ、また其の二人の弟御は昨年は輕井澤に於て天幕生活をなし、常に平民生活を敢へてせられ、其の心身を鍛はれて居る。これには原因があるのであります。卽ち御兩親の遺傳のみでなく、教育、殊に家庭教育によるのであります。夫人は子女の教育には全力を注がれて居るのであります。爲に此の度の御旅行も、重に教育、家庭、慈善事業を觀察して、その良風を移さんと務められたのである。先づ貴族、富豪と稱せらるゝ者は、歐米では如何なる教育を其の子女に施して居るかといふ事を、最も注意して觀察せられた。現今世界で殆ど類を見ぬ活動的の國主は獨逸皇帝で、その皇子女方の御教育の有樣を調べて見ると、都會には殆ど足を止めさせらるゝ事なく、常に田舍に平民的生活を試みられてゐる。皇帝自らも非常に平民的のお方で、凡ての宴會の席上、必ず御座所が設けられてあるにも拘らず、臣下の中に交つて、商工業、農業の有樣にも、留意して御問答あらせらるゝ。爲に御座所はいつも空であるといふ有樣である。斯かる事を三井夫人が御覽になつて、今迄とられた教育主義に一層の確信を與へられたとの事である。また二人の男兒を、他日何れの國に洋行せしむるのが、最も適當かと云ふ事

を、御觀察になつたが、世界中で最も活きた教育を施して居る所は米國であるといふ事を見出された。殊にハーバード大學では數千の學生の入る食堂―メモリヤル・ホールといふ所等は周圍に同大學に關係ある有名なる故人の像を掲げられ、入る者をして、一種の力を感ぜしむるものがあつたとの事である。斯くの如く周圍の境遇も凡て教育的であつて、始めて完全な教育が出來るものであるといふ事を深く感じられた。其の他慈善事業、社會教育、圖書館、養老院、幼稚園等、凡て國民を教育する機關を御觀察になり、將來櫻楓會補助團員として如何にその良風を我が國に施さねばならぬか、愛國婦人會評議員として如何なる方針をとらねばならぬかといふ事を、御決心なすつたのであります。

次ぎに三井氏の御觀察でありますが、我が國實業家の代表者として、また三井物産會社の社用を帶びて思ひ立たれた御旅行であるから、無論其の御觀察の方面も社會的であり、從つて我が學校、我が國に對しても社會的方面に、其の御經驗を加へんことを希望せられて居る。一言で申しまするとと、意外に思はれたのは、驚くべき文華が歐洲にあつて、米國はきつと淺いであらうと想像せられた。然し實際はさうでなく、歐洲はもはや老年であつて、元氣稍々衰へんとしつゝあるに反し、米國は今將に青年の元氣がある。眞に社會的、世界的の働きをせるは、米國である。殊に商工業の發達は恐るべきものであると、恰も英人モースレー氏が、米國民の活力が、英國民を醒ますに足るものあるを見て驚いたと同樣の印象をうけられたのである。即ち今後我が國、否世界の最も恐るべき國は米國である。その開國の歴史は僅か四百年であるにも拘らず、世界を震動するに足る原動力を蓄ふるに至つたのは、抑も何所に原因して居るのであらうか。十五世紀に印刷の發明あるに至つて、新知識を世界的にとるに於て始めて人間思想の自由を認めた。當時歐洲では其の思想を實行するに幾多の障害があつたので、世界はその時機に自由な天地を欲した。その時發見せられたのが米大陸である。

そこで活動の自由を希ふ者は、皆この新天地に渡つた。米國の生涯は自由である。世界的である。社會的である。これが米國を今日あらしむるに至つたのである。今日世界の感じて居る財政困難も源を米國に發して居る。即ち急激なる新事業勃興の影響は忽ちロンドンの金融逼迫を來し、間もなく其の影響は東洋にも波及して來たのである。今日の商業は世界的、社會的に、殆ど世界を一家族と見做さねばならぬ。この舞臺に立つて、米國を敵手として、第二の戰爭、所謂、商工業戰爭に向は

ねばならぬのである。我が國今日の狀態では、とても覺束ないことである。氏の願ひとする所は、我が學校、我が社會、我が國家が、一層社會的にならんことである。社會的になるとは團結である。意志の結合である。我が國の實業界に於て一位を占めらるゝ三井氏が、實に日本の貧しい事を自覺せられ、我が國の貿易社會に覇權を握らるる物產會社が、かゝる微々たる事ではいけぬと考へられた。金持が眠つて居つては、三井一家も、日本の運命も危いものであると感じられた。御一行は世界の大勢を見聞せられ、生存競爭の劇しい事を目擊せられて、我が國の運命は如何なりゆくであらうか、我が日本は果して永久その國威を保ちうるであらうか。然し斯くの如き苦しみの中に奮鬪して、我が國民は鍛はるゝのである。國力は勝るのである。御一行がかくの如き御觀察と決心をせられたことは誠に我が國の幸福であると思ふのであります。

今一つ、旅行中非常に愉快に感ぜられた事は、米國に於ける森村組の活動であるとの事である。卽ち名古屋の製造所で造つた陶器等は、歐米の市場に出しても決して遜色なきものであるのみならず、其の他の物品の貿易額の如きも、年々非常の勢を以て膨脹しつゝあり、また商會の組織等も、極めて理想的のものである。歐米の競爭場裏に、有爲な我がこの貿易組合を見て、非常に意を强ふするに足るものあつたとの事で、この喜びは是非傳へてくれよとの事であります。

我々は三君の有益なる觀察、所感を伺ふばかりでなく、また三君が御自身の爲、家の爲、國家の爲、人類の爲、その良風を移し植ゑんとせられたその御決心を共にせんことを希望するのであります。

（「家庭週報」第百二十三號・三井氏一行の歸朝歡迎會）

明治四十年十一月

## 善學善遊

我が日本女子大學校の運動會には、每年善學善遊の文字を扁額として掲ぐる事を例として居る。これ畢竟、本校の教育主義を標榜するに最も適當なる言葉として、先年余が揮毫して與へたるものである。卽ち本校は學生をして修學せしむる道は學問、換言すれば我々の自發力を制御したる働らき、所謂、讀書、研究、修養等によるは勿論であるが、またその自發力のまにまに活動する遊戲の間に心身の發達を計る事が出來るもので、之を疎かにしてはならぬ。人若し學問——廣き意味に用ひて——努力を缺けば我々の天與の才能をも發揮する事が出來

ず、人格も作り上ぐる事が出來ぬと共に、もしこの遊戯といふ事を顧みない時には、極めて無味乾燥の生涯に陷り、これが爲に働きは不活潑となり、精力は早く消衰し、遂には其の成長も停止するの止むなきに至るものである。努力と遊戯とは反對の如く考へらるゝが、これ我々の活動の兩方面であつて、互に助け合うて、始めて完全な境遇が出來るものである。

我々の幼時の教育を想起すると、割合にこの境遇は勝つて居るやうに思はれる。卽ち實際的の教育を授けられたものである。我々は素讀を習ひ、經書の講義を聞き、手習ひをし、夜は算術を習うたが、また一方では朝は未明に霜を踏み、雪をわけて擊劍をやり、晝からは農業をもした。餘暇には獵にも出かけ、馬に跨つて、山野を跋涉するやうな事をもしたのである。これによつて心身ともに非常に鍛錬せらるゝの機會が多かつた。而して之は余獨りの經驗ではなくて、當時の一般の風習であつた。然るに爾後の教育が却つて境遇に重きを置かなくなつたのである。

近時青年の意氣銷沈を嘆じ、實力の不足を訴へ、常識の缺乏を歎くのは、畢竟、境遇に重きを置かぬ誤つた教育の現象と見ても、敢へて不當ではないのである。卽ちこれ等の青年は、たゞ机上の空理、空論に、其の腦力を徒費し、實際の仕事を賤しむのである。從つて其の知識は不確實であり、また人生に應用する事が出來ぬものである。殊に遊戯する境遇、卽ち學校でいへば運動會、文藝會等を教育上無益なりとし、或は有害なりとして排けて居る。運動會は、全國何れの學校にもあるが、これをして興味あるやう擧行する事を却つて批難する。之果して教育上如何なるものであらうか。かのフレーベルは子供の天性を研究して、遊戯を以て子供の社會事業とした。卽ち子供の知識も、德性もまた身體も、遊戯の間に全く養はるゝものとしたのである。我々はもし人の教育期を生涯繼續せしめ、終生進んで止まざらんとならば、この兒童期を命のあらん限り延長する事が大切である。卽ち子供になつて、遊ぶ時には大いに遊び、湧き出づる興味の内に、奮鬪の疲勞を癒さねばならぬ。而して、常に新しき力に充ちてゆく事が大切である。ゲーテは曰く「種々なる活動を以て、多くの想像を以て遊びし人形芝居は、彼が少年の時うけし形式的教育の或部分より、彼の眞の教育に對して必要であつた。壯年になつての仕事の爲には、青年期の教育よりも大切であつた」と云つて居る。余は生涯の仕事をする上に於て、克己し、努力する事が大切であると思ふ。然し眞の人生の價値は、やはり自由の意志に從はしめ、高尙なる精神界に逍遙し、思ふが儘に活動する間にすゝむのである。そこに

は文藝あり、生命があるのであると考へる。天地萬物を觀察しても、如何なる時に最も成長するものであらうか。春風駘蕩たる二、三月の頃に延び、冬に於て固まるのである。我々も冬のみの境遇に居らば、決して育つものではない。愉快に、自由に、遊ぶ事によつて、積極の力が延びるのである。これを教育上缺くべからざるものとなすのは、余の獨斷ではなくして、古來の教育家の認めて居るものである。スビノザは「我々の憂鬱を退くる事が、何故饑渇を退くる事より、もつと大切であらうか。余の虚弱なる事、又惡事、心配等を喜ぶのは誰であらうか。さる神はゐまさぬ、然し只一つ、我を嫉む人これなり……涙と嘆息とは、我の弱き徴である。」と云つた。何時も涙なく、悲しみなく、恐れなく、心配なく働く事の出來ない人は成長は出來ぬ。其の他道德心を養ひ、人と共に調和し、好意を以て社會をなす上よりも、亦非常なる熱望を以て向上しゆくに必要なる研究心養成の上よりも、また發表の習慣を養ふ上よりも遊戯は大切な事である。本校の如きも昨年は或事情の爲運動會を見合したのであるが、これは教育上損して居る事が多い事を、今日見出すのである。卽ち毎年新入學生が本校の主義である一致、團結、もしくは自動的活動、犧牲の精神等を最もよく認めて、これに同化するは運動會の時である。また非常なる實際的興味を以て、自ら研究し、觀察し、組織し、發表するといふ事が出來るやうになるのもこの時である。それで昨年はこれ等の精神を培養するに、著しく骨の折れた事は明らかなる事實である。遊戯が如何に成長に大切なるかを一言で云へば

第一、知力の健全なる發表となり

第二、想像と感情とを育つる上より

第三、我々の創始力を發達する上より

第四、評價の力を養ふ上より

第五、社會的調和を作る上より

必要缺くべからざるものである。善く學ぶ人にして、始めて善く遊ぶ事が出來る。然し教育上學ぶ事を重んずる程に遊ぶ事を大切に考へぬ事は一大缺點であると信じ、こゝにこの言をなす所以である。

（「家庭週報」第百二十四號）明治四十年十一月

## 主行主義に就いて

### 第一、主行主義とは何ぞや

此の前私は主行主義（Pragmatism）といふ事を一寸申し、

尚之に就いてあなた方が自身で研究なさる事を望んで置きましたから、多分出來るだけお調べになつたであらうと思ふ。私が此の主義をあなた方に紹介し、且之の研究を奬めたのは何故であるか。其の動機の第一は、此の間から私は動的宗教とか、世界的宗教とか云ふ樣な言葉を用ゐ、或は世界の宗教が統一される傾向が明らかになつて來たなど、人の躊躇して居る樣な事を大膽に斷言して居る。夫れに就いて私は思ふに、あなた方の中にも、亦あなた方の知人などの中にも、私の今說いて居る事は、私一個の頭腦で考へ出した獨特の思想、獨斷的の判斷であらうと云ふ樣に、疑はるゝ方もあるかも知れぬ。勿論私はシルレルの云つた人本主義者（ヒューマニスト）、ジェームスの唱ふる主行主義者（プラグマイスト）であると云ふのではない。私の考が之等の大家の說と寸分違はぬものであると云ふ事は出來ぬ。無論之等の說の中には、悉く首肯せられぬ點もあるが、然し大體に於て私の方法、傾向と符合する所が多く、丁度我々の求めて居る所を多く持つて居る故、之を紹介し、此の說を假りて、あなた方を導く方が、誤解も少く、且今後あなた方の研究の上にも亦實行の爲にも、參考となる事が多いであらうと考へたのである。第二は、私の說く事は私の獨斷ではなく、又ジェームス、シラー等の獨斷でもない。卽ち之は世界の潮流であり、世界の思想の發展である。此の主行主義を信仰し、或は之と同じ樣な傾向を有する重な人を擧ぐれば、米國ではジェームス、デューイ等で、ジェームスは世界に名高い心理學者である。英國に於けるシラー、獨逸のヴンド、パウルゼン等の如き、又同じ傾向に屬する人であつて、斯く世界の大家として誰も認めて居る人々の間に信じられて居る事は、我々の考が餘り間違つて居らぬ事を、證明する事實として、適當なものであらうと思ふ。第三の動機は、此の間から私があなた方に申した、世界の宗教を統一すると云ふ事は、常識から見ると、只大きな事を云ふとしか思へぬかも知れぬが、主行主義が解ると、さう云ふ事は非常に六ケ敷い事ではあるが、骨を折つてすれば、將來必ずなし遂げられると云ふ信仰が出來る。主行主義は一の哲學の方法である事はジェームス自らも云つて居る。人間の外から受けた經驗と、內から發する經驗との全體を纏めて、其の間の統一を計るのが主行主義であるから、其の點から云へば、哲學であると申してもよいが、然し單に一の哲學と云ふに止まらずして、主行主義は世界の宗教を凡て同化し、且多くの反對の主義ある哲學をも調和する事が出來る。其の上今日迄度々試みられて、成功しなかつた、科學と宗教との調和も、主行主義に依つて成し遂げられるであらう。尚前に私は大膽にも今後の世界の傾向は、追々一家族の樣になり、世

界的の宗教が生るゝであらうと申したが、夫は如何なる過程で出來るのであるか。之に就いて私は、十五年前アンドーヴァに居つた頃、一つの假説を作つて居たが、夫れから主行主義を研究するに及んで、今迄自分の考へて居た所と此の説と一致する點が多い事を見出し、益々確信を強くする事が出來たのであつた。次ぎに第五は、私があなた方に主行主義の研究を奬める最も主な動機である。主行主義には要求假定（Postulate）と云ふ事があるが要求假定とは、即ち我々の頭腦を精神的にする力である、換言すれば頭腦が活動する樣になり、動的になる動機を與へるので、之は實に主行主義の中にある大切な點である。つまり我が國今日の青年教育が困難で、青年の意氣が振はず、實際の役に立たぬ、常識がない、實行が出來ない原因は、頭腦が働かぬと云ふ事である。昔の宗教家は、此の頭腦が生きて働く樣になるのは、聖靈が下つたので、實に奇蹟であると思つて居た。然し今日では、斯かる事は奇蹟でも何でもない、主行主義は我々の頭腦を生かし、動く樣にする事が出來る。主行主義を知つて始めて我々の頭腦には、眞の宗教的の生命が發生するのである。然らば其の主行主義とは、如何なるものであるか。そこで私は今主行主義をあなた方に紹介するのに、次ぎの如き順序に依りたいと思ふ。

一、主行主義とは如何なるものか
二、主行主義の價値及び其の批評
三、我々は如何に主行主義を同化すべきか、又主行主義より採るべき點は何か

此の樣に三段に分けて説いた方が、分りよいのであるが、然し斯うすると、誠に時を多くとるから、先づ其の積りで始めるが、必ずしも其の順序に拘泥せず、要點丈けをお話する事にしようと思ふ。然し之は世界の宗教を統一し分裂して居る多くの思想を調和すると云ふ樣な、非常に大きい、複雜の問題であるから、なか〳〵解りにくいのである。けれどもあなた方が熱心に研究し、努力するならば、必ずあなた方は之を同化する事が出來ると、私は信ずる。

我々は今、主行主義と云ふ言葉を用ゐて居るが、之は我々の考を表すのに、最も適當な言葉と云ふ事は出來ない。然し此の言葉には歴史があつて、深い意味が表せるから、ジェームスは之を用ゐたのである。シラーは之の代りに、人本主義（Humanism）或は人格的理想主義（Personal Idealism）と云ふ言葉を使つたが、此の人本主義と云ふ言葉は、具體的觀念論と云ふ意味をも包含して居る。主行主義は人本主義の認識論の一部であると、ジェームスは云つて居るが、然し人本主義も、主

行主義もさう違ふものではなく、殆ど同じで、只少し人本主義の方が、包括的であると云ふ丈けであらう。人本主義と云ふ言葉は、以前から歐洲では用ゐられて居つたが、夫れと之とは違ふ。實に言葉の用ゐ樣は六ケ敷いものであるが、然し言葉なしに思想を構成する事は出來ぬ。新しい思想には新しい言葉が必要で、彼のマクス・ミューラーが云つた樣に、言葉は思想であり、思想は言葉である。思想も、眞理も、絶えず進化するから夫れに從つて新しい言葉の必要が起つて來る。

主行主義の要素の中で最も大切なものは、哲學の研究法と、認識論である。認識とは實在を讀むと云ふ事で、之は追々委しくお話する積りである。實在には具體的の實在もあるが、神とか、宇宙の實體とか、全體とか云ふ樣な、抽象的の實在もある。實在を讀むとは、卽ち宇宙を知ると云ふ事で、宇宙を解釋する學問を實體論と云ひ、宇宙の起源を研究するのを宇宙論と云ふ。實體論と、宇宙學は、殆ど同じもので、之等が卽ち形而上學である。之には宇宙の實體は靈であると云ふ說もあれば、又物質であると云ふ論もある。一元論あり、二元論あり、各々其の信ずる所を主張して、敢へて讓らない。昔の哲學は此の形而上學を學ぶのが目的であつたが、今日の哲學には、此の宇宙の研究に缺くべからざる認識論と云ふものがある。卽ち宇宙を如何にして我々は知る事が出來るか、我々は宇宙の實在を、どこ迄知る腦力があるか、又宇宙の實在を知るのは知識であるか、理性であるか、夫れとも又感情であるか、果して人間は宇宙の實在を知る事が出來るか否か、之等の事が分らなければ、如何にして研究してよいか方針が立たぬ。どうしても宇宙を知るのには、哲學を研究するのには、實在を讀む力を得なければならぬ。而して此の實在を讀む力は、卽ち認識論である。認識論が研究する主要な問題は、

一、知識の本性

二、認識の起源

三、認識の範圍及び權能

此の第三の問題は、第一、第二の問題の研究の結果として、必ず起るべきものである。

斯く認識論は、哲學の研究に必要であるのみならず、又宗教の研究にも、缺くべからざるものであつて、宗教問題を研究する事に就き、ジェームスは次ぎの樣に云つて居る。

宇宙學卽ち實在を定むる事を存在的判斷と云ふ。實在は靈にせよ、物質にせよ、存在するものであるから、此の存在的判斷の力に依つて、實在を定むる事が出來る。

實に此の力は、宗教の研究に甚だ必要なものであるが、もう

一つ之と共に缺くべからざるは精神的判斷である。卽ち美とか、醜とか、又善惡等の價値を定める力で此の判斷力のあるのが、最も人間に價値のある所以である。所謂宗教問題、道德問題、藝術問題等は、皆此の判斷力に依らなければ、解決する事は出來ない。

そこで實在の研究に缺くべからざるもの、卽ち哲學の要素は、第一は今申した實體論、第二は認識論で、第三には主行主義を入れても宜しい。哲學の中には、認識論、及び實體論の如き、價値を定める所の學問が必要で、矢張之等は哲學の一部分と認める事も出來る。第三に主行主義を置く事は、少しく適當でないかも知れぬが、然し主行主義の中には、哲學の一部と認められる要素があるから、斯樣にしてもよいであらうと思ふ。兎も角も認識論と、哲學の研究法と、此の二つのものが、主行主義の大切な要素であつて、此の二點に於て主行主義は、從來の哲學と異なつて居る。卽ち此の二つの點が、新しい要素を含んで居るのである。今我々が宗教問題を研究するに當り、第一に問題となるものは、此の認識論で、我々は神、或は宇宙の實在を、如何にして知るべきかと云ふ事が、先づ解らなければならぬ。故に此の問題を解かんとして、昔から種々の學說が起つた。

丁度中世紀のころ、煩瑣哲學と云ふ實在論があつたが、又これに反抗して、名目論が起つた。實在論とは今の主理說に近いもので、コントの所謂、抽象的思想、卽ち人間の頭腦で考へ出した、空理の分子が多い。此の實在論に反對して立つたのが、經驗派で、ベーコン、ロック等は、此の派の重な人である。此の派の主張は、人間が眞に實在を知るのには、五官から這入つて來る經驗を重んじ、之に依るより外に道はないと云ふので、爲に、主理說の如き感覺を輕蔑して、理性に依つて實在は知り得べしと云ふ主理派の主張と衝突し、兩方に半面の眞理がある所から、容易に何れとも決せられなかつた。此の反對の二說を調和しようとして現れたのがカントの哲學で、玆に始めて認識論と云ふものが盛んになつた。カントは人間の知力を、先天と後天とに區別し、人間には先天的に知識があるが、其の上に經驗と云ふ後天的の知識が加はつて、始めて認識が出來るのであると云つた。此の思想は、大いに思想界に影響を與へたが、今日から之を考へると、半ばは信じ難い所がある。然し思想界の二大潮流であつた主理派と、經驗派との二つを調和して、實驗哲學と云ふ新しい說を創めたコントの功は沒すべからざるもので、玆に於て始めて主理派の一方面と、經驗派の一方面とが同化して、一の更に進んだ認識論を組立てたのである。獨りコン

トは哲學の調和を計つたのみならず、凡ての科學をも統一して、實驗的組織にしようと試み、抽象的の思想を極力排斥した。夫れから倫理の上では、彼は愛他說を採り、更に之を宗教の上にも適用して、人道教を創始し、大いに之を鼓吹したのである。素より其の人本教も、經驗哲學も、不完全な所のある事は免れぬが、之等は段々研究されて、追々完全に進んだ。卽ち主行主義は、經驗哲學が一層完全に近づいたものである。然らば主行主義と、經驗哲學との間に、どれ丈けの違ひがあるかと云ふと、

一、經驗哲學は只言語に於て、思想に於てのみ反抽象的であつた。つまり思想の上では、絕對的に形而上學的の思想に反對したが、夫れは只理論の上に止まつて居た。

主行主義は、勿論、抽象的思想には反對であるが、其の上實質、卽ち實行に於ても、無益な抽象的思想を排斥する。

二、主行主義は、經驗哲學よりもなほ、無益な思考のために、時と腦力を用ゐる事がない。卽ち思想の經濟と云ふ點に於ても、優つて居る。

三、主行主義の知識は、卽ち力である。主行主義の知識の目的は、人の力を增進するのにあるから、其の知識は悉く人間社會の進化となる。

四、主行主義は我々に思想の自由を與へる。他の哲學や、宗教は、人の思想を束縛するが、主行主義は其の束縛を取り、我々の頭腦に生命を與へる。

此の主行主義に就いてジェームスは曰く、此の主義は人間個々の經驗を重んずる點に於ては、名目論に一致し、利益を尊ぶ所は功利主義と同じである。又抽象的思想及び無益な問題、言葉のみの結論を輕蔑する點は、主理主義と一致する。卽ち名目論、功利主義、主理主義を始め、其の他多くの要素を、主行主義は同化して居るのであつて、例へば、丁度大旅館の廣廊下の樣なものである。何れの部屋にも續いて居るから、何處へでも行つて何でも必要なものを採る事が出來る。卽ち主行主義の範圍は、頗る廣く、凡て人類の經驗の中から、採るべきは皆採るのである。故に之を宗教の方面に用ゐる時は、クリスト教の眞髓も、佛教の眞理も、其の他神道でも、儒教でも、其の中の眞理は、悉く採る事が出來るので、少しも教理に拘束されない、非常に自由な方式である。

夫れから我々の認識に大切なものは論理であるが、之も主行主義に依つて改善された。論理とは人間が頭腦でものを考へ、眞理を悟り、實在を讀んで、自分の頭腦の中の思想と、實在とを一致させる方法である。之は從來勢力を得て居つた主知論に

由ると、實在を其の儘に讀み、誤らぬ判斷を下す論理は、知的作用であつて、實在は只知性に依り、思考に依つて、知る事が出來ると云ふのである。然し主行主義の主張は、論理には勿論知性が必要であるが、之計りでは、決して本統に實在を知る事は出來ない。其の上に意志と、熱情と、實行が加はる事が必要である。知の目的は知夫れ自身の爲ではなく、意志の爲、實行の爲でなければならぬ。主知說では、判斷は冷靜でなければ正しく出來ぬ故、認識には知さへあれば、意も、情も不用であると云ふが、シルレルは之に反對して、統一されない感情が、判斷を誤らせるのは事實であるが、夫れを以て全然感情を排斥するのは間違ひである。もし人間に全然感情を取り去る事が出來たならば、其の結果は熱心もなく、希望もなく、何の樂しみもない、實に無味乾燥なものになつて仕舞ふ、我々は決して此の樣な仕方では、實在を讀み、眞理を發見する事は出來ない。殊に宗教問題の如きは、知の上に、意志と、感情とが加はらなければ、到底解らぬと云つて、今迄の過激な主知說の弊を補つた。故に主知說に對して、之を主行主義、或は實行主義と云ふのである。つまり今日の思想の衝突、科學と宗教との衝突などは、過激な主知說と、極端な經驗說との衝突に外ならぬので、之が如何にして調和さるゝかと云ふ事は、我々の研究せんとする所である。

若しあなた方に此の根本が解つたならば、卒業してから、如何なる境遇に這入つても、少しも妨げられずに、世界の震動中に這入つて、限りなく進むで行く事が出來るのである。世界の震動、宇宙の震動は、卽ち我々の震動、我々の精神的生命であつて、眞に之が出來、頭腦が動的になるならば、卽ち我々の向上の道は見出され、實在を讀み、眞理を發見する心の眼は、直ちに開くのである。從來の主知說は、餘り人間の頭腦を乾燥ならしめた爲に此の生命が出來なかつた。主行主義は其の弊を補ひ、凡ての思想の束縛を取り去つて、我々の頭腦を働く樣にし、生命を與へるのである。そこで私は、あなた方が大いなる決心を以て、實行に依り、又、理論の上から、此の主義を研究し、其の眞隨をお採りになる事を、希望して已まぬのである。

## 第二、主行主義の位置

今日私は近世哲學の發展した順序の極く大體を申して、主行主義の位置が如何なる所にあるかを、說明して置きたいと思ふ。從來勢力を占めて居つた極端なる主理說は、卽ち超經驗主義で、先天的理性の認識を以て、感性知覺に基ける經驗よりも、更に確實なものとし、感性知覺を土臺として、知識は成立

せぬと云ふのである。カントの說の如きは、哲學の考究に於て、自明的に確實な一定の根本原理を求め、之から出發して、哲學の凡ての內容を演繹しようとするので、彼は認識の方法を先天的と、後天的とに分ち、先天的の理性と、後天的の感性知覺から得た經驗とが、共同の働きをしなければ、決して本統の認識は出來ぬと云つた。兎も角も主理說は一般に、抽象に偏する傾きがあるから、超自然に成り、空想に陷り易い。而して之に反對して現われたのが自然主義である。此の說は少しも形而上學的の理論を假らずに、物質科學と同じ方法で、宇宙を機械的に說明する事が出來ると云つて、超自然的の要求を悉く排斥した。其の次ぎに起つた主知說は、丁度主行主義とは反對で、實在を知的關係とし、知的の作用は、情や、意よりも根本的のものであると云ひ、知を以て我々の精神的活動を說明しようとした。之を哲學的に云へば、宇宙の究極原理を理性とし、宇宙の實在は知、若しくは思考に依つて知る事が出來ると云ふのであつて、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、ヘーゲル等は、此の說の有名な人々である。

經驗派に於ては、ロック、ヒューム、ジョン・スチュアート・ミル等が率先して、歸納法を用ゐ、研究的態度を示した爲に、科學の進步を促した事が少くなかつた。此の說をもう少し進めて科學を統一したのが、卽ちコントの實理主義であつて、此の主理主義の缺點を認めて、更に之を補つたものが主意說である。主知說では宇宙の實在を知的關係であると云つたが、主意說は凡ての根本は意である。行爲の動機も、知識の發展も、其の土臺は意志で、之が人間に最も大切なものである。而して我々の精神的生命は、意志の萌芽から發生するので、其の意志の萌芽とは如何なるものであるかと云ふと、飽く事を求むる情、或は滿足を願ふ願望、又は熱望等で、之等が集つて我々の意志となる。此の意志があるから、我々は知識を求めるので、換言すれば人間に知識が出來るのは、意志があり、願望があるからであると主張した。此の說を奉じた學者の中でも、殊に意志を重んじたショウペンハウエルは、次ぎの樣に云つて居る。

我々の精神的生命は意志の力である。丁度宇宙が力で出來て居る如くに、我々の心は意志で出來て居る。

と、此の主意說と主知說とを調和して、我々の心の根本は知でもなく、又意ばかりでもなく、知と、意との、離るべからざる關係で出來て居ると、獨逸のロッツエは云つて居るが、然し今日の世界の傾向は何れであるかと云へば、多くは主意說に傾いて居つて、ヴント、パウルゼン等も此の說を執つて居る。此の前私は、ヴント、パウルゼン等を主行主義者の中に數へたが、

之は丁度私の抱く理想が主行主義に大分似て居るが、徹頭徹尾同じであるとは云へぬ様に、ヴントもパウルゼンもゼームスと、寸分違はぬと云ふ事は出來ない。然し從來の主知論者に反對して、意を重んじ、且眞理は常に生長發達するものであると云ふ事を、信ずる點に於て一致して居るからで、斯かる意味で分類する時は、今日此の外にも澤山の主行主義者がある。然し傾向は似て居つても主行主義と、主意說とは勿論同じものではない。主意說が起つてから、主行主義が生れたのである。夫れから尙此の外に主情說と云ふのがある。之は宇宙の實在は、情に依つて凡て知る事が出來る、人間の精神的生命は情から起ると云ふ說である。斯く種々な說があつて、甚だ複雜の樣であるが、今之を大別すると二つになる。

哲學〔主理派（抽象を重んず）主理說（極端なる）主知說
經驗派（具體を重んず）經驗說（極端なる）自然主義〕主行主義

そこでどうしても此の樣に兩極端に走つては、滿足を得る事が出來ないから、人間の頭腦が進むに從つて、哲學は發達し、二つの思潮を調和する所のものが起つた。卽ちこれが主行主義で、この學派は知も、意も、情も包含し、其の上實行と云ふ要素が加はつて居るので、決してどの說とも衝突しないが、只極端な說には凡て反對である。ジェームスは從來の哲學の傾向を區別して、次ぎの樣に云つて居る。

| 主理說 | 經驗說 |
|---|---|
| 原理を基礎とす | 感性知覺的に傾く |
| 理想的なり | 物質的なり |
| 樂天說に傾く | 厭世主義に傾く |
| 宗教的なり | 反宗教的なり |
| 自由意志を主張す | 宿命說を說く |
| 一元論 | 多元論 |
| 獨斷的になる | 懷疑的に傾き討議を好む |

主理說の人は經驗說を評して、冷硬的、動物的であると云ひ、夫れに反して主理說自身の思想は精練せられたものであるとした。斯く兩派共、互に自分の說が他よりも優つて居ると信ずるのである。そこでジェームスは、此の主行主義は極端な二つの思想の調和者、古い考と新しい考との仲媒者で且經驗說の思考法と、人類の要求する宗教的傾向との、愉快なる調和者である。卽ち信仰を破らずして、進步の道を開くのだと云つて居る。故に主行主義の說によると、眞理は固定したものではなく、始終成長進化し、形を變へて行くものである。今迄の眞理は骸骨の樣に形が一定して死んだ形式に止まつて居つたが、主行主義の眞理には情も、意も、知も、備はつて居り、生命も加

はつて絶間なく成長し、決して一所に止まつては居らない。此の前私は主行主義が種々の説を調和して、更に新しい一つの説を作るのを例へて、丁度澁い柿に、甘い柿を接いで、澁柿では勿論なく、且元の甘柿よりも、もつと良い柿の木を得る様なものだと申したが、ジェームスも矢張り接ぎ木（Graft）と云ふ字を用ゐて居る。ジェームスの考に依ると、眞理には色々の時代がある。其の第一は常識時代で、之は三千年來の人間の經驗が進歩して出來たものである。第二は科學の時代で、第三は哲學の時代である。而して人間の思想の進むのは恰も接ぎ木の様なもので、今迄の信仰は根柢から覆つて、全く無益になるのではない。古い經驗と、新しい經驗とが連接して形を變へ、もう一段進歩した、新しい眞理になるので、之が人間の心を安心させ、頭腦を進ませ且つ力の徒費を防ぎ、其の力を有益に用ゐて、益々人間を發展させる方法である。極端な主知説は、考へる爲に考へ、學説の爲に學説を作り、信仰の爲に信仰を築くのであつて、其の爲に頭腦が固定して、遂に生命を失つて仕舞つた。主行主義から云ふと、學説は器械である、實體の記號に過ぎない。知を求める目的は實行にある。實行とは卽ち人格の實現であつて、實現の目的は、精神的完全の域に達する事である。實現を重んじない學説は、丁度支拂ひの出來ない手形と同様である。手形に價値があるのは、夫れを正金に替へられるからで、眞理も丁度其の通り實現する事が出來、實在にする事が出來て、始めて價値が認められる。主行主義は此の實價を尊び、活用を重んずる、卽ち完全な精神的生命に達する實價がなければ、眞理ではないとするのである。主理説から云ふと、眞理は完全で、永久不變の者であるが、主行主義の説に依れば、人間の探求的精神を全く滿足させる眞理はない。眞理は常に進んで止まぬもので、又實在も完全なものではない實在夫れ自身も進化して行くのである。認識に於ても主理説は理性にのみ依るが、主行主義は確實な人間の經驗を基礎とし、眞理に判斷を下すのにも、大いに主理説とは異なつて居る。假令へば二元論と一元論との衝突があつて、何れが眞か解らぬとか、又は自由意志の説と宿命説と、唯心論と唯物論とがあり、何れにも道理があつて、何れとも判斷に苦しむ時、主行主義者は如何にして其の是非を決するであらうか。玆にジェームスの言葉を假りて云ふと、

主行主義の研究法は、實地に行つた結果に依つて眞僞を決するのであるが、もし實際上優劣がない時は、論ずる事は無益である。

而して信仰と、理性との關係に就いては、信仰があつて理性

があり、理性があつて信仰があると說いて、之を調和して居る。人本主義も矢張り、極端な絕對主義と、極端な自然主義との中間、卽ち理想と實際との中間を進んで行くものである。故に主行主義は決して理想を排斥しない、何故ならば、理想は今後實現せらるべきものであるからである。斯く理想を重んずると共に、又一方には、現實をも輕蔑しない。現實は理想を作る土臺であつて、今日の行がなければ、將來はないのである。從來哲學者で無限絕對を重んずる人が多いが、之が非常に人間を苦しめる事がある。哲學を學び、信仰を求むるのを人が反對するのは、皆此處に起因して居るのである。假令ひ其の說に從つて無限絕對を云ふものがあるとしても、夫れを學ぶ事は出來ない。其の出來ない事をしようとして現實を輕蔑する所から、思想が誠に夢幻的になり、空想に支配されて實を失ひ、行に力がなく、意志が薄弱になり、人格が墮落して、病的になつて仕舞ふ。然し主行主義の方法は、此の弊を救ふ事が出來る。此の方法による思考が非常に有益に、愉快になり、趣味は津々として盡きない。從來哲學を、文學者が嫌つたのは、極端な主知說の無味乾燥に慊らなかつたからであらう。此の主知說とは反對であるが、自然主義は兎もすれば本能主義になり、動物的になる弊があり、主理說も亦、超經驗的になる缺點を免れぬ。又絕對主義者の說によれば、

一、絕對とは關係を超越して、無差別になる事である。

二、絕對は凡て何物にも制限を加へられぬ。

三、絕對とは完全無缺のものである。

四、絕對とは原因結果の原理を否定する。

斯くの如く無限絕對を重んずる學者は、第一に關係を否定するが、實在は何かと云へば、關係から成立つて居る。宇宙は關係である、宗教は關係である、生命は關係である。然るに彼等は關係を否定して、神は絕對であると云ふが、其の絕對と云ふ事は何かと云ふと、どうも定義を下す事の出來ないものである。果して神は關係を超越したものであらうか。もし關係のないものとすれば、夫れと共に神の理想もなくなつて仕舞はなければならぬ。然しクリスト教の創世記に現れた神は決して關係を超越しては居らぬ、神は造物主であり、世界の主宰者であつて、人間とは親子の關係がある。凡ての物は、皆部分が構成されて成立つて居るのであるが、絕對と云ふ事を信ずると、我々個人が、全體の一部分であると云ふ事をも否定しなければならぬ。夫れで斯く關係を無視し、絕對を重んずる思想は、我々の實行の上に、非常な不利益を齎すのである。絕對は完全無缺であると云ふが、完全無缺を信ずると、我々の頭腦は靜的になつ

て、進歩を忘れて仕舞ふ。實に此の思想は人間の精力を空しく消耗し、元氣を減殺するものである。研究と云ふ事は、原因を調べる事に依つて行はるゝのであるが、極端な絶對主義は、原因結果の法則を無視するから、頭腦が發展しないのである。そこで主行主義が、絶對派と違ふ所は、眞理には生命があり、成長發達するものである。眞理は人間に有益なものでなければならぬ。若しも有益でないならば夫れは眞理ではないとする所である。夫れから主行主義は理想を重んずるが、其の理想は人間の經驗の上に土臺を置いたもので、悉く實行を目的として居る。もう一つの主行主義の要素は、人間を精神的完全の域に達せしむるのを目的とする事で、之は理想派の傾向と似て居るが、少しも空想でなく、人間の經驗に重きを置くのであつて、此處が卽ち本主義が、經驗派と、主理說との仲媒者たる所以である。主行主義の立場は、大略今申した通りであるが、之は時がない爲に、極く大體の關係を說いたのに過ぎぬのであるから、尙あなた方は夫れに就いて自ら研究し深くお考へになる事が必要である。

## 第三、主行主義者の態度

私は今日主行主義者の態度、卽ち主行主義者が大切に思つて居る指向法の態度に就いて御話したいと思ふ。指向法の態度とは、つまり心の態度、各々の傾向である。此の態度の如何に由つて、我々は眞理を見る事が出來、或は如何程努力しても徒勞に終る樣になるのである。故に主行主義者は最も此の點を重んずるので、私が殊に主行主義者の態度を研究して、あなた方に紹介するのは、其の態度が丁度我々が今迄執つて來た所に、一致する處が多いからである。然らば其の態度は何れの方向に向つて居るか、何に向つて立ち、何に背いて働きつゝあるか。先づ第一に背いて居る方面の事を擧げて見ると、

抽象的にして効果なきもの　　言語的解決
極端なる先天的理論　　固定せる主義
完結せる組織　　空理的絶對及び抽象

これ等のものを遠ざけて、我々は如何なるものに向つて進むかといふと、丁度夫等とは反對である所の

具體的、實用的、事實、實行、實力

これ等が我々の求めて居るものである。換言すれば、獨斷的人工的眞理卽ち眞理の終極の要求に背いて居る態度である。斯くの如き態度は、我々に如何なる影響を與へるかと云ふと、第一には、時間と精力との經濟になるといふ利益がある。從來の主理說が陷り易き弊の抽象的思想、或はどうしても經驗する事

が出來ない、到底解決する望みのない問題を考へる程、我々の心を害するものはない。無益に時間を費し、無益に腦力を消耗するのみならず、遂には煩悶に陷るのである。今日の青年は實利主義に走るに非ざれば、即ち煩悶に陷るといふ有様であるが、此の煩悶と云ふ事は、人間の能はざることをしようとする事から起るのであつて、主行主義は、斯かる徒勞を救ふ事が出來る。つまり主行主義の方法で考へれば、考へた事は皆實際の力になるのである。第二は、主行主義を自分のものにして居る人は、老衰せず、元氣を永久に續け、限りなく進歩する事が出來る。如何となれば、出來上つた眞理や、組織を信仰せずに、眞理は進歩するものであると信じて居るからである。第三の利益は、主行主義による時は、我々の信仰が動的になる利益がある。何故ならば主行主義の特性は、萬事未だ完成せず、終結しないといふ考である。主行主義者の或人は此の主義は未だ完全でない、固定して居ないと云つて居る。それであるから、事物も、眞理も、限りなく進む事が出來るので、我々は只先導者に導かれて、其の後ろに從ひ、先輩の發見した眞理を受ける事が出來るのみならず、我々自身が創始者となる事が出來るので、所謂動的である。此の態度は如何なる時代にも必要であるが、殊に今日の如き過度の時代に於ては、此の態度を以て、今日の境遇に適合する事を經驗するのは、最も大切である。而して此の態度を養ふ上に、最も注意しなければならぬのは、我々の心理狀態である。斯かる態度を有するもの、及び斯かる態度に改めんとするものゝ心理狀態は、如何なるものであるかといふと、これを大凡四段に分ける事が出來る。尤も研究の都合に由つては、三段にする事が出來ないでもないが、四段に分けた方が解り易いであらう。

第一の心理狀態は活動的感情で、これは我々の實力增進、精神の擴大、及び抱負に就いての欲望、我々の心の底から湧き出づる衝動的の力を、包括して居るもので、即ち我々の心を動的にし、生涯を偉大にせんとする所の欲望である。第二は厭世的感情であつて、これは何事にも滿足せず、凡ての事が足らぬ、不十分であると感ずるので、即ち自分を省みても、社會の狀態を見ても、凡て不完全、不充分であるから、何事も、改めて行きたい、今の儘ではどうも、自分の興味に叶はないのである。此の感情を持つて居る人は、獨り己の品性、人格、社會の組織、人間の拵へた法律、道德等ばかりでなく、今日迄人間が研究して發見した自然の法律、萬有の法則、其の他凡ての眞理をも不滿足に思ひ、決して今日只今の狀態を完全であると考へないのである。第三の心理狀態は樂天的感情で、これは第二の厭

世的感情とは、反對のものである。厭世的感情の方は、我々を謙遜にし、自分は弱い、卑いものであると考へさせるが、此の樂天的感情は、我々に滿足を與へ、良い意味でいふ誇りの念を與へるので、成程今のものは不完全であるが、我々は努力奮鬪に依つて、是をもう一層完全に近く、進める事が出來るといふ自信力を持たせる。此の點が厭世的感情と大いに異なる所で、斯かる態度の人は、如何なる眞理でも、制度でも、之を遺傳的に模倣的に承け繼ぐ事を快しとせず、必ず從來のものに改善を加へ、更に善きものとしなければ、これを自分のものとして受け取る事は好まないので、即ち定說を嫌ひ、傳說的方法を厭ひ、既成の眞理を其の儘に信仰する事を潔しとしないのである。斯かる事は事實を擧げて御話するならば、明らかになるのであらう。今迄我々はどういう風に進んで來たかといふと、何事でも從來のものを其の儘に遵奉する事を以て滿足せず、夫れを分類し、取捨し、綜合し、概括して、自分の說を作り、更に之を實際に試みて確信とした。然らば夫れが完全無缺な思想であるかと云ふと、決してさうではない。今後益々研究を重ねて、改めて行かなければならないのである。今日の思想界は實に複雜であるが、過日も大隈伯の申された如く、日本は東西の文明を調和して、更に新しい文明を生み出す使命がある事を、我々は切に感じ、如何にして此の大使命を果すべきかを研究して居るのであるが、世界の人々も亦、日本の使命を認め、且夫れを果す力の萠芽のある事を信じ、爲に一時日本に關する研究は、非常に盛んになつた。而して其の結果は如何であつたかと云ふと、大抵は失望を得たに過ぎなかつた。或人曰く「日本には何か非常な力があると思つたが、夫れは誤りで、實に日本の思想界は貧乏である。物質的方面も未だ進んでは居らない。戰爭丈けには勝つたが日本の今日はもう主義の枯渴である」と。果して之が日本の眞相であらうか、成程我が國の思想界は今過渡の時代で、未だ充分の力が現れて居らない。物質的方面に於ては、歐米に後れて居る所も少なくはない。實に此の現狀を觀ると、我々は眞に悲觀の念、厭世の情を禁ずる事が出來ないのであるが、然し之が矢張り進步の過程であると信じ、現在には非常に不滿足であるが、必ず之を改善したい、複雜な思想を統一しなければならぬと云ふ熱心が起ると共に、我々の力は少しも枯渴しては居ない、否內に大いなる力が潛んで居ると云ふ事を認め、努力奮鬪するならば必ず我々は使命を果す事が出來ると自ら任じて、大いに樂天的になるのである。然し此の三方面の心理狀態は、斯く區別を立てゝ、個々別々に働くのではなく、相互に關係を保ち、一つの有機體となつて働くので、其の

間の關係宜しきを得て凡ての感情、凡ての傾向を統一したものが、卽ち意志である。そこで第四の心理狀態は、此の意志に外ならぬので、之を私は意志の改善的主義と云ひたいと思ふ。改善主義に就いては、前に御話した事があるから、今日重ねて云はないが、玆に特に注意して置きたいのは、主行主義の態度の重な要素である所の、懇切な態度、卽ち丁度仲媒者の態度、換言すれば子供を育てる慈母の如き態度の必要である。主行主義者の態度はと云ふと、眞理の標準は善であり、改善である。卽ち改善する事が出來るものならば、眞理である。而して其の目的は、精神的完全の域に達する事であるから、凡ての事、凡ての眞理にしても、又個人にしても、社會にしても、培養して行くと云ふ親切な心、慈母の如き態度を以て、凡ての眞理を取扱ひ、昔の樣に異教徒を迫害し、他の說に酷評を下し、只破壞を事とすると云ふ樣な、不親切な事は決してしない。此の態度は實に世界的宗教を生むのに必要な仲媒者で、此の態度でなければ、思想の調和は計られないのである。故に主行主義者は夫れ自身が既に東西の思想の調和者となつて居るので、其の要素に意志を加へたのは、何から來たのかと云ふと、之は佛教などの影響を受けたショッペンハウエル、ハルトマン等から暗示を受けている。然し主行主義の主意說は決して佛教と同じではない、卽ち丸呑みにして居るのではない。斯くの如く親切、寬大な態度を主行主義は持つて居る爲に、眞理、實在、神の研究の範圍を大いに擴大する事が出來た。卽ち主理說が形式の論理に拘泥し、經驗派が極端な感性知覺に執着した弊を避けて、丁度ジェームスが云つた樣に、主行主義は眞理に對する專制君主でなく、共和主義、平等主義を執るのである。故に其の態度は非常に多方面で、彈力があり、伸縮が自在に出來、且其の知識の源泉は實に豐富無限であり、其の結論、卽ち判決は慈母の如く親切である。そこで此の主行主義者の態度を作るのには、斯くの如き親切な情と、情を統一した意志の心理狀態を養ふ事が大切である。此の心理狀態を主行主義者は、要求假定と名付けたのである。

## 要求假定

此の言葉には非常に深い意味がある。我々が眞理を探究し、信仰を作り、人格を養ひ、人生の目的を果たす上に最も大切なものであつて、科學の假定、夫れから理想、確信、主義、人格、宗教で云へば信仰と云ふ樣なものは皆此の中に含まれて居る。詰り之等の言葉を調和統一したものが要求假定である。此の言葉を初めて哲學に用ゐたのはカントである。カントの用ゐ

た要求假定と云ふ言葉の意味には、次ぎの三つの方面があつて、道德の上に假定を云ひ表したのである。

一、自由意志の存在

二、靈魂不滅

三、神の存在

カントは曰く、若しも人間に自由がないならば、選擇もないから、道德、又は德義は存在する事が出來ない。故に必然的に自由意志の存在は認められるので、此の自由意志に由り、目的を以て、人間が本統に完全な人格を作るのには、必ず靈魂不滅でなければならぬ。若し死が凡ての終りならば、道德は成立たない。つまり宗教の起りも、此の道德心から發して居るのであつて、どうしても人間は、永久の生命を希望し、又眞に善惡を判斷して、假令へ今は善人が困難しても、將來に於て好い結果を與へる神のある事を願ふのである。斯く無限の生命を求め、神の存在を希望し、自由の信仰を望むのは、人間の欲望であり、感情である。此の欲望あり、感情あり、意志がある故に、色々の要求を生じ、此の要求を滿足させる爲に、「神は存在するものであらう、人間は生れ變る事が出來るのである」と云ふ樣に、人生に就いて假定を作るのであつて、此の假定には要求がある。卽ちどうしても、さうありたいと思ふから、自然其の事を能く知りたくなり、知りたいから研究すると云ふ樣に、要求のある假定がポスチューレートである。カントは道德的要求假定と、學術的原理、卽ち假說とを區別して居つたが、其の後此の要求假定と云ふ字は、カントの用ゐた意味とは少し違ふ意味で、哲學者に用ゐられ、殊に近來は主行主義者、及び人本主義者が、一種特別の意味で此の字を用ゐる樣になつた。卽ちカントが立てた區別を除いて、もう少し廣い意味を表す樣になつたので、獨り道德上のみならず、學術的の原理にも、同じく要求假定と云ふ字を用ゐるのである。如何となれば、主行主義や、人本文義の學說は、實行を目的とし、實益、實用を要求するのであるから、道德的の意味と、學說上の區別を强いて立てる必要はないのである。始めカントは何故假說と云はずに、要求假定と云ふ、新しい字を用ゐたかと云ふと、夫れは道德的の要素の實行、感情等を包含する意味を表す爲であつたであらうと思ふ。夫れであるから要求假定と云ふ中には、要求と云ふ意味を含み、又實行、熱心、感情と云ふ樣な意味もある。換言すれば目的、理想、動機、假定、信仰、思想、意志、精神等の字が表す、凡ての意味の眞髓を統一して持つて居るので、此の要求假定が、卽ち我々に思想の統一力を與へる原動力である。我々はどうしても此の原動力を養はなければ眞理を發見する事

は出來ない。夫れ故或人は要求假定を統一力、又は凡ての感情を支配する力、理想を實現する力、或は組織する力などと云つて居る。之を宗教上から云ふと、所謂大悟徹底と云ふ樣な心の狀態も、要求假定の中には含んで居るので、之が出來て始めて、我々は宗教の信仰も出來、學術の研究も、品性の修養も出來る樣になるのである。故に私は之に就いて、もう少し委しく御話して置きたいと思ふ。然し私はジェームスの說を讀んで、それを其の儘あなた方に紹介するのでもないから、私の申す事は決して純粹の主行主義ではなく、其の中には色々私の經驗、希望等が這入つて居り、順序等も必ずしも、人に倣つてはないのである。故にあなた方は充分深く之を考へて、先づ此の要求假定と云ふ言葉の意味を解する事が必要である。否、只解する計りでなく、眞に之を消化して、銘々自身の要求假定を作り、原動力を養ふ事は、今日の急務である。それで私は之を說く爲に用ゐている言葉と、要求假定と、如何なる關係があるかを、今大體說き明して置きたいと思ふ。

## 要求假定と假說卽ち科學的假定との關係

要求假定の中には、甚だ多くの要素がある。卽ち論理的要求假定、道德的要求假定、宗教的要求假定と云ふ樣に、いくらでも分けて云ふ事が出來る。然し之等の要素は、獨立して居るのではなく、相互に離るべからざる關係を保つて居る。今迄は科學的眞理は只事實の關係、或は純粹思想の關係であると思つて居つたから、其の眞理の證明をするのには、全く意志や、感情を防ぎ、冷靜でなければならぬ。感情があれば、偏見になり易く、意志を交ふれば、個人的に陷ると思つて居た。然し要求假定は、其の樣な死んだ形式ではなく、意志があり、感情もある。夫故に之を感情的假說とも云ひ、又要求假定とも云ふので、卽ち實用的であり、或は一つの目的を持つて、夫に達しようとする心から、出來て居る生きた假定である。それであるから、只眞理を知ると云ふ事丈けではなく、其の外に一つの價値を認めるのであつて、人間の目的と云ふ要素が其の中に這入つて居る。故に眞理に對しても、知りたいと云ふ一つの熱心があり、知るならば、之を行つて目的を達したいと云ふ欲望があつて、眞理を求める。夫故勿論事實に重きを置くが、獨り事實を重んずると云ふ事丈けではなく、其の形式、事實に一つの價値があつて、其の價値を認めるのである。そこで今迄餘り重きを置かなかつた感情的態度を重んずるのである。若しもこの論理から、慾望と、價値を要求する要素とを缺く時は、我々の研究は無味乾燥になり、形式になり、不熱心になつて、どうしても

眞理を發見し、發明の効果を收める事は出來ぬ。昔から何か一つの眞理を發明したニユートンとか、コペルニカス、コロンバスとか云ふ樣な人々は、皆此の慾望が强く、且充分其の假說の價値を認めて居つた。それであるから、如何なる事があつても折れない。色々想像して、夫を事實に照らし合せ、百折撓まず研究して遂に非常なる大發見をする事が出來たのである。故に科學上の假說にも亦感情を要し、趣味を要し、目的を要し熱心を要するのである。

## 要求假定と理想との關係

理想よりも、要求假定の方が意味深く、且其の內容の要素が多い。主行主義者の考に依ると、我々の自覺が最も具體的に、最も根本的に現れたものは、此の要求假定であつて、之は實に我々の精神的原理である。此の要求假定の力が凡ての原理を產作して、凡ての實驗を始め、凡ての努力を保存して行くのである。然らば此の要求假定は卽ち我々の精神的理想であるかと云ふと、それは少し違ふ。理想は我々の觀念であるが、要求假定は我々の觀念に力の加はつたものである。故に理想は要求假定の種であり、芽である。此の芽が成長發達したものが要求假定であつて、理想には觀念、目的があるが、其の觀念、目的に向つて働く力の、非常に發動した狀態が、卽ち要求假定である。夫で殆ど此の要求假定と云ふ事はグリーンの用ゐる動機と同じ樣なもので、自分のものにした動機と自己とを同化したもの、卽ち動機と、自己と、一體になつたものであるから、之まで我々の云つて居つた理想と云ふ事を、もう少し進んだ意味で云へば似ては居るが、理想よりはもつと力があり、深いものである。

## 道德主義と要求假定との關係

道德主義は理想と似て居るが、理想の方が意味が少し廣い。理想は卽ち眞善美の理想であるが、道德主義は善の理想である。道德と云ふ事は實在の價格、事實の價格である。事實は只一ツの事實として存在するのみならず、實在は價値を持ち、目的を有して居る。其の價値を見出すのが道德であつて、道德の理想の善は、卽ち道德的調和である。然し此の道德的調和、卽ち善の理想は、決して銘々孤々に獨立して居るものではなくして、理想と理想、又動機と動機とは、相互に關係があるのみならず、共同して居るものである。卽ち眞の理想、幸福の理想、美の理想等は、悉く一つの價値と、目的とを持つて居るもので、其の理想は悉く善と云ふものゝ要求假定に適合して居るの

である。而して其の適合し、調和した理想、要求假定を、精神的完全と云ふので、之卽ち道德的要求假定である。故に此の意味で云へば、道德主義と道德要求假定とは、殆ど同じものとなる。

## 信仰と要求假定との關係

ジェームスは、宗教的要求假定は卽ち信仰する意志であると云つた。故にジェームスの考では、宗教には矢張意志、卽ち此の信ずべき意志がなければならぬ。彼は宗教的要求假定を假說といふ言葉で云ひ表し、之を二つに區別して、第一を死した假定とし、第二を生きた假說とした。死した假說とは、其の人の心に更に痛痒を感ぜざる、又更に感應なき心狀態で、生きたる假說とは、それに觸るれば直ちに感應して、之を熱望し、又之を實行せんとする、意志の狀態を云ふのである。又ジェームスは假說を選擇する心の狀態を次ぎの如くに分けた。

| 眞實なる選擇 | 不眞實なる選擇 |
| --- | --- |
| 一、生きたる假定 | 一、死したる假定 |
| 二、避け得可からざる假定 | 二、避け得る假定 |
| 三、重大なる假定 | 三、重大ならざる假定 |

生きた假定、避け得可からざる假定、重大なる假定とは、生きた宗教の生命を得るか、否か、眞理に從ふか、背くかと云ふ樣に、實に己の運命に關し、精神の生死に關する重大なる問題の、二つに一つを選ぶといふ心狀態で、又之に反對なるものは、何れに向ふも、更に己の利害得失にさへも關ぜずと云ふ道を選ぶ心狀態を云ふのであつて、卽ち前者は之を熱望し、要求し、之を實行せんとする意志の態度で、後者は冷淡なる感應なき、死した心狀態である。ジェームスは前者の如く生きた、感應あり、熱望あり、之を實行せんとする意志のある心狀態を指して、宗教的要求假定の要素、卽ち信仰なりとした。實に此の心の態度は、理想に生き、現在に活動して、啻に價値ある實を擧ぐるのみならず、情の滿足、知の滿足を得て、永久に進步發達して止まざる不老不死の生命である。

## 人格と要求假定

要求假定と云ふ中にも、人格を重んずると云ふ意味も含んで居る。之卽ち主行主義をシラーが人本主義、或は人格的理想主義、具體的理想主義等と申した所以で、要求假定は人格に其の本を發して居るのである。夫故要求假定は非常に人間の理想、人格に重きを置くので、此の理想と云ふ事と、人格とは、殆ど同じ樣な意義を持つて居る。それであるから主行主義は、卽ち

人格的理想主義とも云へるので、夫に對して主理說は絕對的理想主義とも云ふ可く、極端な經驗派は卽ち自然主義である。而して絕對主義は、神、理想、知識、或は人間、社會等を悉く絕對的理想を以て說明せんとし、夫に反して自然主義は自然、或は萬有、換言すれば物質を出發點として說明せんとする。然し人格的理想主義の出發點は人である、人格である。卽ち自覺の力あり理想を作る事の出來る人を、出發點として進むのである。此の考から主行主義を、人格的理想主義とも云ふのであつて、主行主義は實に此の人格主義を主臺とし、其の考を保育し、發達させて行くのである。そこで主行主義の宇內の窮極の目的は心靈であり、精神である。卽ち精神的完全を目的とするのであつて、此の主義に類似して居る主意說、人格的理想主義、道德主義、人本主義等も亦、一言で云へば人格主義のものと云ふ事が出來る。卽ち之等の主義は皆人格と云ふ要素を備へて居るので、此の關係を深く考へるならば、今私が云はんとして居る、大切な意味が分るであらうと思ふ。然し此の主行主義の議論と雖も、決して完成したものではないから、我々は研究的態度を以て、今後ます〳〵深く之に就いて考へる事が必要である。私は今其の要素を申した丈けであるから、あなた方は自分で一層深く研究して全體を綜合し、眞の意味を見出さなければならぬ。

主行主義から云ふと、人格は卽ち要求假定であり、要求假說は卽ち人格となるのであつて、獨り科學の研究に假說は必要であるのみならず、近世は修養にも、道德の上にも信仰にも、社會改善の上にも、必要であると認められる樣になつた。此の假說は從來のものゝ如き、冷淡な知識のみの關係ではなく、理想の關係であり、又意志の關係、動機の關係であつて、換言すれば我々の精神の力である。そこであなた方は實際問題として、要求假定とは如何なるものか、夫は如何に我々に必要であるか、必要であるならば、我々は如何にして之を作るべきかと云ふ事を、よくお考へにならなければならぬ。

あなた方は學問をして、一つの眞理を發見し、器機を發明し、又は社會改善なり、家庭改良なりの新しい方法を見出し、或は品性を修養し、自我實現をする爲に讀書し、觀察し、活動して、實行に務めて居るが、其の熱心、努力の割に、實際に効果が現れぬ事の原因は何か。今日我が國の靑年が、教育の効果を現す事が六ケ敷いのは何故かと云ふと、私は思ふに此の要求假定を作る事が出來ないと云ふ事である。要求假定を作ると云ふ事は、一つの發見であり、思想の上の發明であつて、佛教で所謂大悟徹底とは、之が出來た心狀態を指すのである、先づ

我々の心の中に要求假定が出來なければ、其の次の働きは起らない。實に天才とは要求假定を作る力のある人である。要求假定の構成力の強い人が卽ち天才である。換言すれば我々の人格も、實力も、凡て精神から湧き出づるので、人格の根源は、實力の源泉は唯物質ではなく、唯事實ではない。物質、事實を支配し、我々の生命をも支配する精神である。其の精神とは何であるかと云へば、人間の思想であり、要求であり、意志である。我々が實力を養はんとし、人格を作らんとするならば、先づ此の根本を養ふべきで、根を養はずして枝葉を伸ばさんとし、實を結ばしめんとしても、それは到底不可能である。前に私が申したインスピレーションとか、又心の震動とか云ふ事は、言葉は違つて居るが、意味は矢張り此の要求假定と同じ樣なものであつて、あなた方は眞に之を同化し、自分の經驗上より發見する所がなければならぬ。そこでもう一言之をあなた方の經驗に照らして申したならば、一層分りよいかと思ふ。

此の間私は雰圍氣（Atmosphere）なる言葉を用ゐ、本校の運動會が人に一種の感動を與へることが出來たのは、善い空氣が出來たからであると申したが、其の雰圍氣、卽ち氣持ちは何から出來るかと云へば、矢張り人間の要求假定から出來るのであつて、我々がクリストや、釋迦の像を仰いで、崇高なる感動に打たれ、其の顏から御光が發する樣に感ずるのは、つまりクリストや、釋迦の精神の中にある要求假定が光輝を放つからである。若しも此處に向上心に滿ち、同情に滿ち、犧牲の精神に滿ち、活動の氣に滿ちて居る人格があるならば、假令其の人は一言も云はず、手足を動かさずとも、其の精神は顏から、身體から發射して、怠け者を奮起させ、失望して居る者に勇氣を與へ、病める者を癒す事が出來るのである。然しもし之に反して知的要求假定も、道德的要求假定も、宗教的要求假定も、人格的要求假定もない、卽ち頭腦が死の狀態に居る人があるならば、丁度動植物等が死して腐敗し、其の臭氣が人身を害する樣に、此の死んだ精神は腐敗して惡臭を放ち、人心を毒せざれば止まない。此の死んだ精神、腐敗した心理狀態を何と云ふか。失望、不平、憤怒、嫉妬、怨恨の情、復讐の念等は卽ち之である。故に我々の思想が我々の行爲となり、品性となり、社會の雰圍氣となるのであつて、我々の發展、社會の改善は、唯言葉や、文章や動作のみで出來るものではなく、換言すれば人間社會は卽ち精神的のものである。此の精神界を動かすものは、我々の頭腦の中にある要求假定で、卽ち我々の欲望、意志、思想、感情であり、一言で云へば我々の意志である。

夫で我々は修養の上にも、亦研究の上にも、心の態度に非常

に注意を要するので、もし之に氣をつけぬと、兎角人間の頭腦は腐敗し易いのである。一度頭腦が腐敗すれば、其の人の人格は直ちに落ち、實力は無くなつて仕舞ふ。何故に婦人に實力が無いかと云へば、從來婦人は此の要求假定を生かして行く方法を知らなかつたゝめ、頭腦が停滯し、固定して、腐敗し易かつたのである。而して之は獨り精神の上計りでなく、身體も矢張り同じ事で、身體の弱い人は、自分は弱い弱いと云ふ假說を作るから、猶更病などに襲はれる。自分の缺點を省みて潔く改める事は大いに必要であるが、自分の品性は卑しい、自分には罪惡が多いと、此の樣な假說を拵へてくよ〳〵し、氣を腐らせるのは、最も愚かな事である。私の見た不幸な家庭の大部分は其の主婦に原因があつた。主婦の腐敗した思想は夫を害し、子を毒する事が實に甚だしいのである。萬一あなた方が今眞に精神的生命を得なければ、直ちに世の壓迫に負けて、死んだ頭腦となり、其の腐敗した思想は己を殺し、人を害し、子孫を毒し、延いては社會を害し、實に恐るべき結果を生ずるのである。故に我々は常に美しい感情、善き思想を以て精神を滿たし、其の精神の調和統一によつて出來た要求假定の光輝を以て人を照らし、此の原動力から出る力を以て人を教育するならば、其處に始めて眞の感化が行はれるのである。實に此の要求假定と云ふ事の中には、非常に大切な意味が籠つて居るのであるから、あなた方は一層深く之に就いて考へ、只其の意味を知つたと云ふ計りでなく、夫を自分に同化し、信仰にし、經驗にし、此の經驗に依つて、更に進んだ思想を見出す樣にして行かなければならぬ。

## 第四、眞理の證明法

今は明治四十年に於ける、最終の實踐倫理講話の日である。夫であるから先づ今日は、此の一年間の結論をつくべきが至當であると思ふが、之は獨り私が斯く考へる計りでなく、多分皆さんもさう御思ひになるであらう。そこで私は之を丁度今我々が力を注いで居る主行主義の研究に結び付けて、今年の結論を求める樣に致したいと思ふ。此の前私は要求假定と云ふ事を申し、之を拵へる事は研究の爲にも、修養の上にも非常に大切であつて、此の働きの出來る人は實に天才とも云ふべく、之を見出した人は、卽ち思想上の大いなる發明をしたのであると申したが、其の意味は大抵お解りになつたであらうと思ふ。此の知識の土臺となる要求假定が、我々に出來たならば、其の次ぎに起る働きは何であるかと云ふと、之は卽ち證明（Verification）である。證明とは我々の頭腦で考へて居る事が、確實なる眞理

であるか、どうかを證明して行く働きであつて、此の働きは實に學術の研究にも、人格の修養にも、宗教の信仰にも、同じく必要のものである。之を說き明すならば、眞理とは何か、我々の知識とは何かと云ふ事が、一層明らかになるであらうと思ふ。我々は玆に認識學の土臺を築く爲に、今日の世界の最も進んだ思想であり、且今日の我が國に、最も必要なものであるとおもふ主行主義を紹介したが、之が果して眞理であるか、どうか。假令一般的には眞理であるとしても直接あなた方に眞理であるか、どうかは、此の證明をして見なければ分らない。卽ち慥にあなた方は主行主義を同化して、自分の知識にする事が出來たか、どうかを證明して見る事が大切で、詰り之が本年の結論を求めると云ふ事になるのである。

今學年の始めに於て、我々は實力の養成を目的とし、學理を實際に應用して、思想と、實行の兩方面を併行せしめ、斯くして研究力を養ひ、研究の方法を實驗せんとしたが、其の實驗とか、研究とか云ふ事は、如何なる事であるかと云ふと、何か一つの假說、或は要求假定を以て、事實に照らし合せ、實際に應用し、己の行爲に實現して見る、卽ち實在に照らし合はせて見る働きで、矢張り之は證明である。故に證明と云ふ事は、平易に云へば研究であつて、若しも我々が主行主義の證明の方法を知り、之を應用するならば、必ず我々は眞の研究をする事が出來る。眞の研究が出來れば、其の結果として、必ず實力は養はれるのである。然らば其の主行主義の證明の方法とは、如何なるものであるか。玆に主行主義者の言葉を引いて、其の研究の態度を明らかにして置きたいと思ふ。ジェームスは曰く、

眞理は一つの觀念から生ずる。卽ち要求假定は一つの理想であり、要求のある假定であつて、未だ眞理ではない。其の理想、要求假定が、如何なる働きに依つて眞理になるかと云ふと、眞の理想、眞の觀念は、先づ同化し、確實にし、確定し、證明し得るものでなければならぬ。換言すれば、自分に同化し、確定し、證明する事が出來るものが眞理である。之に反して我々が同化し、確實にし、確定し、證明する事が出來ぬものは誤れる眞理である。

シラーは曰く、

「行動する者卽ち眞理也」

從來の論理では、夫が働きをなすと、否とに關せず、只其の考が實在に一致さへすれば、眞理であるとしたのであつた。然し主行主義者の考はさうでない。デューイは曰く、

我々の意志、欲望に、滿足を與へるものが眞理である。若しもそれが眞理であるならば、必ず愉快でなければならぬ。

而して主行主義の考に依れば、宗教も、科學と同じ樣に、證明と云ふ事に依つて進むので、只其の異なる所は證明の方法と、證明する範圍とであつて、卽ち宗教は科學よりも、もう一層深く進むのである。故に宗教と科學とは、其の問題とする所は異なつて居るが、然し其の生命を得、効果を現し、進歩して行く仕方は同じで、卽ち要求假定を作つて、其の要求により、一々假定を證明して行くのである。此の證明と云ふ事を經驗して、己の習慣とする事は、最も我々にとつては大切で、此の習慣が出來なければ、研究も出來ず、信仰も修養も實力の發展も、望み得べからざる事である。そこで此の證明と云ふ事の習慣が今年に於て我々にはどれだけ出來てあつたか、卽ち先日から說いて來た主行主義の說が、あなた方に如何に消化され、同化されて居るか、平易に云へば、主行主義の眞理は、あなた方に如何なる利益を與へたかと云ふ事で、主行主義の說に依れば、眞理ならば、必ず利益がある筈であるから、あなた方の頭腦に這入つた事が眞理ならば獨り實在と一致すると云ふ計りでなく、必ず利益がなくてはならぬ。ジェームズが重きを置いたのは實行的効果で何事も此の實行的効果に依つて、夫が眞理であるか、どうかを判斷する事が出來ると云つて居る。此のジェームスの重んずる効果、シラーの云ふ行動、デューイの滿足論理の重んずる一致等、誠に色々あるが、果して之が眞理であるか、どうか、我々はそれに就いて證明して見なければならぬ。

何が眞理であるか。眞理では如何なるものであるか。それに對しての答は色々あるであらう。勿論主行主義の主張する樣に、眞理は行に一致して、利益を伴ふものでなければならず又、意志を滿足させ得るものでなければならぬが、先づどの學說にても缺いて居らぬ要素は、眞理と云ふものは實在にも一致しなければならぬ。而して今此の眞理を證明するに當り、心得べき要件に就き、委しく說明し度いが、時間に限りがあるから、其の大體丈を申して置かうと思ふ。

## 言葉と事實との一致

我々の云ふ言葉は、其の事實と寸分違はぬもの、卽ち極く正確なものでなければならぬ。此處に於ては眞理とは正確のものであると云ふ事が出來る。此の正確の習慣は、實に眞理の探求に缺くべからざるものであるが、其の反對に、不正確な頭腦の人ほど危險である事は、云ふ迄もないが、社會にとつても實に危險である。科學とは此の正確の觀察、正確の判斷を云ふのであつて、此の正確の習慣を缺く人は、迷信に陷り易い。迷信と云ふ事は獨り宗教の上のみならず、學術研究の上にも、亦我々

の日常の事にもあるので、所謂針小棒大の言を信ずるのは不正確の觀察、不正確の判斷の結果であつて、矢張り一ツの迷信に外ならぬ。舊約聖書を讀んだものは知つて居るであらう。ヨブは雇人等の誤れる報知を信じた爲に、如何に無用な、役にも立たぬ心配をしたかも知れぬ。之は極端な一例であるが然し我々の日常生活には此の種の事は澤山ある。卽ち彼の想像から生じた風說とか、針小棒大の噂とかを信じて、餘計な心配、苦勞をするのは、矢張り研究の態度と、正確な判斷とを缺く所から起るので、丁度宗教の迷信が、人間に非常な害を及ぼす如くに、此の不正確な判斷は誠に恐るべき結果を我々に與へる。故に此の不正確の習慣を改めないものは、到底眞理を見出す事は出來ない。そこで我々は自分の頭腦が、今年に於て果して、どれ程の正確の習慣を養つたかと云ふ事を、よく證明して見なければならぬ。

## 言葉と思想との一致

此處に於ては、眞理は正直であると云ふ事が出來る。此の正直と云ふ事は、眞理の探求にも、人格の修養にも缺くべからざるものであつて、事實と言葉との不一致は、事實を見れば直ぐに誤りであつた事が分るが、此の言葉と思想とが一致しないときは遂には行爲に現れて、分らずには居らないが一寸直ぐには分りにくいのである。此の不正直の頂上は國を賣り、友を賣ると云ふ事で、昔から、此の例に擧げらるゝ人も少くない。彼の佞臣とか、奸臣とか云ふ樣な輩は、之は君の御氣に入つて、自己の榮達を計る爲に、只管心にもない甘言を呈するのであつて、實に卑しむべき者と云はねばならぬ。之に反して、言葉と思想と一致する人は、之を忠臣と云ふ。忠臣は君の行に、過ちがあると思ふときには、面を犯しても諫め、聞かれずして遂に命を捨て、犧牲になる樣な事があるかも知れないが、其の樣な事の爲に、決して躊躇しない。而して之は唯君臣の間計りでなく、友の關係も矢張り同じ事である。此の正直な心が缺けて居るならば、我々は到底人格を作る事も出來ず、眞理を發見する事も出來ない。何故ならば、正直の人は確に眞面目であり、眞面目の人は又忠實で、何事をも本氣でするが、不正直の人は不眞面目、不忠實で、少しも本氣でない。斯かる人は何時になつても進步がなく、遂には人の信用をも失つて、後悔しても及ばぬ樣になるのは、明らかな事である、我々は此の大切な正直の習慣を今年に於てどれほど得たか證明して見なければならぬ。

## 思想と事實との一致

思想と云へば、我々の心の中に畫いた繪であり、假說であり、要求假定である。事實とは何かと云へば、行爲であり、實在である。例へばコペルニカスは、宇宙の關係は太陽を中心として、世界は其の周圍を廻るのであると云ふ要求假定を作つたが、更に之が事實に適合して居るか、どうかを觀察し、天體の運行を深く研究して、頭腦の中の要求假定と、天體の實在とが一致して居る事を確めて後、始めて其の說は眞理となつた。玆に於ては、宇宙の秩序は人間の意志から、獨立して存在する實在であると云ふ意味になる。更に云ひ換ふれば、自然の法則、萬有の秩序、人間社會の道德的秩序等は、人間の心、卽ち個人の感情、思想、意志等から獨立して存在する場合がある。例を擧ぐれば、私が此所に立つて話して居る間に惡い心ではないが、熱心の餘りに自分の立つて居る所は、端であると云ふ樣な事は忘れて仕舞ひ、過つて足を踏み外すならば、運惡く頭を打つて、非常な怪我をするかも知れぬ。假令ひ私が善い心でしたにせよ、惡い心でしたにせよ、足を踏み外せば、直ちに引力は働いて、私を下に引きつけ、或は怪我をさせるかも知れぬ。其の時私の意志が落ちまいと思つても、落ち樣としても、引力は少しもかはりないのである。故に我々は只正直でだけあつても眞理を見出す事は出來ない。自分の頭腦の中に描いて居る要求假定が、果して自然の法則萬有の秩序、或は人間社會の道德的秩序と一致するか、どうか證明して見なければ、果して眞理であるか、否かは分らない。そこで此の證明と云ふ事が、非常に必要になるのである。例へば或る電氣會社の職工が、誠に正直ではあるが電氣學を知らぬ爲に、過つて火事を起し、人命を損ふならば如何であらうか。其の惡い結果は、決して不正直から出たのではなく、萬有の秩序を知らなかつた所から起つたのである。斯くの如く世の中には、正直であつても己を害し、人を損ふ人がある。之は卽ち痴愚で眞理を知らず、實在の關係を知らぬ、卽ち證明をして見る事を知らぬ爲に、自分の頭腦の中の假說と、實在と一致して居らぬのか、分らぬ人である。我々は今年に於て、思想と實在との一致をどこ迄計る事が出來たか證明して見なければならぬ。

## 人格と實在との一致

玆に於ては、眞理は只學說の組織に非ずして、關係の組織である。換言すれば、眞理は心の關係、卽ち意志と、意志との關係で、一言で云へば、眞理は人格であると云ふ事が出來る。此の關係が我々に非常に大切なものであつて、モレルが、眞理は働くものであると云ひ、ジェームスが實行的効果を重んじ、デ

ユーイは滿足であると云ひ、又知識は意志であると云つたが、尙此の外の多くの學者の議論をも綜合して深く考へると、畢竟、眞理は人格或は實行の力であると云ふ事になる。

故に眞理と云へば、頭腦の中の要求假定だけではない。夫が證明されて行爲に現れ、其の行爲が自分の利益となり、幸福となる迄に所謂全身仁となり、全身愛となり、至誠の化身となつて、自らも實に滿足して、常に旺んなる向上心と、强き意志を以て働いて居る人格が、卽ち眞理で、此の意味から、人格は卽ち意志であると云ふ事が出來る。故に眞理と云ふものは、本に書いてある原理ではなく、引力とか愛の力とか、誠の力とか云ふ樣な、形式の言葉でもないのであるが、兎角從來の誤つた習慣から、徒に生命のない形式を追求し、澤山言葉さへ暗記すれば、夫が知識となり、眞理である樣に思ふ人が多い。未故知識とは何であるか眞理とは何であるかと云ふ事を明らかにして置く事は我々の研究の上にも、修養の上にも非常に大切な事である。從來の論理は卽ち歸納法で、事實を觀察し、分類し、抽象して、正確なる判斷を下し、一つの概念を作り、夫と實在との一致が、卽ち眞理であると云ひ、且正確の判斷を下し、科學的の研究をするのには、知の働きは必要であるが、之に意志や、感情が加はると、偏見になり、判斷を誤るから、欲望、意志、感情、目的等は排斥しなければならぬとした。もしも我々が此の研究法に從ふならば、科學に呑まれて無味乾燥になり、理想もなく、思想の貧しい者になるか、或は煩悶に陷るか、然らざれば迷信に走る樣な結果になる。實行主義の考に依ると、知の働き計りでは知識は出來ない。矢張り主意說の說く樣に、凡ての感情の統一した意志が、知の上に加はる事が必要である。此の意志には實行と云ふ事があり、實行には利益があり、利益には興味があるので、此の實行主義の研究法に依れば、大いなる興味を以て、衷心から眞理を愛して、本統の研究をする事が出來る。

此の主行主義の研究法を紹介する事は、實に今日の我が國の教育界に、最も必要な事であつて今日の學生は、只漫然と澤山の書物を讀み、多くの事實を暗記すれば實力が出來ると思ひ、或は試驗の爲に、消化する事も出來ない知識を詰め込むのに、汲々として居る計りである。斯くの如き方法で學問をするならば、只生きた字引になる事は出來ても、決して人格は作られない。人格の出來ない人に、よい要求假定の出來る筈はないから、斯かる人は傲慢になり、利己的になり、學問をすればする程、益々曲つて、少しも眞理は目に映らず、遂に社會からは棄てられ、家族に迄嫌はれて、少しも滿足が出來ず、不平を抱い

て、悶々の中に生涯を終る樣になるので、之は實に主知學問の弊である。從來婦人に學問させるのを嫌つたのは、實に斯かる品性になる事を恐れたからであつて、此の弊を救ふのには、主行主義の方法は確かに非常なる効果がある事を、私は信ずるのである。主行主義はキリスト教の眞隨も、佛教の精粹を持つて居り、其の上神道の要素も、凡ての眞隨を容れて、大いなる同情を以て育てゝ行くのである。或人は我々が人の爲に盡し、大いなる同情の念を以て、國家社會に對し、人道に對するを、愚かな方法であると云ひ、迷信であると云ふが、夫は非常な誤りである。何故かと云へば、同情を以て互に扶け合つて行くと云ふ事は獨り宗教上、道德上の秩序であるのみならず、之は實に宇宙の傾向であり實在である。故に人間社會に於ては、此の要求假定と、實在とは全く一致し合體するのである。故に主行主義は人格を重んじ、意志を重んずるので、此處に於て意志と意志との關係、自分の經驗と、他人の經驗とは、益々精選されて、自分の人格を作り、他人の人格をも高める事が出來るので、之が卽ち人間の價値であり、永久の生命のある所である。そこで終りに臨み私は、あなた方が此の主行主義の證明の方法に依り、自分の人格に就いて、行爲に就いて、又今年研究した事、自分の眞理と信ずる所が、如何なる効果を現して居るかを省み、之に依つて、大いに見出す所がある事を切に切望するのである。尙此の證明法は後に說く處の眞理の條に就いて明らかになるであらう。

（「花紅葉」第五・實踐倫理講話）明治四十年十一月～十二月

## 時代の精神を讀め

讀めとは敢へて目に訴ふる意ではない。我々の頭に、否、全精神に同化して、所謂眞に理解して我々の人格とせよといふのである。

時代の精神は、一、二社會の指導者によつて生るゝものではない。既に社會一般の大勢の其の傾向を生じ、少くとも其の傾向たらんと要求する時、一、二の先覺者が該博なる知識を以て、之を科學的に證明して社會に發表し、社會の傾向を指導し、或はその要求に應ずるのである。故にこれ等先覺者の言は、社會一般の精神を代表したものと見ても差支へはない。

人若し計畫を立てんとする時に當り、時代の精神を知らなければ恰も羅針盤なき航海の如く、五里霧中にさまよふであらう。我々の理想も時代の精神によつて生きてくる。理想に生きて居るものゝ人生は實に希望洋々たるものである。

茲に新たなる年はまた巡つて來た。何人も幸福多き年なれかしと希ふであらう。茲に於てか最も輝ける希望を拘く爲に、最も進んだ理想を描き、最も進んだ理想を構成せんが爲に、時代の精神を知る事が最も必要であると思ふ。

今日歐米の思想界には如何なる震動が起りつゝあるか。哲學も科學も文學も宗教も、互に姉妹の如く相提携して、根本に於て調和し、人生の進歩に貢献する事を以て唯一の目的として居る。之は哲學の新學說である主行主義がよく證明して居る。この主義は米國ではジエームス、デユーイ等の學者によって稱へられ、英國ではシラー、伊太利ではパピーニといふやうな學者によって主張されて居る。其の主義とする所は、凡て人生の經驗を基礎として理想を立て、この理想を悉く人生に活用せしむる目的をもつて居る。而して慈母の如き態度を以て、あらゆる極端なる學派を調和して居るのみならず、科學と宗教、宗教と哲學、哲學と文學等、あらゆる科學をも統一し、確實なる知識と寛大なる態度と、進んで止まぬ理想とを持たしむるものである。從つてこの主行主義の思想は國家、社會の文化の上に直ちに影響して、商工農業等に學理應用せられて、殖產の途は著しくあがり、其の他凡ての科學の上、世界の平和に人類の幸福の上に、或は人道の上に、莫大の利益を及ぼしつゝあるのである。

卽ち從來の科學は眞理の爲に眞理を研究するので、極めて無味乾燥であつたが、今日は人生に直接應用せんとの目的を以て學理を究めるのであるから、その興味は津々として盡きない。例へば近頃米國で開かれた萬國動物學會の如きは、萬國から一流の學者が凡そ六百人も寄つた。本校の教授の渡瀨博士の如きも出席せられたが、歸朝後、其の模樣を聞く所によると、歐米社會の學理應用は、實に非常なる勢力であつて、着々効果を收めつゝある。ワシントン州一州で、動植物學理應用の爲丈けでも一ケ年一千萬圓は費されて居る。然しその金は殆と事業に投資すると同じ事であつて、殖產の上に、直ぐ樣幾倍かの利益を齎すのである。日本の蠶業の如き既に大いに研究せられて、彼の地で桑で仕立つる事をも試みつゝありと云ひ、樟腦の如きもこれ迄は出來なかつたのであるが、近來は盛んに栽培して、その上葉からでも、木からでも、根からでも採る事を研究した。橄欖の如きも之を培養する方法が研究せられた。斯くの如く萬國にあるものを研究して、直ちに之を自國の殖產の上に應用する、虫害の如きも撲滅の方法は講ぜられて、その消費は救はれつゝある。また國力の發展に必要なる殖民の第一の敵である病氣も、之を打ち破らんと研究した結果、凡て動物から來るとい

ふ事が分つた。地中海の或島の如き、半數以上は常に病人であつたが、其の原因は山羊の乳にあると云ふことが分つて、救濟の道は企てられて居る。また或島の如きは、蚊が風土病の原因であると云ふ事が明らかになつて、之が撲滅され、その風土病は跡を絶つたといふ。斯くして殖民事業は成功して居る。米國の富力は今や學術應用によつて、益々膨脹するのみである。科學が殖産の上に直接斯くの如き大關係を有する事は、日本等の夢にも及ばぬ事である。

其の他の生物學でも、從來はダーウインによつて見出された生存競爭を以て進化の法則として居つたが、今日は新たに相互扶持の方則（The low of mutual aid）が其の本性にある事を見出され、從つて社會もまた利己では通過する事が出來ず、他愛主義によつて、互に相扶持されなければならぬと云ふ事が明らかにされた。

教育は如何であらうか。實驗を尊び、從つて境遇に重きを置くやうになつた。即ち社會的境遇を與へて、凡て實驗しつゝ、正確なる知識を養ひ、活用力を持たしむる事に務めつゝある。

文學の如きもまた大いに其の影響を蒙つて、空想を喜ばず、客觀によつて、實際の經驗、或は實際の成行きを寫す事に務め、凡て實感を尊ぶに至り、次第に社會的興味をも加へんとしつゝある。自然派の如きは、我が國現今の文學界には、多少曲解して行はれて居るが、歐米に於て行はるゝ眞正の意味から見れば、文學が主行主義を加味して來つた傾向ではあるまいかと思ふ。

顧みて我が國の現狀を見れば、誰か慨嘆せずに居られやうぞ。未だ科學と哲學、哲學と宗教とは相容れないのみならず、科學には高尚の理想なく、實際の應用なく、無味乾燥である。哲學、宗教は幾分か他より早く主行主義をうけんとする傾きがあるが、未だ全く覺醒したとは云へぬ。教育の如きは其の宿弊も甚だしい。形式を非常に重んじ、學問の動機は試驗の成績にあるのである。社會の理想を養ふ文學は如何であらうか。風教に害あるものにあらざれば陳腐極まるものが多い。而して之等凡ての學問に一つの統一なく、調和なく、活用の見るべきものがないので、社會の思想は腐敗に傾き殖産は疲弊せざらんとするも能はざるのである。今にして氣付かざれば、如何にしてか世界の强大國なる面目を保つ事が出來やう。過去の失敗は敢へて追ふ事を好まぬ。吾人は年と共に大いに覺醒して、時代の精神を讀み、世界的大思潮にふれて、以て根本からの改革を促さなくてはならぬ。我が國民には最も實行力が缺けて居る。主行主義等もその學說は既に三四年前に輸入してゐるが、社會に何

の反響もないと云ふのは、畢竟實行が缺けてゐるからである。否其の主義の實際を讀む事即ち同化する事が出來ないからである。我々は今日只今よりその宿弊を改めて、知行一致を期し、時代の精神を讀んで、一大理想を構成し、之を實現するに勇往邁進せねばならぬ。

（「家庭週報」第百二十七號）明治四十一年一月

## 我が國の豫言

各國の歴史を按ずるに、何れの國にもその國の運命を卜して、之を豫言の形にてあらはし、或は之により國民を勵まし、或は之によつて國民を反省せしめ、警戒せしむると云ふ事が國の歴史上に往々現れて居る。其の豫言には積極的のものと、消極的のものとある。即ち樂天的豫言と非觀的豫言との區別がある。而して現今の諸强國の多くの豫言は悲觀的に傾き、我が國の豫言は樂天的であると云ふ事が出來やうと思ふ。一例を擧ぐれば今日歐洲に於て日の出の勢ひを以て王榮せる獨逸帝國に昔一人の豫言者が現れ、國の運命を卜して國民の警戒を促した。其の豫言に云ふやう「將來一年の中に三人の帝王が王位に昇らるゝであらう、その中の最も若き王は七人の王子を擧げ而して彼は祖國の滅亡を齊するものである」と。千八百八十八年三月三日（今より二十年前）獨逸皇帝ウヰルヘルム一世薨去し、皇太子フレデリツク病を冒して王位を繼がれた。然るに七月廿七日三ケ月を出でずして斃れられ、次いでウヰルヘルム二世が王位をうけらるゝに至つた。果して豫言の如く一年に三人の帝王が王位に昇られた。なほ不思議にも即位後三ケ月にして第五皇子の御誕生があり、三年にして第六皇子の御誕生があつた。萬一なほ第七皇子の御誕生があらば、この國は亡び、皇室は覆るであらうと、かの豫言を覺えて居つた國民は非常に憂慮したのである。これは迷信ではあるが、國民をして大いに反省せしめ、斯くの如き禍の國家に來らざらんことを希はしめたのである。然るに天は國民の反省と悔悟とに報い、其の國家を祝し給ふたのであらうか、幸にも第七番目は皇子にあらずして皇女であつた。即ちルイスチエンと名づけられたる御方で、此の時の皇室、國民の喜びは非常であつた。これは消極的豫言の一例であるが、之に類した豫言が歐洲に一般に行はれてゐる。「金持は三代續かず」と云ふやうな詞である。金持とは貴族、富豪等上流社會を指すのである。かゝる不吉、消極の豫言は人間を悲觀に陷らしめ、恐怖に陷らしむるものである。然しこの豫言は彼等の豪奢となり、安逸に流るゝの弱點を省みさせ、大いに子

弟の教育に改善を加ふるに至り、歐米を救ふ力を持たしめたのである。斯くの如く、消極的豫言も聞きやうによつては國民を反省せしめ、覺醒せしむる事が多く國家に對して有効であると云ふ事が出來る。なほ之にも增して積極的豫言は國民の理想を向上せしめ、元氣を鼓舞するに有力なものであると云ふ事は、歷史の證明する所である。殊に我が國の歷史に明らかであり、就中紀元節に於て一層印象を深からしむるものである。我が太古に於て天照皇太神がその皇孫に對して永久の祝福を垂れ給ひ、且大和の國の將來をトし給へるが如き詔「寶祚ノ隆ナル事、天壤ト共ニ窮リ無カルヘシ」といふこの豫言はいかに我が國運の發展に與つて力あるものであつたか。我が國が屢々外患を蒙つたにも拘らず、一度も其の神聖を犯された事の無いのを、國民は天佑と信じて居る如く、我が國の空氣は國民に計るべからざる集中力をあらはさしめ、偉大なる活動に堪へしめたのである。今朝奉讀せる勅語にも「我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムル事宏遠ニ德ヲ樹ツル事深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス」この國體卽ち國家の國風と云ふものゝ中に、教育の淵源はあるのである。我が國民はこの豫言を二千五百六十八年間實現しつゝ今日に至れる事によつて、益々この信仰は深くなつて居る。この信仰あるによつて、今日世界の壓迫をうけても、我々に非常なる自信と勇氣とが出づるのである。然し我が國民は斯くの如き樂天觀を以て、現狀に甘んずるものではない。また我が國は天佑によつて、各國の豫言にあらはれたる國家の滅亡と云ふが如き危急存亡に遭遇した事がなかつたかと云ふに、決してさうではない。教育勅語の中にも明らかに此の兩方面があらはれて居る。我々はこの紀元節に於て「寶祚ノ隆ナル事天壤ト共ニ窮リ無カルヘシ」と云ふ事を深く印象すると同時に、また國家の運命のかゝる所を察しなければならぬ。危急存亡の時は現狀を看破し、自覺しなければならぬ。余は今朝奉讀せる勅語の中、殊に深く感じた所は、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」といふ所である。今日我が日本は太平の世であらうか。我が國の運命は果して何れの所にかゝつて居るであらうか。其の實際を見なければならぬ。余は日露兩國間に戰端を開ける當時、之獨り日露の開戰にあらずして、世界各國と戰端を開いたのである。世界各國の競爭場裏に立入つて、五大戰爭を開始するものであると述べた。これは決して一私言ではない、天下の豫言である。その通りに今日は第二の戰爭當に酣である。余は日露戰爭當時、兩國の戰鬪力を比較した表を壁に掛けて、日夜その增

減に注意する事を忘るゝ事が出來なかった。而して今日は之に代ふるに各國の富力表を掲げて居る。この表によれば米國の富力一千三百億であるが、今年は二千五百億に殖えて居る。我が國の財力を十分に見積つて二百億である。（現今の統計によると百十億餘である）。彼我の比較を以て相對せる昨年は如何なる結果であつたか、我が國は豫想した如くに困難であつた。我が二十三億の國債の半ばは外債である。利子丈けで七千萬圓といふ。この利子を仕拂ひ、經濟平衡をとる唯一の機關である貿易は如何。輸入超過は殆ど七千萬圓に垂んとす。外債の利子と、貿易に負けたる額とを合して一億何萬圓の戰鬪力を失つたのである。斯くの如き事が續けば到底破產である。然し之を僅に償ふものがある。それは海外に出稼ぎして居るものから送る金である。太平洋岸丈でも二千萬圓といひ、他を合すれば凡そ三千萬圓である。其の他外人が本邦に歷遊して落す金が二三千萬圓ある。年々五十萬の增加を見る我が人口が、世界を働き場として稼ぐに當り、之が成功したならば望みなきにあらざるも、その希望も益々防害を加へられて居る。邦人が第一の働き場として居る太平洋海岸は益々日本人排斥の熱が高まる。內國の財政は如何と云へば、之迄眞面目な態度をもてる商業會議所でも、この重稅では事業發達の餘地がないと漸く自覺した。國債は政府の借金ではない、我々の借金である。國債をもし一人々々に割當てれば老若男女の區別なく五十圓宛の負擔となるので、國民が壓迫を感ずるも當然である。さればと云つて國の事業を中止し、縮少する事が出來やうか。これ丈け世界に乘り出し、大戰を始めた以上世界より孤立する事は出來ぬ。而して現今のやうに國民が重荷に弱り、意氣銷沈の有樣では、著しく國力を削ぐものである。かくの如く內憂外患交々至つて、我が國の運命はどうなるであらうか。多くの愛國者が聲高く、我が國の運命を如何にせんと云ひ、徒らに喧噪の聲は聞ゆるが、眞に我が國の前途はかくあるべきであると、凡ての人心を調和統一して之を率ひ、國運を導くに足る政治家、實業家がどこにあるか。もし百年の方針立たずば、我が國の運命はどうなるか。今日は日露開戰の當時と同じく緩急の時である。一旦緩急あれば義勇公に奉ぜよとの詔勅を實行すべき時である。卽ちこの詔を我が五千萬の同胞が感銘して起たなければならぬ時である。殊に紀元節、憲法發布二十年の記念日たるこの紀元節に於て、深く日露の國難に赴けるやう私心を捨て、名利に束縛せられたる頭を破つて國家の爲公に奉ずる事が出來たならば、直ちに我が國の運命を挽回するに足るであらう。我が國は外患を以て滅ぼされたる事はない。國小なりとも、經濟力薄弱なりとも外國

の壓迫に堪へられなくなると云ふ事はない。只恐るべきは内の憂ひである。兄弟垣に鬩ぐ事である。今日の如きこの危急存亡の時に、なぜ我が國家は一到協力、私心を抛ち、名利を脱する事が出來ないであらうか。口に云ふ如く忠君愛國の精神あらば、何故大度量を以て人に對し、その反對説に對する事が出來ないであらうか。少しく注意して社會の現象を觀察したならば、明らかに了解する事が出來やう。我が政治家、我が有識者が必ずしも氣付かぬのではない。抛つて居るのでもない。然し至誠が乏しいのであらうか、其の方法が目的に適はぬといふ事は事實である。戰後の國力發展に際しても、之に相當して事業勃興を計る事は、大切であると云ふ事は何人も氣付いたが、然し其の方法は國家永遠の繁榮を計るに足るものではなかった。卽ち投機心を鼓舞し、人の弱點に乘じて虛榮心をおだてゝ、或は空元氣を付けんとするやうなやり方である。其の結果は覿面に今日の經濟難を齎して居る。かくの如くして果して何時世界の競爭場裏に起つに足る實力を養成する事が出來るであらうか。また一つ憂ふべき事は、我が國は大國の列に加はつたが、國民は未だ大國民の度量を缺いて居る。未だ人々の頭が狹い。故に心ある者が眞實の事をしようとすると、中傷離間を試みようとし、しかも其のやり方が甚だ卑劣である。丁度人の眠つて居る間に畑にそつと惡魔が烏麥を蒔くやうにこそ〳〵とする。社會の弊風を矯め、國民を教育するの任務を負へる教育家すらも尙往々偏狹に陷る事を免れないのである。少しく一家言に亘る嫌ひはあるが、近頃發刑せられたる女子に關した一書に、余が十三年前に著した「女子教育」の中に書いた事を、今日の高等女學校に行ふ事であるかの如く論難してある。然し少しく其の精神ある所を掬まれたならば、其の主眼は何所にあるかゞ容易に了解し得らるゝのではなからうか。又三年前櫻楓館開館式上、余はかの櫻楓館が全く女子の手でなつた事を喜び、女子自身の發展は、女子自身任じて計らねばならぬといふ意味に對して、其の例證に引いた所を指し、これを以て「財産を造る事が天職でない婦人に向つて、男子と同等なれ」といふものであると攻擊を加へてある。吾人は女子職業論に關してはなほ所信があるのである。然し開館式當日述べたものは、職業論とは少しく其の趣意を異にして居るのである。もし女子自身の發展は、女子が自任して起たなければならぬといふ事に批評を加へらるゝならば、吾人は喜んで其の説を聽き、之に對してなほ余の意見をも發表するに躊躇せぬのである。其の他女子高等教育等の問題に關しても、世間では暗々裏に妨害を加へようとする事は誠に嘆はしい極みである。もし當事者に向つて、堂々と意見

を闘はすならば、互に理由のある所に服し、結局は互の短所を補ふことが出來るのである。余は女子高等教育が、余の生涯に成就するものとは思はない。また非常なる困難に遭遇せずに進まるゝものであるとも豫期しないのである。然し一度國家を如何にせんと考ふるに至らば、あく迄女子高等教育の完成を計らずんば止まざる熱誠を以て、妨害を破つて進まねばならぬ。緩急あるこの時、義勇公に報じ眞に國家同胞の爲に赴かねばならぬ。天壤無窮の皇運を扶翼し、其の困難を打開せねば止まぬのである。然らば我々は如何なる態度を持つべきであらうか。

第一、擧國一致は勿論、時勢を憂慮すると共に、之を救ふに足る方法をもつて努力せねばならぬ。諸子は女子ではあるが、高等教育をうけて、女子も亦國民であるといふ教育をうけて居るからには、大いに國風を養ふ事に努めなければならない。昔幕府の或時代に國民の奢侈を禁ずるに當り、奢侈費は多く婦人の衣服裝飾費に費えるものであるとて、一切金銀の裝飾を用ゆる事を禁じ、衣服も絹布を用ゆる事を嚴禁した。然し掟によらずとも婦人自らの團體の方針によつて、大いに國の經濟の維持が出來るのである。近くは和蘭の皇后陛下は宮中で常に更紗を召される相であるが、之は質素を御奬勵になる事と、一方では自國のものをお用ひになつて、輸入を防がるゝ思召に出でたのであると承つて居る。故に高貴の人々が參内する時には必ず更紗を用ひられるとの事である。また獨逸皇后は軍人の夜會ではいつも白い綿服を着けられるので、その會の婦人は皆綿服を着て行くとの事である。余は必ずしも諸子に金銀の裝飾を廢せよとか、綿服に改めよとか云ふ嚴命を傳へ、または規則を設けない。然し男子の生み出した財産を消費する責任ある婦人が、質素儉約し、體力も能力も金力も、努めて有効に用ひ、無益の費えを省く事を心掛けなければならぬ。金持が綿服に甘んじ、ダイヤモンドを公共の爲に捧ぐる事は却つて美である。諸子は國家の經濟を知ると共に家庭の經濟を知らねばならぬ。健康と便利との妨げとならぬ限りは節儉を重んじ、一文でも冗費を省く事を努めねばならぬ。

第二は積極的の方針をとるべきである。女子と雖も、一朝家産の傾いた時は、相當の職業を營んで、家運の挽回を計らなければならぬ。今日の如き國家の經濟難に遭遇して、なほ女子であるからとて傍觀して居る事が出來るであらうか、あらん限りの力を出して幾分なりとも國家の危急を救ふの覺悟がなくてはならぬ。且從來我が國貿易の十分の七は、婦人の手に依つて出來て居るのである。微力であるからとて、決して侮るべきものではない。益々一般婦人の副業を盛んにしたならば國家經濟を

助くる事も、蓋し少くはないであらう。副業とは本校に聊か試みて居るが如き消費組合、信用組合の如き、或は實業部、牧畜部、園藝部の如きものを、個人的に或は團體的に營む事である。殊に農藝の如きは、地方婦人の副業として、益々奬勵する事が必要である。而してかくの如く女子が國民として捧ぐる事によつて、女子の力を著しく發展せしむる事が出來るものであると信ずる。

この紀元節に當り、印象せられたる我が國の豫言とも云ふべき皇祖の詔をくりかへし、各自の責任ある所を悟つて、眞に私を捨てゝ義勇公に奉ずるの覺悟を定めなくてはならぬ。

（「家庭週報」第百三十三號・紀元節式辭）明治四十一年二月

## 眞相如何

學生の費用に關する點、元來世間の攻擊批難といふものは、丁度時勢に合うた言葉を以て、巧みに人心に投ずるものである。近頃本校に對してもハイカラといふ批評を下す事を大分耳にする。ハイカラとはどういふ意味であるか、甚だ了解に苦しむのであるが、此の間も或新聞に女子師範學校と日本女子大學校との食物を批評してあるのに、女子大學の上にハイカラといふ見出しを置いてある。何の事かと讀んでみると、女子師範では一ケ月四圓五拾錢で賄ひをして居るが、女子大學では六圓五拾錢である。そして兩方の食物は斯く〳〵である。故に女子大學はハイカラであると書いて居る。これで見るとハイカラとは金を餘計に遣ふ、若しくはよい物をたべると云ふ事をさした樣にも聞える。又或人の詞に、女子大學では、どうも着てゐる物から凡てが華美であつて、どうしても一人一ケ月に四十圓から遣つて居る者があるとの事である。然るに先日寮監に調べて貰つた統計によると、本校の寮生が今年二月の入費は、食料、月謝、一切こめて、八百人全體の平均額は、大學部三年生　十五圓七十四錢一厘、同二年生　十五圓七十九錢四厘、同一年生　十四圓八十一錢、高等女學校生　十四圓九十錢、と云ふ有樣で、先づ十五圓平均である。この中六圓五十錢が食料であり、大學部は三圓五十錢高等女學校は三圓の月謝と校費とを拂つて居る。裝飾費としては大學部三年六錢八厘、同二年十四錢、同一年十一錢五厘、高等女學校生徒が十五錢九厘といふ工合である。入費の最少額は十三圓で、最大額が二十圓であるが、之は極めて少數で、且二十圓といふ者の內容を調べて見ると、書籍又は藥代といふ臨時の入費を拂つて居るのである。

衣服に關する點、なほ一つ着物の事であるが、これは先年某

女學校で、數名の女教員を派して都下の各女學校の服裝に就いて調べられた事があつた。然るに世間で華美であるといふ本校生徒の衣服が非常に質素の地質を用ゐて居つたといふ事につき、一驚を喫せられたとの事を發表された。本校は勿論、質素を旨とするが、さればと云つて着物は双子に限るといふ樣な制限はたてないのである。もし制限をたてれば學校に居る間は質素になるであろうが、社會に出てもなほ制限を以て壓制する事は出來ない。しかのみならず、たとへ質素のものであらうとも、其の品質、縞柄又は色合等を選ぶ趣味は、充分に養うて置く必要がある。而して本校の學生は適當な服裝はして居るが、却つて皆身分不相應に質素のものを用ゐて居る。

運動會、文藝會に關する點、本校の運動會には多數の人を集めると云ふ批難をするものがあるが、大いなる關係を有するこの學校としてはその多數は無理ならぬ事である。千何百人の生徒の父母保證人、及び八百何人の賛助員に御家族御同伴の案内狀を發せねばならぬ。勿論これらの關係者も無制限といふ譯ではなく、生徒には二枚の入場券を與へるきりで、且一般に青年男子の入場を拒絶して居るのである。而してこれまでは、高等女學校にも父母懇談會がなかつたので、運動會は家庭と社會との聯絡を計るに必要なる機關であつた。且女子教育上問題となつて居つた體育に關し、本校では歐米の先例に省み、我が國の現狀に鑑みて、大いに力を用ゐたので其の體育の狀態を發表する事は、また決して無益でないといふ確信もあつたので、また學生の側から考へても運動會は、獨り體育の爲のみならず、品性、實力を作る上に有効であつた事は疑ふべからざる事である。

また本校の文藝會は如何なるものであるかといふに、今日の學問が形式に流れて居るが、本校では教場で習つた事を實際に施して見る事に重きを置くので、文藝會の如きは、この教育主義に缺くべからざるものである。のみならず、人間には高尚なる樂しみといふものが必要である。それで始めは寮舍の土曜會に生徒の工夫した餘興を試み、また一方では文學部の研究會に試みた文藝會が一緒になり、全く學生自身の想像、感興から一種世間と異つた文藝が生れ出たのである。

本校生徒の人員に關する點、また一つ本校があまり大き過ぎはせぬかとの心配をする人々もある樣である。高等師範でも一組が廿五人であり、歐米でも最も完備した學校は、生徒が極めて僅である。余が遊學したクラーク・ユニヴアーシテイーの如きは、米國でも有數の大學であるさうであるが、その當時五つ計りの部門に分れ、生徒は僅に六十名計りであつた。その少數

の生徒の爲に學校は莫大の金を費して、多くの教授を聘し、立派な設備をして居つた。本校では大學部が四部であつて、その下に高等女學校、小學校、幼稚園がある。高等女學校は定員四百五十名で、一人でも超過はして居らぬ。小學校、幼稚園は一組十四五人でこれは理想の數である。家政科は嘗て百名の人員を置いたが、それが爲には料理室、理科室等の設備を增したのである。文學部は四十名から二十五六名、教育部は一級五十名でこれが一部（數學）と二部（博物）とに分れて居る。而して教授も出來る丈け各方面の有數の人々を選んで居る。要するに只徒らに設備もなく、教員も不足であるのに、生徒ばかりを收容するのでなく、設備が許し、教員の手の行き屆く限りに於て生徒を收容して居るのである。

（「家庭週報」第百三十七號・附屬高女父母懇話會）

明治四十一年三月

## 第五回卒業式告辭

來賓諸君、父兄保證人諸君、本日は諸君の御列席を得て、本校大學部第五回、並びに附屬高等女學校第七回の卒業證書授與式を擧行する光榮を擔ふ事は我々一同の深く喜ぶ所である。余が女子教育に身を委ねて以來、今年は丁度滿三十一年となるが、今回の如く滿足して卒業生を出した事はないのである。今回の大學部卒業生の中には、本校の開校當時から高等女學校に入學して今日に至つたものが凡そ四分の一ばかりを占めて居り、從つて本校の主義方針に長く養成せられたものが大多數である。此の間種々の困難迫害に遇うたが一度も迷うた事がなく、最も忠實に學藝を勵み、最も熱心に品性の修養に勉めたと云ふ事が出來る。これ諸教授の懇切なる薫陶及び本校關係者諸氏の終始渝らぬ深き同情によるはもとより、本校の四圍の境遇宜しきを得たると、卒業生自身の非常なる奮勵に加へて、今回卒業生が大學部に入學當時始めてとつた指導者の指導よろしきを得たる事とは、否むべからざる事である。今年の卒業生に於て、我が國女子教育の長く理想として未だ實現し得なかつた學風をつくり、品性修養を成就したのである。これを明治の女子教育の結果、殊に女子高等教育の結果として、列席の諸君に御紹介する勇氣を持つて居る次第である。かゝる結果を見るに至つた内容を問へば凡そ四つとなるが、就中最も困難にして今年の卒業生と雖も、なほ將來に完成を須たなければならぬ點を擧げて告辭に代へたいと思ふ。

余が毎年の卒業式に述ぶるが如く、卒業式は決して業を卒へ

たのではなく、始業である。卽ち漸く高等科を終へて大學生活に這入るので、今から眞の學問を始めてゆくのである。卒業生は何時もこの決心を以て出るが、いかにせん今日迄はこの決心を十分に貫徹する事が出來なかつた。之は獨り本校の卒業生のみならず、我が國男女の高等教育、專門教育を施す學校に於て、其の實を擧ぐる事が出來なかつた。本年の卒業生も三年の間深く研究したが、卒業の間際迄、果してその目的が達し得らるゝか否か疑問であつたが、今日は各自が之迄我が國に出來なかつた大學教育を完ふする覺悟と、今後萬難を排して進むといふ自覺を以て、この卒業式に臨むことが出來たといふ事は非常に滿足に感ずる點である。今後必ずこの目的は達せられ希望は實現し得らるゝであらうと信ずるが、一方に於ては前途につき、深く心配せざるを得ないのである。卒業生諸子は、今後愈々本校で養つた精神的生命を發展し、またその目的を達するに必要なる境遇を啓かなければならぬ。これが諸子自身の働きによつて、生涯益々完全に出來てゆくには、如何なる方法如何なる努力を要するかは、今日深く考ふべき問題と思ふ。余は一言以て之に答ふるに、今日迄本校で養ひ來りし、大學生活を家庭に、社會に、學校に擴大する事が出來なければ、到底その望みを達する事は出來ぬ。諸子の昨日迄の大學生活は誠に幸福なものであつた。卽ち各自、品性修養、個性の發達を努むると同時に、相互に理想の關係を保つことに努むる完全なる校風の下に育てられた。換言すれば健全なる學校内の空氣を呼吸して、不知不識の間に諸子の知識、品性の發展を遂げ得られたのである。然るに今日から諸子はこの暖い母校を遠く離れて冷酷な社會に門出し、その間に立つて母校の精神を擴大しなければならぬ。今日我が國の社會を支配して居る空氣は、果して諸子の燃ゆるが如き希望を消しはしないであらうか、今漸くめざし初めた或崩芽をとり去りはしないであらうか、思うて此所に至れば、めでたかるべき諸子の出陣を祝すると共に、萬感交々至つて余が頭は碎けんばかりである。過る兩三ケ月間我が國の教育家及び有力なる指導者は、本校の教育の傾向に如何なる注意を拂はれたか、如何なる感動、元氣を青年男女に吹き込まれたか或は新聞、雜誌の誤報かも知れぬが、その言葉は慥に我が教育界に流行し、全國の空氣を支配するに十分の力をもつて居つた。その言葉とは「高等教育は男子と雖も職業教育である。故に女子の高等教育も職業教育である。その職業教育は少數の不幸なる女子のうくべきもので、師範學校の生徒も不幸であるが、その中でも教育はまだしも勝れるものである。我が國唯一の自由なる女子高等教育を受くる女子大學の卒業生は、先ず其

の價値は下女頭となる位のものである」と。余は今かゝる教育上の幼稚なる問題を論ずる必要はない樣にも見えるが、隨分有識者と目せられて居る人がかゝる偏見を抱いて居る爲に、折角志を立てゝ高等の教育を受けんとする者を挫折せしむる事は決して少なくはないのである。かくの如き說が世間に流布するに於ては、今後いかに卒業生が力を入れても、其の目的が達しえらるゝか否か甚だ心配に堪へぬ次第である。それで卒業生の指導の地位に立たれん事をのぞむ來賓諸君に、我が國の女子高等教育の主義と云はんか、理想と云はんか、聊か余の所信を訴へ、卒業生自身も亦獨斷的でなく十分に材料を蒐集して、かゝる問題を判斷しうるやう、過日來研究した結果を申し述べたいと思ふが、時間に限りがあるので極く簡單に云ふ事とする。

女子高等教育は職業教育であつて、少數の不幸なる女子のうくべきものであるとの說は、我が國の將來に適ふ學說であらうか。また我が國が一致協同して進まねばならぬ歐米の教育を支配して居る考であらうか。今日我が國の前途を憂ふるもの、また國家の原動力を養はんと思ふものはさういふ薄弱なる理想の上に我が國の教育を建設する事は出來ぬ。高等教育は無論、職業教育を目的として居るが、然し高等の職人を作る意味ではなく、十分人格を養ひ、その土臺の上に專門の職業を築くべきであつて、畢竟、高等教育の目的は國民性を完全に發揮する、人道主義の目的を完ふする、近くは個人の理想を實現し、國家の運命を開拓し、人類の改善進步を計る事が理想である、目的であるにちがひない。例へば獨逸が貴族僧侶の專有であつた教育の權を擴大し、普通教育を普及したのは、國力を維持發展する、所謂富國强兵の目的に出たのである。ナポレオンの戰爭が獨逸の義務教育を擴大し、英國が自由教育をとつた事等、皆悉く國力の發展上に關係のないものはないのである。我が國に於ても商工業の戰に堪ふべき財源は如何なる所に求むべきか。二千五百年來國民の精神をつくつた大和魂を永久に維持するには、何によるべきか。云ふ迄もなく我が國の青年男女に求むるより外、途がないのである。ゲーテは國の運命は廿五才以下の青年の輿論に關はると云つた。その青年の元氣を養ひ、理想を育つる原因となる所のもの、凡ての國の土臺をつくるに最も深き關係、最も强き感化力をもつてゐる婦人の教育は、只飯を炊き、下女頭で足れりとするか。高等教育は只職業といふ物質一方を授くるを以て足れりとするか。我が國の運命は果して物質的文明により形式の知識によりてのみ維持せらるゝであらうか。否偉大なる理想を滅却しては到底物質的文明をも見る事は出來ない。我々は今日の如く沈滯し、腐敗した空氣の中に生存

して居る事に甘んじて居る事は出來ない。宜しく社會に新鮮にして健全なる空氣を滿たす事に努めなければならぬ。然らば其の方法は如何。世間の人々が今日迄、大學は學校の中にのみあるものと考へて居るが、學校をして、家庭にも、社會にも到る所に成立せしめなければ、現今の暗黑世界は光を得られないのである。男女とも終生學問研究を續けて知識を養ひ品性修養につとめ、團體生活を離れざる所謂大學生活が往くとして行はれざる所なきやうにならねばならぬ。換言すれば國家の凡ての機關が大學化しなければならぬ。之を稱して大學擴張といひ、また實に社會國家の空氣を新鮮にし健全にする方法である。この大學擴張なるものゝ內容を問へば、第一、大學は男子は廿五才以上、女子は廿一才以上の大人の學ぶ學校である。第二に、これ迄の學校は生涯の事業の準備の爲に過ぎなかつたが、玆にいふ大學は天職と並んで進まなければならぬ。卽ち讀書と實際とが伴ひ、思考と活動とが並び行はれ、理想と實行とが一致する事が出來て、生涯の間進んでゆく事が出來得べきものである。第三は、これ迄の大學は富有の人、貴族、僧侶等一階級に限られて居つたが、今後の大學は貴賤貧富の別なく、男女の區別なく、凡ての國民に擴大せらるゝものである。而してこの大學教育を受くるに當り、先づ境遇を開拓する事が大切であるが、また內から出づる精神の力に須たなければならぬ。我々の精神は決して固定してゆくものでなく、今後十分の食物を與へなければ發達する事が出來ない。生涯知識を渴望し眞理を求めて止まぬ、卽ち心の中から求むる力が永久やまぬやうにならなくてはならぬ。次ぎに大學擴張に最も大切なる事は一人では出來ぬ事で、共同の事業である。輿論が賛成して、教育の興味が普及し、其の價値を全體が認むるやうにならなければならぬ。卽ち個人の修養と共に、理想的の團體をつくらなければならぬ。今年の卒業生には、其の理想的の團體が出來、殆んど宗教的の生活が營まれたのである。而して大學擴張の事業はもはや開始せられて居るといふ事が出來る。卽ち卒業生中、其の感化は弟妹に及んだのみならず、父母兄姉にも及び、一家庭、同じ生命を樂しんで居る者が尠からぬのである。この尊い精神は本校に這入つて自覺し益々鞏固になつたのであるが、其の根源は母から、或は祖母、曾祖母からうけて居るのである。我が國の婦人は決してつまらぬものではない。己の身を捧げて家を思ひ、國を憂ふる、貴き犧牲の精神の權化であつた。かの第一の維新を營める志士を生んだ母であつた。其の子孫である諸子に第二維新を成就する力のひそんで居る事は不思議ではない。第一の維新に貢獻した諸子の母や祖母の中でも、はや故人となられた方

を擧ぐるのは敢へて差支へない事と思ふので、一例をあぐれば、本年高等女學校を卒業せられた鶴原氏の曾祖母君に當る野村望東尼の如きは、家にあつては誠に理想の良妻賢母であつた。女らしき女であつたが、また國を思ひ、國家に一身を捧ぐる事に於ては、男子に勝るとも劣らなかつたのである。身は恰も維新の大業を遂ぐる頃に遭遇せられ、勤王の志士を助けて幕府方からは捕へられて、獄に下され、島流しにもなつた。嘗て捕はれて我が家を立出づる時、

かへらでもたゞしき道の末なれば
たれもなげくなわれもなげかじ

と。また或時、

ものゝふのやまと心をより合せ
末一すぢの大繩にせん

末一すぢの大繩にせんといふが如きは今日我々がいふ理想的關係とも聞へて、誠に感深くよまれるのである。十九世紀にはダアウインの生存競爭といふ思想が社會を支配して居つたが、今世紀はこれに加ふるに、相互に扶ける所謂相互扶持の思想を以て、人生を說明して居る。これによつて個人主義と社會主義、帝國主義と平民主義・帝國主義と萬國主義とが調和統一せられて、人類は今一段高尙の域に達する事が出來て居る。四十年前の我が國婦人がこの立派なる思想を簡單なる言葉に殘された事は、いかにも興深き事であるのみならず、この一首の歌が代表して居る當時の婦人の精神は諸子の心に殘つて、必ずや今後彌々美はしく培養せられて、花も咲き果も結ぶであらう。諸子の使命は重くある。然しこれを成就しうる希望は、十分に認める事が出來るのである。幸に自重、自愛せられん事を。

（「家庭週報」第百四十號）明治四十一年四月